Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

558

558-59

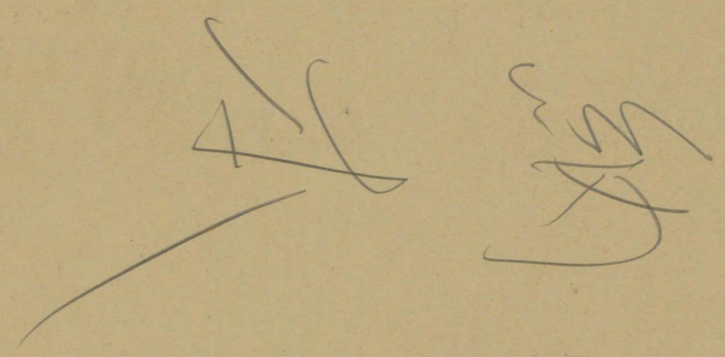
12005015113 92

隨筆

四方山の話

三浦藤作著

帝國教育會出版部版



宋國舘

隨筆

四方山の話

昭和二・六・廿 内務 帝圖

558~59

四方山の話

目次

夏の旅

千本松原……一
修善寺……一〇
西浦海岸……二〇
夏の旅日記……三〇

秋郊雜記

初秋の郊外より……五一
形原村の思ひ出……六一

秋窓雜記……六七
或る友へ……七五
塙檢校の墓に詣づるの記……八一
中島半次郎氏を悼む……八六
窮迫先生……九〇
泉村君……九五

閑言敢語

新秋雜想

九月一日……一〇五
勝地の保存……一〇六
太鼓の遠音……一〇八
社會への暗示……一一〇
新聞觀……一一一

神經衰弱……一一一
初秋の中野……一一三
天災地變……一一四
學問と情實……一一五
孤立無援……一一六
世渡り上手……一一七

秋郊ところどころ

丸子多摩川……一一九
城西學園……一二〇
長崎村……一二三
西新井大師……一二五
所澤……一二九
武藏野の落日……一三一
八王子……一三二

忙窓閑話

徒然草の註釋……一三五
學者氣質……一三六
桐葉章……一三七
新刊紹介のこと……一三七
思ひ出の一つ……一三八
感想の一つ……一四〇

消閑放言

文章奉仕……一四二
逆境の友と順境の友……一四五
清濁併せ呑む……一四六
有名無實と無名有實……一四六
環境の變化……一四八

人間の晩年……一四九

街頭所見其の折々

惡劇の流行……一五二
幕末及び明治初年の印刷物……一五六
種彦の自筆稿本……一五八
月岑の法會……一六二
一茶の遺墨展覽會……一六二
舞臺に上つた鬼熊劇……一六四
春宵小言……一六六

四方山の話

武藏野の逃げ水……一六九
鉢の木……一七一
青の洞門……一七五

嘘から出た實……一八一
紺屋高尾……一八九
文人氣質……一九五

漫談牛のよだれ

ものの間違ひといふこと……二〇七
記憶は恃み難きものなること……二三〇

春夏秋冬

綠映紅……二三七
蜀魄啼……二三八
楊柳新……二三九
夏雲多奇峯……二四〇
薄暮雲消……二四一
竹梢の微風……二四三

靜夜思……二四三
秋風動禾黍……二四四
樹蒼黃……二四五
青燈の一穗……二四六
新春籠居……二四七
花濺淚……二四八

春日小景

春十題

春雨……二四八
桃の花……二五〇
微風……二五〇
藤棚……二五一
野道……二五二

高嶺の櫻……二五四
金魚……二五五
高尾の山百合……二五五
新宿附近……二五五
郊外の夜……二五八

湘南行

小田原急行線……二五九
熱海の印象……二六二
湯河原……二六三
根府川海岸……二六六
早川驛……二六九

隨感隨想

大正年間教育の追想……二七一

哲學に關する一家言……二七五
教育操觚生活十五年……二八三
石川榮八の傳記に就いて……二九四
「體驗に基づく學校經營指針」跋……二九九

—(目次終)—

夏の旅

千本松原

×

驛の前から千本濱行の自動車に乘つた。

沼津の驛には、自動車が多かつた。千本濱行、靜浦行、三島行、原行、三津行、其の外にもあつた。一々記憶して居ない。

自動車は中々出なかつた。二十分ほど、車上に座して、ひとり發車を待ちあぐんだ。運轉手はガソリンを滿たして居た。

暑い日であつた。風が少しもなかつた。ヂリヂリと路上の砂利に照りつける夕陽（ゆふひ）は、赤く爛（ただ）れて、紫色を帶んで居た。

六時何分かの下り列車が着くと、改札口から吐き出された男女の客を迎へて、自動車は忽ち滿員になつた。

運轉手はハンドルを手にした。

自動車は勢ひよく疾走した。町の角を二三度廻はつたと思つたら、もう濱邊に着いて居た。鐵道省の旅行案内を見ると、千本松原は、沼津驛の南十四町としてある。

數人の乘客をそこに殘して、自動車はまたもと來た道を歸つて行つた。

×

日は全く沈みはて、夕陽がほんのりと空を彩つて居た。

終日の灼熱に疲れた海は、靄のやうに煙つて居た。

濱邊の家からは、電燈が美しく輝やいて居た。紅や白の幕をめぐらした葭簀張りの納涼臺からは、レコードの浪花節が聞えた。海水浴場によくある情景であつた。

濱邊には夥しい人が群がつて居た。沼津の方から出て來る人も絶えなかつた。薄暮の海の中で水浴をして居る男女もあつた。

×

海に近い見晴しのよい旅館の一室に、汗じみた浴衣を脱ぎ捨てた。

「地曳網が上る。」

と云つて、人が濱邊の方に驅けて行くので、庭下駄をつつかけて、多くの人々のあとに續いた。

小舟がだんだんと磯端へ近づいて來た。裸體（はだか）の男が七八人で掛聲をしながら太い綱を曳いて居た。

網は上つた。網にかゝつた魚を見やうとする人は、次第に多くなつた。

黄昏の濱邊には、人の山が築かれた。人を呼ぶ聲や、呟く聲がひとしきりどよめいた。

どよめきは、いつとなしに靜まつた。群がる人々は、雪崩（なだれ）のやうにくづれて行つた。

後には裸體の漁夫が網を洗つて居た。

「つまらない。骨折損だつた。」

と云ひながら歸つて行く者もあつた。雜魚が七八匹はいつたばかりであつたと話して居た。

×

食事をすまして風呂を浴びた。湯から上ると直にまた濱邊へ出た。

風が少しもない。夜になつても暑かつた。苦熱に堪えかねた人々は、みな濱邊へ出て居た。繫いであるボートの上に腰かけて居る者もあつた。石濱の上に寢ころんで居る者もあつた。

空は暗かつた。暗い空には細い弦のやうな月が照つて居た。

星は美しく瞬いて居た。天の川は長々と横はつて居た。

「もう七夕様の頃かな。」

と考へた。月を操つて見ると、二三日たてばたしかに七夕であつた。

幼い時のことを思ひ出した。赤や青や黄や紫や、様々の短冊に、歌や俳句を書いて、青笹のついた竹の枝に縛りつけたものだ。短冊に書いた句には、

荒うみや佐渡に横たふ天の川

といふ名吟もあつた。

久方の天の川原の渡し守　君渡りなば舵かくしてよ

といふやうな甘い戀歌もあつた。

天のたなばたおいとしゆでござる——

といつたやうに、尙ほ一層調子を下げた俚謠もあつた。

牛をひく男と機を織る女とが、年に一度づゝ川を渡つて逢ふといふ話は、幼少の頃から聞いて居た。

短冊を結びつけた竹を、庭の眞中にさして置き、前に机を並べ、机の上に西瓜や茄子や梨や柿のやうな果物を載せた。田舍の子ども等に、七夕祭は、最も樂しい行事の一つであつた。

久しく七夕祭を見ない。都會の生活をするやうになつてから十四五年、一度も見ない。今でも昔のやうな習慣が殘つて居るのか知ら？　それさへも知らない。天の川を仰いで、昔の七夕祭を思ひ出した。竹の枝につけた短冊の句を思ひ出した。

×

波打際の石の上に腰を下ろした。

風は少しもなかつた。疲れはてたやうな波の音が足下に呟やいた。

伊豆の山々は、黑く水の上に聳えて居た。沖には點在する漁船の灯が瞬いて居た。

「今夜のやうに暑い夜は、今までに一度もなかつた。」

「何しろ、風が少しもないのだから——」

濱邊の人々は、みな同じことを言つて居た。

夜は次第に更けて行つた。波の音はだんだんと高くなつた。

沖合から波がもて來る空氣には、しつとりと濕(しめ)りを帶んで居た。その空氣がひろがるに從つて、晝の苦熱に燻つて居た天地は漸く冷却して來た。

少し涼しい風が出た。

×

一時頃まで起きて居た。まだまだ暑くて眠られさうにもなかつた。

三度、四度、濱邊に出た。

人は大方散じた。星明りにすかして見ると、渚に繫いであるボートの腹が白く光つて居た。

沖の方から明るい灯が眞一文字に磯端を目がけて走つて來た。二三丁先きまで來ると、方向を左に轉じて忽ち遠く去つた。モーターボートであつた。灯は間もなく遠ざかつた。螢火のやうに小さくなつた。

不意に唄聲がした。無料脫衣場の寢臺に寢そべつて居た學生の一群がデカンショーを唄ひ出した。

其の中に唄聲も止んだ。沖の漁火は少しも動かない。同じ場所に明滅して居た。

更けてゆく夜の海は靜かであつた。

×

室の中にはいつた。蚊帳が吊つてあつた。椽側の戸は明け放したまゝになつて居た。

蚊帳の中は暑かつた。

「到底今夜は寢つかれさうにもない。」

汗は玉のやうになつて出た。手拭を取つて額を拭いた。濡れた手拭は、いつの間にかもう乾いて居た。

床の上に仰臥して眼を閉ぢた。少しも眠られなかつた。眼はだんだん冴えて行くばかりであつた。

天井につるした電燈をめがけて、羽虫が澤山集まつて來た。大きな黃金虫が灯のめぐりをせゝつて居た。襖や障子に突き當つた。それが氣になつて益〻神經が興奮した。

起き上つて電燈を消した。室の中が暗くなつた。中が暗くなると、外のあかりがさして來た。

頭をあげて外を眺めた。恍惚としたやうな海の光景が眼に映じた。

浪の音が聞え出した。

音は次第に高まつた。

×

とうとう徹夜少しも眠られなかつた。

時計が三時をうつた頃、裏の林の中でブランコを搖つて居る子どもの聲が聞えて來た。

頭をあげて海を眺めた。

海の面はまだほの暗かつた。

ほの暗い水の上に薄明りがさして來た。

沖に瞬く船の灯はだんだん白けて行つた。

東の空に紅が流れた。

起きて椽側の硝子戸をあけた。凉しい朝風が吹き込んだ。

×

濱邊へ出た。

海は薄もやにつゝまれ、地はしつとりと夜露に濡れて居た。

水を隔てた伊豆の山々は、眼ざめたやうに、活々とした色を帶んで居た。

濱邊を歩いた。

石濱は遠く續いて居た。もとは美しい砂原であつたが、海嘯に洗はれてから下の石が出てしまつたのだと、昨夜話して居た人があつた。

波うち際から松林まで、細かい白い砂に蔽はれた昔の千本松原は美しかつたであらう。拳大の石が累積せる今の千本松原は、たしかに濱邊の風致を失つた。白砂青松の渚によくある女性的の優艶な自然美を、もう其處には見ることが出來なくなつた。

×

裏の松林へはいつた。

大小樣々の松が列をなして居た。潮風に吹き撓められた枝ぶりの面白い松もあつた。矗々と天に沖するやうに伸びた松もあつた。

老松新松、參差として枝を交へた林は、箱庭のやうな感じを與へた。

歩く度毎に、下駄は輕く砂の中に食ひ入つた。砂の上には松の葉がこぼれて居た。

幼ない時の記憶に殘る子守唄を口ずさんで見た。

×

倒れかゝつた古木の根に腰かけた。

林の繁みによどんで居る朝の空氣は、一しほ冷たかつた。

砂の上を這ひまはる蟻を眺めて居た。

風が梢を搖がして過ぎ去つた。松の葉がまたこぼれて落ちた。

濱邊へ出る通路に人聲がした。林間學校の生徒の一群が通つた。俥の音が聞えた。走つて來た自動車が止まつた。

日が出た。海一ぱいに光りが輝やき初めた。

（大正十五年八月）

修善寺

×

電車は修善寺驛に着いた。

驛の前には宿引が澤山出て居た。

うるさくつきまとふ宿引を避けて、温泉場行の自動車に乘つた。

子どもを二人つれた夫婦が、あとから同じ車へ乘り込んだ。洋服を着た男は、四歳ばかりの男の子と先に乘つた。よく肥つた赤ん坊を抱いた女は、あとから乘つた。乘る時に柱へあたまをうつつけたので、赤ん坊はわつと泣き出した。夫婦の間に輕いいさかいがはじまつた。

「少し氣をつけろ！　あたまをゴツンゴツンぶつつけて居るじやないか。」

「大きなことをお云ひなさるな。一寸さはつたばかりですよ。」

五十歳がらみの商人らしい男がまた二人乘り込んだ。一人は黑い大きな鞄をもつて居た。腰かけると直に取

引先の話などをはじめた。

外に紺の印絆纏を着た宿引が二人、合せて九人を乘せた自動車は、勢ひよく走り出した。

桂川の橋は落ちて居た。小舟の上に板子を並べた假橋がかゝつて居た。自動車は、其の假橋の上を走つた。

橋を渡つてしまふと山路にかゝつた。

山と山との間に谿川が流れ、川に添つて田圃がひらけて居た。路は田圃の間を曲りくねつて居た。

車が進むに從つて、山と山との間が狹くなつて、道はだんだん嶮しくなつた。

やがて道の兩側が家になつた。そこが温泉宿のあるところであつた。

自動車は菊屋別亭と記した家の前へ止まつた。子供づれの夫婦と宿引の一人が降りた。女中が玄關に客を迎へた。ふき清めた板椽が奥の方へつゞいて居た。谿川の崖に建てられた涼しさうな家であつた。

自動車はまた走り出した。走り出したと思ふと直に止まつた。止まつたところが終點であつた。「あさば」といふ文字を染め抜いた宿引が、「どちらへおとまりですか。」ときいた。「どこといふアテもない。」と答へた。

宿引はそのまゝそこの石の門のある大きな家の中へはいつてしまつた。洗ひざらした浴衣一枚にバスケツトがたゞ一つ、外には何も持つて居なかつた。これでは宿引が強ひてすゝめない筈だと思つた。

×

千本松原で旅商人から聞いた家を探して見た。

汚い家であらうと思つた。木賃宿ではないかとも思つた。木賃宿でもかまはなかつた。田舍の百姓が出て來て泊るやうな家といふのが面白かつた。さうした家へ泊つて見るのもよい經驗であると考へた。

家は直にわかつた。裏の方にあつた。汚い家ではあつたが、木賃宿といふほどでもなかつた。素人下宿といふ感じのする氣樂な宿であつた。

玄關から案内を乞ふと、主婦らしい女が出て來て、

「お生憎さまですが、室がみなふさがつて居ますので、お合宿でよろしければ——」

といつた。合宿でけつこうだと答へた。

二階の一室に通された。同宿の人に挨拶した。二十三四歳の青年であつた。學生でもなく、商人でもない男だと直覺した。その直覺は誤まつて居なかつた。青年は三島の者であつた。建築の仕事に關係して居る男であつた。神經痛の爲めに、長い間遊んで居ると云つた。全快すると學校へはいつて、專ら製圖や設計の方をやりたいと云つた。

風のないあつい日であつた。西日がさして室の中は殊に暑かつた。

裏山の木立の中では、蟬がみんみんと鳴いて居た。

×

手拭をさげて外へ出た。此の家には内湯がなかつた。共同湯へはいらなければならなかつた。

共同湯は數箇所にあつた。鐲鉆の湯、石湯、箱湯、ちんの湯等の名がついて居た。先づ川の眞中の岩の間から湯が湧き出て居るといふ鐲鉆の湯へはいつて見た。弘法大師が杖で探つてはじめて此の湯を發見したといふ由緒のあるものであつた。千本の濱できいた旅商人の話が面白かつた。弘法大師が四國から投げつけた錫杖が岩の上に突き立つて、其處から湯がふき出したので、今でも其の錫杖がもとのまゝに殘つて居るといふのであつた。

宿できいた通りに行くと、川の眞中に板で目かくしをした浴槽らしいものがあつた。橋を渡つて其の中へはいつた。低い橋であつた。一二尺ほど下を水が流れて居た。川は淺かつた。底の岩や小石が所々に露出して居た。澄んだ美しい水であつた。目高の泳いで居るのもよく見えた。

岩の間に湯が滿ちて居た。浴槽は自然の岩石をきり割つてつくつたものであつた。衣服を脱いで湯の中に身體を浸した。

晝の湯は靜かであつた。田舍ものちしい老婆が一人岩に腰かけて居た。時々思ひ出したやうに口から念佛が漏れた。

目かくの間からさし込んだ日が、斜に浴槽の上に落ちて居た。

少し濁つた湯の上には、ギラギラとした脂が浮いて居た。

岩の上に錫杖の形をした石が立つて居た。これが四國から投げつけたものかと思つたら、旅商人の話が更に一層面白くなつた。湯の中からこれを眺めながらふき出した。四國から投げつけたこともあまりに荒唐無稽だが、此の大きな石燈籠のやうな杖をつく人が見たかつた。天下の奇蹟をひとりで引受けた弘法大師にしても、餘りに魂消た話であつた。此の石はあとで立てたものに相違なかつた。杖の尖で突いて見て湯の出るところを見出すなどは、弘法大師にありさうなことであつた。湯の出ないところから湯を出したのではなく、湯の出て居るところを見出したものであらう。茸狩の名人が松茸を探し當てるやうに、凡人の氣づかない溫泉などを早く見出すことの巧みな人もあつたであらう。凡人よりも多少敏感な人の事績が傳說化されて、弘法大師の奇蹟のやうな話を生み出したに相違ない。さう悟つてしまへば、弘法大師の有難味も大分なくなつてしまふが、荒唐無稽な話をほんたうにあつた事のやうに信じて居る善男善女の多いのにも驚ろかされた。溫泉が萬病にきくと思つて居る田舍の老人たちは、みなさうした善男善女であつた。

しばらくたつと、二三人の浴客がはいつて來た。みな老人ばかりであつた。その中でも一番若さうな一人は、背中にも腹にも膿をもつた腫物が出來て居た。いやな病氣らしく直覺された。共同湯の不潔を痛感した。梅毒にきくといふ此の湯には、もつともつと汚ない病人が絶えず身體を浸しに來るであらう。病氣の治療どころか

健康な身體に惡病を傳染させるやうなことがないとも限らぬと思つた。

急いで湯から上つた。目かくしの下をくぐつて川の中へ出た。

湯上りの皮膚を川風に吹かれるのは、よい心地であつた。そればかりは溫泉場でなければ味はれないものだと思つた。濡れた皮膚は忽ち乾いてしまつた。滑らかになつた肌には、湯の香がかすかに殘つて居た。

足もとを流れる水を見た。川の底はみな岩の床になつて居た。床には高低凸凹種々の變化があつた。其の間を美しく澄んだ水が流れた。懸りては瀧となり、淀みては淵となるといふ溪流の特徴を備へて居た。崖の上に建つた三階や四階の溫泉宿が軒を並べて、溪谷の美觀を臺なしにしてしまつた。高い窓の上から見下して居る女もあつた。テーブルを圍んでサイダーなどを抜いて居る家族づれの客も見えた。

×

夕方になつた。

谷間の町に、電燈が美しく輝やき初めた。

橋の上に出た。涼を追ふて集まる男女は、殆どみな都會の避暑客ばかりであつた。寂しい山の奥に居ても、山の奥に居るやうな感じがしなかつた。溫泉場といふもののもつ特殊の情趣を深く味はつた。

狹い町の中に、都會の人々の要求をみたすだけのあらゆる設備が整つて居た。カフエーもあつた。かなり立

派な料理屋もあつた。寫眞屋もあつた。雜誌屋もあつた。繪葉書屋もあつた。

意氣な髪の年若い女が雜誌屋からキネマの雜誌をもつて出て行つた。

口繪を見ながら明るい夜の町を歩いて居た。

「此の子はほんたうに活動寫眞氣ちがひだね。」

とうしろから年とつた女が云つた。

こゝには藝妓と名のつく者も居るといふことをあとできいた。年若い其の女は藝妓であつたやうに、これもあとで氣がついた。

×

夜になつた。主人が宿帳をつけに來た。如何にも朴訥な男であつた。宿屋商賣などをして居る人のやうには見えなかつた。

だんだんときいて見ると、初めに感じたやうに、宿屋の形をした素人下宿であつた。雇人はひとりも置かず、娘や嫁が女中代りに働らいて居た。男の者は外に仕事をもつて居て、女だけが内職に宿屋をはじめたといふやうな家であつた。

「お大事なものは、おあづかりしませう。」

と主人が云つた。

「盗まれて惜しいやうな品物は一つも持つて居ない。」

と答へた。全く其の言葉の通りであつた。東京を出る時、着換一枚、手拭一筋、萬年筆一本、用箋一冊を持つて出たきりであつた。勿論、多くの路用を懐中して居るわけもなかつた。少しばかりの旅費をもつて、行ける所まで行つて歸るつもりで出た。全部盗まれたとて大事はなかつた。たゞ其の場から歸京するだけであつた。

「何も持つて居ない程安心なことはない。」

と幾度か思つた。所有物ほど厄介なものはない。所有慾のために人間といふものは苦しんで居るのではないか。こんなことさへも思つた。

主人は降りて行つた。

蚊帳の中へはいつた。蒸暑くて寢つかれなかつた。一時間ばかりたつてから同宿の男が歸つて來た。

しばらく活動寫眞の話や芝居の話をした。明夕此の町へ柳家小さんが來るといふ話も出た。東京を離れて此の片田舎で、小さんの落語をきくのも面白いと思つた。

同宿の男は眠つた。鼾がかすかに漏れた。

蚊帳越しに電燈を仰いで居た。心細い感じが犇々と胸に湧き返つた。

水の音が烈しくひゞいた。奥山から鐵管でひいて來た水の流れる音もした。物を洗ふ小川のたぎり落ちる音もした。

水の音は、夜の更けるに從つて、次第に高くなつて行つた。

水の音の外には、聞えるものもなかつた。

山の夜のしづけさ——。

×

同宿の男に誘はれて、裏山へ登つた。

かなり嶮しい山が窓に面壁して居た。青い樹木の葉に蔽はれた九十九折の道を時々人が通つた。

「此の山へ登れるのか知ら？」

と思つた。山が公園になつて居ることを同宿の男からきいた。案内圖にも菊屋公園として出て居た。菊屋といふのは修善寺第一流の旅館で、山は其の旅館の所有になつて居るのであつた。

「菊屋ほどの富豪は、近村にも澤山ない。あの大きな旅館も、別亭も、裏の山も、みな一個人で所有して居る。」

と同宿の男は話した。それほどの財産家も、今まではきいたことさへなかつた。今でも如何なる者が主人か知らない。財産の所有が無意義なことだといふことを、こゝでも考へさせられた。

二人は九十九折の山坂を登つて行つた。汗は絶えず氣味惡く流れた。

山の中腹に小さい家があつた。人が住んで居た。鷄も飼つてあつた。

大弓場のある所へ出た。小さい家が立つて居た。屋根の低い粗末な建物であつたが、中には疊が敷きつめてあつた。三方が硝子戸になつて居たので、非常に明るかつた。壁には長い矢が一本かゝつて居た。こゝから弓を放つて正面の的を射るやうになつて居た。硝子戸は明け放してあつた。其の中にはいつた。窓際が一段高く腰掛けるに都合よく出來て居た。其の上に座はつて外を眺めた。窓の下が十坪ほどの畑になつて居た。豆や黍や南瓜が植ゑてあつた。南瓜の蔓には、南瓜が下つて居た。青い葉のかげから螽斯の啼く聲が聞えた。

傾いた夏の日が、暗綠の峰に照り映えて居た。山には赤松が多かつた。

町の全景が眼下に展けて居た。狹い土地に家の密集して居るのが如何にも窮屈さうに見えた。

山の湯の町、溫泉が湧き出た爲めに偶然發展した土地、かうした土地の遠い過去や遠い未來のことが思はれた。まだ湯の出なかつた時、また湯が出なくなつた時、其の靜寂を極めた大自然の光景を思ひ浮べた。

つれの若い男と話して居る中に、日没が近くなつた。

少し風が出た。南瓜の葉が搖れた。松の梢にはかすかな響が起つた。

（大正十五年八月）

西浦海岸

×

西浦は邊僻な漁村であるが、今年から列車の發着毎に蒲郡驛から乘合自動車が通ふことになつて、よほど便利になつた。二三年中には、三河鐵道がこゝを通るといふことだ。

偉かに三十分ばかりで、乘合自動車は、蒲郡驛から小江の松原、犬飼、拾石、鹿島、形原を經て、西浦の西又旅館の前に着く。

素裸で帳場に跌座をした眞黑な老爺が、西又旅館の主人だ。名は吉見又助、通稱「西浦の又さ」で近村に聞えて居る名物男だ。まだ教育の必要を誰もが考へて居なかつた頃、此の漁村から豆市に笈を負うて、中學校の前身である〇〇館を卒業したといふことが既に常人とは變はつて居る。當時の中等教育修了者は、一般の知識の水平線から見れば、今日の大學卒業以上だ。奇行もかなり多い男だ。酒なども常には一滴も飲まないが、飲み出せば十日でも十五日でも飲み續けると云ふ。とにかく一見しても風貌に仙味を帶んで居る。朴訥で正直で義

俠に富み、よく人の世話をする。それで意見も相當にあるので、村長などが時々色々な相談を持ちかけるらしく、此の漁村に隱れた勢力をもつた奇人だ。

×

友人の白川君と西浦に遊んだのは、四年ほど前の秋であつた。その頃の西浦は、今日よりも遙かにさびしい漁村であつた。形原の渡船場から龍田の濱まで歩いた二人は、疲れはてゝしまつた。殊に病後の白川君には辛かつたことであらう。

「少し休ませて、食事の仕度をしてくれる家はあるまいか。」

海邊（うみべ）にたゝずんで居た二人は、通りすがりの村の人にたづねた。

其の時にはじめて知つたのが、「又さ」の家であつた。

「あの家では、よく水泳に來る學生の世話などをするから、仕度位はしてくれるかも知れない。」

ときいて、直に「又さ」の家をたづねた。「又さ」の家は、知柄（ちがら）の濱邊にあつた。シャツや足袋のやうなものを作るのが家業であつた。夏の間だけ海水浴の人に室を貸して居た。ほんとうの旅館ではなかつた。

夏も過ぎ去つて、秋風の訪づれた西浦の海はさびしかつた。「又さ」の家の二階は、戸がしめきつてあつた。それでも快く二人の願ひをきゝ入れてくれた。二階の戸を明けて掃除をすまし、膳部を整へるまでには一時間

以上もかゝつた。それまで二人は店さきに待つて居た。

西浦の又さの家が、今年は西又旅館といふ名に變はつて居た。時勢の波は、かうした邊土の漁村にまでも打ち寄せた。

×

友人の山本君と急に西浦行を企てたのは夕方であつた。自動車が西浦の終點で止まつた時にはもう暗かつた。四年前にはなかつた新道が出來て、村の様子がすつかり違つて居る。が、車から降りた刹那、ふと眼についたのは、西又旅館といふ門燈の文字であつた。西又旅館の文字は、「西浦の又さ」といふ四年前の古い記憶を蘇へらせた。

「此の家だ。白川君と一しよに來たことがあつたのは——」

見おぼえのある母屋の二階を仰いでつぶやいた。

家の様子は全く變はつて居た。前にはなかつた新らしい幾棟かの家が建てられて居た。裏の松林には、葭簀で蔽つた納涼臺が出來て居た。

室には避暑の客が溢れて居た。電燈は白晝のやうに輝やき、レコードの唄も快く響いて來た。

「ひどく變はつたものだね。四年前にはまだ此の建物もなかつたのに——」

かう云ひながら、奥の方へはいつて行つた。

「もう少したつと夜行で歸る人があるから室が明きます。しばらく待つて下さい。」

と納涼臺の隅へ案内された。そこで夜の海を眺めながら食卓に就いた。側では男女の學生や子どもが集まつて、トランプを弄んで居た。

小さい松林の前には、美しい砂濱がひらけて居た。此の海岸の砂濱は、非常に美しかつた。東海道筋の海岸にも、これだけ美しい砂濱は、あまり多くなかつた。松の林がもう少し奥深かつたらばと惜しまれた。交通の不便なために、今までは世に現はれなかつた。さうして、美しい海の景色が自然のまゝに保存されて居た。交通の不便といふことも、漸く昔の夢となりかゝつて來た。此の勝地が俗化してしまう日が近づいたやうにも思はれた。

「西浦の又さ」の家は、西又旅館と變はつたが、まだ純朴な昔日の面影を失はなかつた。多くの海水浴場にあるやうな浮薄な空氣がこゝには少しも漂つて居なかつた。もとの通りの無愛想な家でめつた。食事の給仕をする者も、脱ぎ捨てた衣服をたゝむ者もなかつた。白粉をつけたやうな女中は一人も居ない。近所の娘が手傳ひに來て居るのみであつた。

清い海の水を浴び、美しい砂の渚を歩み、新らしい魚類と野菜を味はひ、語り、讀み、考へるには、此の上もない清淨な天地であつた。

×

食後に濱邊を歩いた。潮は滿ちかゝつて居た。夜潮が渚によせて來る音が快く響いた。歩く度毎に庭下駄の齒が深く砂に埋れるのも、甚だ心地よく思はれた。

短かい防波堤の上に出た。下駄を脱いで石の上にすはつた。打ちよせる波の飛沫は、時々飛んで浴衣を濡らした。

眞暗な海には、いくつかの島が横はつて居た。沖には、漁船の灯が點々として瞬いて居た。空には天の川が長く流れて居た。星明りに透かして見ると、長い海岸の彎曲が白く波打際を走つて居た。知柄から龍田や須崎を經て、東幡豆のはてまで續いた海岸線は、緩やかな弧を描いて居た。

「あの微かな灯の見えるところが宮崎だ。」

と避暑客に話して居た者があつた。

「此の海岸を歩いて、宮崎まで行つて見たい。」と思つた。

×

日歸りの客がたつて室が明いた。

夏の夜は次第に更けて行つた。子どもはみな寢てしまつた。青い蚊帳を吊つた室の雨戸は、明け放してあつた。

納涼臺の上には、電燈が明るくともつて居た。そこにはもはや人影もなく、宵の騷ぎも消え失せて、ひつそりとした夜氣が流れて居た。

仰臥して尙ほしばらく語りつゞけた。山本君が京都の大學で專攻して居る獨逸の文學の話が中心になつた。日本の文學の話も出た。大衆藝術や新聞小說の話も出た。舊い友人の消息なども漏れた。

「此の少しさきに、清水君が居ましたがね。まだ居るでせう。轉居したやうな話もきかないから——」

と山本君が云ふ。清水君といふのは、舊い友人の一人であつた。嘗て同し學校に居たこともある。此の漁村へ轉任してから數年、今でも尙ほ勤續して居るやうには聞いて居たが、長い間便りも絶えて居た。山本君は時々手紙の往復もするし、年に一度位づゝ、偶然どこかで逢ふと云つて居る。

山本君は、また濱邊の方へ下りて行つた。しばらくたつと歸つて來て、

「矢はりもとの家に居るらしい。戸がしまつて居てよくわからない。もう一度明朝行つて見よう。」

と云ふ。清水君の家は、濱邊つゞきの二三町さきだと云つて居る。

清水君と同じ小學校に居た頃の話が繰り返へされた。

夜が更けて行くに從つて、松林を通して吹いて來る海の風が涼しくなつた。日中の暑熱は全く拭ひ去られた。

沖にはまだ漁船の灯が暗い闇の中に輝やいて居た。宮崎のあかりも微かに瞬いて居た。

×

朝になつた。波打際へ出て、海の空氣を強く深く吸ひ込んだ。

まだ日の出前であつた。水の上には淡い靄がかゝつて居た。其の中に松島や辨天島がまだ夢から覺めきらないやうにしつとりと端座して居た。端田が鼻の濃綠は、少し紫色にぼかされて居た。

朝の日が青い空と水との間に眩しい光を投けたのは、二十分ほど後のことであつた。

朝日に照らされた渚には、すがすがしい喜びの色が漲つた。夜明けの引潮が濡らして過ぎ去つた砂は、薄いセピアを呈して居た。靜かに寄せる波がしらが、白い泡を殘しては其の砂の中に消えて行つた。

緩やかに入江をめぐつた海岸の弧線は、砂濱と水との間に細くはつきりと描かれて居た。

砂濱のうしろには松林が續いた。松林の間には、茅葺の家の屋根の現はれて居る所もあつた。家からは煙が立ちのぼつて居た。

夜明けぬ前にあがつた地曳網の魚は、濱邊の砂の上で擇り分けられて魚市場へ運ばれた。魚市場は旅館の隣にあつた。法螺の貝が鳴ると、二坪ばかりの臺のまはりに、魚をせる人たちが集まつた。

新らしい魚は臺の上に跳つて居た。たひ、こち、すゞき、はぜ、あぢ、ほうぼう、うしのした、ひらめ、う

なぎ、魚の種類は多かつた。えび、かに、しやこ、たこ、いかのやうなものも居た。

黑褐色に日燒けのした五六人の男は、吐鳴るやうな聲で、一山づゝ其の魚をせつて行つた。かうした漁村でなければ見られないきびきびした光景であつた。

せり落した魚を買ひに來る人もあつた。室借りをして滯在して居る避暑客らしい女が、二人も三人も籠をさげて立つて居た。

×

清水君に逢ふことが出來た。急に思ひ立つて來た此の漁村に、幾年も便りのなかつた舊友に奇遇するのも意外であつた。納涼臺の一角を占領して、山本君と鼎座しながら、ビールなどを拔いて話して居ると、西又旅館の主人や、其の主人の甥に當るといふ筋骨の逞しい青年や、隣に座して居た岡崎あたりの師範學校の訓導かと思はれる男も仲間入をして、一としきり四方山の話に興じた。如何にも避暑地の氣分らしいものが、其處によく出て居た。

清水君は、近ごろ生花や俳句に興味をもつて居ることを話した。謠はもう十年もやらないと云つた。昔は謠に熱中したことがあつたのを記憶して居る。當時から見れば、よほど圓熟の境にはいつて來た君も、多趣味で凝り性な點だけは、昔と少しも變はらなかつた。此の靜かな漁村で俳三昧に耽つて暮す舊友の境遇には、輕い

羨望の情も湧いた。さうした生活は、自分の性質に最もよく適して居るやうに感じた。

十二時近くなると、うたせ船が歸つて來たので、濱邊はまた一としきり賑はつた。遠く外海の方へ出て、遠州灘のあたりまでも行くといふ船の中には、更に一層多くの種類の魚が積み込まれて居た。

法螺の貝が鳴り出すと、魚市場にはまた人が澤山集まつて來た。

正午（まひる）の海は靜かであつた。波の音もしない。磯端では十數人の男女が一とかたまりになつて水浴をして居た。赤い水衣を着た若い女の群なども見えた。

×

舊盆が近づいて避暑客は急に減じた。旅館の室もだんだんと空いて來た。夜になつても納涼臺はひつそりとして居た。

山本君が歸つた夜、ひとり波打際を須崎あたりまで歩いて見た。七夕祭の短冊を結びつけた竹が、砂の上に倒れて、波のしぶきを浴びて居た。

涼しい風が沖の方から吹いて來た。其の風の中に含まれて居る冷たさは、東京を出てからはじめて感じたものであつた。

「そろそろ秋が近づいて來たのかな。」

と思つた。二三日前の苦熱をふりかへつて見ると、僅かの間に世の中が一變したやうに感じた。

西浦の海岸は、知柄や龍田の邊から都會の風が吹き込んだが、五六町も西に進めば、まだ全く昔のさびしい漁村に過ぎなかつた。そこには白地の浴衣や派手な水衣を着た都會の男女の影も見えず、銅色の皮膚の子ども等が砂の上で相撲をとつて居た。磯に流れ寄つた芥を燒いて居る漁夫、破れた網を繕つて居る女、何れもみな漁村らしい畫題であつた。

渚ははてしもなく續いて居た。

宮崎の灯は岬にかくれて見えなくなつた。

うしろをふり向くと、西又旅館の灯が、弧形をなした海のあなたに輝やいて居た。

夜の明けるまで此の渚を歩いて行きたいやうな氣がした。

（大正十五年八月）

夏の旅日記

大正十五年八月十日、中野驛出發、沼津に下車し、修善寺に數日を費やし、西浦海岸に舊友と語り、二十日歸京す。携ふるものは、たゞ一管の萬年筆のみ。所々にて書き止めておきたるもの、此の「夏の旅日記」の一篇なり。久しく旅に出でたることなき身が、今年は、如何なるめぐり合はせにや、春は、菰野湯の山に遊び、今また十日あまりのひとり旅を企つる機會を得たり。例年、宿痾になやみて、一と夏を無意味に暮せることを思へば、炎暑に屈せず、此の旅行をなせる幸福を感謝せざる能はず。

八月十日　火　晴

沼津千本濱東京亭に於て、十一日早朝此の記を認む。

十日午前、沼津行の切符を買ひて、中野驛を出發。東京驛に於て、十時三十分姫路行の列車に乘替、午後三時四十分、沼津驛着。朝曇りし空晴れて風なく暑さ烈し。東京驛より由比へ歸る會社員風の男と乘合はす。伊豆駿河の勝地に就いて語れるをきく。沼津の町に義弟が旅館を開業して居ると、其の名を告ぐ。震災當時、本

所に住みて九死に一生を得たといふ話などもした。

沼津の驛前には乘合自動車が多い。靜浦行に乘る。靜浦の風景のよいことを列車内で彼の男にきいたからである。何處まで？　と女車掌がきく。全く知らない土地であるから、何處まで行けばよいかわからない。終點まで行くことに決した。乘合七八名、滿員である。中途で一人二人と下車し、終點に着いた時には小さい袋をさげた農夫らしい五十ばかりの男と、たゞ二人きりであつた。下車したところは海の前であつた。海は非常によかつた。波も靜かに青ずんで居る。四方をめぐる山の綠も、中に浮べる島の綠も美しかつた。併し、海岸に並んだ家は汚なかつた。平凡單調な漁夫町で見るものもきくものもない。下車して少し歩いた。短かいトンネルがあつた。通り抜けるともう家はない。別莊らしい家が左の山の上にあるのみ。コンクリートの石垣の上に腰かけて、鐵道省の旅行案内を開いて見た。記事が簡單でわからない。網を繕つて居る漁夫に、千本松原へ出る道をたづねた。自動車で沼津へ引返へしたがよいといふ。もとの所へ歸つて來た。今、自動車が出たばかりであるから、次は五時半まで待たなければならぬと待合所の娘がいふ。時間をきくと四時二十分である。ラムネ二本を飲んで一時間待つた。靜浦では保養館といふ旅館が一番よいとの話。自動車で十二三分ほど歸つたところだと教へてくれた。石垣の下で五六人の小兒が水を浴びて居た。二三人づゝ一度に水の中へもぐつては、また浮んで來る。身體中眞黑で齒だけが白い。形原の小兒を思ひ出した。自動車はこゝから三津の方へも行く。三津から長岡温泉を經て修善寺の方へも出られるといふ。修善寺の方へ出やうかとも思つたが、千本松原に心が

ひかれた。自動車は少しおくれて着いた。自動車が來た頃には、日が西に傾いて、山の絲が殊更に美しく見えた。乘客は自分が一人きりであつた。前よりも乘心地のよい車であつた。たゞ一人、車上に搖られて海岸の道を歸つて來る時には、乘合自動車のやうな氣がしなかつた。海に夕日が輝やいて居るのも、晴々とした眺めであつた。六時二十分頃、自動車は停車場へ歸つた。千本濱行に乘つた。六時四十分の列車の到着を待つて居た自動車は、中々出なかつた。運轉手にきくと、千本濱終發は九時頃だといふ。また千本濱には、旅館が五六軒もあるといふ。停車場から濱までは殆ど町つゞきであつた。濱へついた頃には、全く日が沈んで、電燈が輝やき初めて居た。濱は非常な賑はひであつた。見晴しのよささうな東京亭にはいつた。運轉手にきいた中に「東京亭」といふ名のあつたことを思ひ出したからである。あとで見たら仙松閣ホテルといふのが一ばん大きな旅館であつた。海に面した階下の六疊へ案内された。蒸暑いこと甚だしい。裸體になつても暑い。風が少しもはいらない。地引網が上るといつて濱邊では人が集まつて居る。網をひくかけ聲も聞える。浴衣に換へ、庭下駄をつつかけて濱へ下りた。大きな石の累積した濱であつたが、海嘯に洗はれて石が出たと避暑客の語つて居るのをきいた。網はあがつたが、人が多くて見えない。何もはいつて居ないと云つて居る。骨折損だつたと色の黑い男が話し合つて居る。室へ歸つて食事をしてしまふと眞暗になつた。今夜は闇である。沖に漁火が明滅して居る。また濱へ出た。石の上に座して漁火の明滅を眺めた。風がない。今夜はよほど暑い夜だと多くの男女がつぶやいて居る。また室へもどつた。もう蚊帳が吊つてある。二階で十五六人の若い者が

亂痴氣騒ぎをはじめた。スットントンや鴨綠江をうたひ出した。風呂へはいつた。おそいので湯がきたない。騒がしさと暑さに堪えられないのでまた濱へ出た。砂の上に座して眞暗な海や星を眺めながら瞑想に耽つて居ると、芝の建築家といふ中老の男が旅行の話や建築の話をはじめた。本牧二谷の海水浴場の話から、全國各地の溫泉の話、支那朝鮮の旅行談等、中々盡きない。二階の騒ぎが靜まつた頃、蚊帳の中へはいつて仰臥した。眠られない。電燈にあつまる虫が蚊帳の上に澤山飛んで居る。起きて電燈を消したが、それでも眠られない。波の音、モーターボートの音、人聲、眠られぬ耳に絶えず聞えて來る。二時か三時頃と思はれるのに、ブランコを搖つて居る小兒の聲がする。少しうとうととしたと思ふと直ぐに夜が明けた。

八月十一日　水　快晴

修善寺溫泉×屋に於て此の記を認む。

未明に起きて、昨夜と同じ石濱へ出た。既に七八人の男女が水の中へはいつて居る。其の中に人數はだんだん多くなつた。日の出る頃、松原を散歩した。昭憲皇太后御手植の松のある邊から、仙松閣ホテルのはづれまで歩いた。松の根に腰かけて、深呼吸をしたり、微吟したりする心地は、何とも云はれない程よかつた。食事をすましてそこそこに出た。宿泊料四圓。沼津驛へ歸る自動車に乘つた。乘客滿員。追手町邊でパンクしてみな降ろされた。幸に前方から三島町行の電車が來たから、直樣それに乘つた。三島驛で乘替、修善寺へ十一時

頃ついた。電車は青田の間を走つた。青田のないところには桑畑があつた。田畑の間の農家は、鬱蒼とした樹木に圍まれて居た。青々とした平野を走る電車が次第々々に山の懷へはいつてゆく有樣は、春の菰野行を思ひ起させた。たゞ菰野よりも廣々とした感じがしたのみである。電車に離合して流れる桂川も、菰野の川よりは大きかつた。さうして、菰野のやうな奇勝はなかつた。

修善寺の驛には、宿引が澤山出て居る。厭な所だと思つた。溫泉場行の電車に乘つた。賃金三十錢、かなり勾配の急な道を、自動車は一直線に走つて行く。赤城を超えた時のことを話して居た汽車の中の男の言葉を思ひ出した。溫泉場についた。狹い山の間に谿流が通じて居る。流れの兩側に家が並んで居る。溫泉宿と土產物を賣る家ばかりである。×屋をたづねた。裏の方にある小さい旅館であつた。小さい旅館であらうと豫期して居た。豫期の通りであつた。田舍の人達が辨當を持つて來て泊るやうな家、客らしい改まつたあしらいをしない家だといつた先夜の老人の話に興味を感じ、わざわざかうした家に泊るのも好奇なことである。これも旅の興味の一つであらう。合宿でよいかといふ。何でもよいと答へた。二階の奥の部屋へ通された。三島から來て居るといふ若い男の人と一しよであつた。話をして見ると建築に關係のある人らしかつた。よくよく建築業者と緣故があるものと見える。浴衣に着換えて、直に湯にはいつた。川の眞中から湯が出るといふ鍋鉛の湯と稱する共同湯へ先づはいつた。汚ない瘦せた老人が一人と、子どもを二人つれたこれも身なりのよくない婦人がはいつて居た。溫泉も不快なものだと感じた。長く逗留する氣は起らない。二三度出たりはいつたりした。湯

からあがつて川風に吹かれるのはよい心地であつた。宿へ歸る道で、地圖や繪ハガキや土產物を買つた。歸つて少し晝寢をした。日が斜にさし込んで額に照りつける暑さに眼をさました。再び入浴した。今度は石湯といふ共同湯へはいつて見た。石をきり開いて浴室にしたものである。身體に腫物の跡の澤山ある五十歲位の男が、青黑い土色をした三十四五歲の女と、リウマチの話をして居た。病院で二度も三度も切つたが治らないと、傷だらけの脚をして、女はしきりに病院を惡しざまに云つて居た。そこそこに出た。修善寺の石段を上つた。石段の下に寄附者の名が明かに出してある。どこにもあることだがよい感じがしない。本堂の前に出た。修禪寺とした大きな額がかゝつて居る。禪が後になつて善になつたことは、案內記にも書いてある。裏山へ登つた。觀音菩薩だの、梅林だの、範賴の墓だの、いろ〳〵なものがある。一々見て廻はる勇氣が出なかつた。中腹の草の上に腰かけてしばらく休んだ。狹い谿谷の村の家並がゴタゴタと重なり合つて見える。向ふの山が蔽ひかぶさつたやうになつて居る。どう考へて見ても、あまりよい所ではない。此の邊の土地や植物の繁茂して居る狀態は、全く鄕里の三河を思はせた。かなかなが林の中で鳴いて居る。日が暮れかゝつて來たのである。

夜になつて川の水音が强く耳に響いた。

八月十二日　木　晴

三島町驛のプラットフォームに於て、八月十三日、午前十一時、此の記を認む。

朝早く起きた。日は出て居ない。川の岸に出た。風が凉しかつた。空は少し曇つて居たが、所々青い所が現はれて居た。また今日もよい天氣だといふことを思はせた。野田屋の下のチンの湯といふのにはいつて見たが、あつくて身體を浸すことが出來ない。直に出てまた鐲鉆の湯の方へ行つた。此の湯には、もう二三人の男女がはいつて居る。湯から上つて川の中を歩いた。岩の上を透明な水が流れて居る。非常によい心地であつた。

食事をすましてから、また前と同じ湯を浴び、川の中を歩いた。同宿の若い男は、もう一泊するやうにすゝめる。急ぐ旅でもないので、その言葉に從ふことにした。

空は全く晴れた。暑い日が照りつけて居る。昨日よりも少しは風がある。裏山の林の中から吹き下す風が室の中にはいる。冷たいやうな風である。此の裏山は、窓に面接して居る。かなり急峻である。九十九折の路が出來て居る。時々人が登つて行く。菊屋公園といふ名がついて居る。菊屋といふのは、修善寺第一等の旅館である。本館の外に別館もあり、室の數も二百五六十あるとの事。これが個人の所有であることも同宿の男からあとできいた。

裏山の風を浴びて、二時間ほど晝寢をした。眼をさまして見ると、もう三時に近い。また入浴した。同宿の男から此の家の話をきいた。女中も何も置かず、一家の者だけでやつて居る。親と子と孫の三夫婦が同じ家に住み、男の者はみな外で仕事をなし、旅宿の方は女の者の內職になつて居る。宿泊者を客扱ひにはしないから、長く逗留するには却つてよいと云つて居る。上林温泉の關屋を思ひ出した。關屋ほど廣い庭がなく、且つ庭の

中によい湯かない。

同宿の男と一しよに菊屋公園に上つた。公園とはいふものの殆ど自然の山に道をつけたのみである。所々に阿屋風のものを設け、躑躅を植ゑつけた點などが、いくらか人工的な公園の感じがする。もう少しで絶頂といふところに家があつて人が住んで居る。その側には大弓場がある。大弓場のあるところには、ブランコや遊動圓木の設備も出來て居る。弓をひく家には疊がしきつめてある。入口の戸はない。上つて窓に近い腰かけの上に仰臥して、夕方まで話した。此の青年は、神經痛を治すために來て居るが、平癒を待ちて、建築學校へ入學し、製圖設計を專門にして立ちたいと語る。處世上の經驗や、活動寫眞の話などをして居る中に日沒となつた。蜩がしきりに鳴いて居る。山には赤松が多い。幹が太く葉が青々として居る。窓の下に狹い畑がある。たうもろこしや南瓜が實つて居る。故郷の山畑を思ひ起した。

（以下、沼津驛のプラットフォームに於て、列車を待つ間に認む。）

食事をすまして、また入浴した。入浴者が多く、湯が濁つて居る。長くはいつて居られない。直に出た。桂座へ柳家小さんの落語をきゝに行つた。避暑を兼ねての巡業らしく、今日一日限りの興行である。小さんの落語を此の山間の温泉地に來て聽くのも亦面白い思ひ出である。入場者は非常に少なかつた。僅に百人內外と思はれた。どんな興行ものでもこれ位しか人がはらないといふ。十二時近くに終つた。

此の夜も亦眠られなかつた。暑いのと晝寢のために、寢苦しいことが甚だしい。夜の明け方に少しうとうと

したと思ふと、陰氣な泣き聲に眼を覺まさした。初めは裏山で夜鴉が啼いて居ると思つた。鴉にしてはあまりに不氣味な聲であつた。しばらくたつと犬の鳴聲のやうに聞えた。意識がはつきりして來ると、隣家の嬰兒が泣いて居るらしくも思はれた。その中に夜が明けた。

八月十三日　金　晴

八月十五日、西浦、西又旅館の松林中なる露臺の上に伏して、此の記を認む。海風松林を透して吹き來り、九十度以上の灼熱も全く暑さを知らず。

八月十三日、未明に起きて入浴。室内に仰臥して新聞を讀む。今日もまた暑氣酷烈。裏山に鳴く蟬の聲姦しく、汗しきりに流れ出づ。隣室の老婦人、歸宅するといふ。愛知縣の豊川在との事にて、しばらく雜談。神經痛にかゝり、既に三週間入浴せるも、効能更になしといふ。空腹に食事するが如ききゝめのあるものと思へるも面白し。修善寺驛まで出るに、自動車は三十錢、馬車は十五錢、十五錢やすければ、氷が飲めるから、馬車に乘ると云つて出て行く。三河邊に多く見る老人らしい所がおかしかつた。

九時頃辭去。宿料が餘りに廉くて驚ろいた。自動車の出發するところに來て見ると、次の發車までには一時間あるといふ。再び宿へ歸れもしないし、しばらく考へて居ると、馬車が走つて來た。それに飛び乘つた。老婦人の言つたことを思ひ出してひとり苦笑した。修善寺驛へ着いた。三十分待つて三島町行に乘つた。曾根松太

郎氏にエハガキを出した。數年前の上林溫泉行を思ひ浮べたからである。三島町驛までの間、稻田を吹く風、前よりも尙ほ一層涼味を含んで居た。三島驛行の電車を待つ間約四十分、プラットフォームの腰かけにもたれて日記を認めた。外にも二三人待つて居る者があつた。三島驛に着いてから、東海道線に接續する間、また三十分ほど待つた。登山の一體入り來りて、アイスクリームに舌を濕しながら、高聲に快談。尙ほ一層の暑さを添へた。一時七分の姫路行に乘車。沼津で五六人の登山客が乘つた。みな老人ばかり。越前のあたりの農夫らしい。所々を旅行して歩くために、白衣は汗のために汚れて居る。臭氣紛々たるものである。みな隣席に座を占めた。むつとして嘔吐を催すばかり。窓の方に向ひて、外の空氣を呼吸するやうにした。頭のテカテカに禿げた者、顏中髭で蔽はれたもの、胸に毛の深く生えた者、デブデブと太つた者、何れもみな人間ばなれのした連中である。興津へ下車したいと思つたが、考へ直して通過することにした。興津と江尻の中間に、袖師が浦といふ新設停留所が出來た。窓から外を見ると、程遠からぬところに、海水浴場が出來て居る。青い海が松の木の間に見えて見る。よい所だなと思つた。幼兒を背にした二十五六歳の婦人が、袋井驛で下車すると、六十歳近い農夫が乘り込んで腰かけた。色の赤黑い目尻に四五本深く皺の刻み込まれた木魚のやうな感じのする男であつた。大きな口をあいて居睡りをはじめた。次の驛でまた一人の老人が乘り込んだ。前後左右みな老人ばかり。汗臭いこと夥しい。今日はつくづく三等列車の悲哀を感じた。

蒲郡へ下車したのは七時、日は沈んで居た。風が少しもなく、蒸あついにほひがむせ返へるやうに胸をつい

た。蒲郡はあついといふ感じがした。今までの中で一番あつい所のやうに思はれた。バスケットをあづけて置いて直に四橋君を訪ねた。在宅。行水をして少し正氣づいたが、室に入ると汗がまたとめどなく流れた。十二時近くまで雜談。一泊。夜は暑さのために眠られなかつた。

八月十四日　土　晴

早朝、四橋君と一しよに稻熊直二君を訪問。十時の列車で岡崎劇場へ幸四郎・梅幸の芝居を見に行くと云つて居る。九時半まで雜話。松原の方へ下つた。千賀君の宅を訪ねた。中學生の學力補充の講習をして居るとのことにて不在。南部の學校を訪れた。今日は講習の閉會式だといつて、父兄が來て居る。木俣宗十氏や長島十郎氏も父兄の一人であつた。青井群三郎氏にもはじめて逢つた。暫らく話して居る中に、茶話會がはじまるといふ。同鄕者の意味を以て何か話せと强要せらる。驚ろいて逃げ出した。田圃の間の道を通つて府相の方へ下つた。竹島の前の仙遊亭といふのにはいつて、海水浴をした。長く蒲郡の海水に浸らなかつた。水が美しくて非常によい心地である。二時頃そこを出た。松原を通つて、お釋迦樣の前の海水浴場へ出た。停車場から下る所で金子縫右衞門君に逢つた。天野先生の逝去が話題になつて二三分語る。大塚の方へ行くと云つて、自轉車で疾走した。海水浴場には人が澤山集まつて居た。數はあまり多くないが、場所が狹いので雜沓して居る。自轉車が非常に多かつた。石に腰かけて話して居ると、ていねいに挨拶する若い婦人があつた。橋本××さんであ

つた。はじめは思ひ出せなかつた。

日が少し西に傾いたので、四橋君に別れて、幸田へ歸ることにした。犬飼の新道を眞直に歩いた。照りつける日に、輕い眩暈を感じた。尺地川を上つて竹谷の入口へ出た。山本貞司君の家の前を通ると、中から呼び込まれて一しよに外出。踏切を越えて拾石の專賣所の所から、西浦行自動車の停留所へ出た。西浦へ行つて見ることにした。自動車は今出たばかり。次は一時間ほどたつてからと云ふ。鹿島まで歩いた。鹿島の停留所へ着いて見ると、まだ三十分以上もあつたから、また形原まで歩くことにした。鹿島境から形原の音羽橋まで眞直な新道が出來て居る。前とは全然樣子が違ふ。形原の停留所へ着たのが七時、橋の上に十五六分ほど待つた。人が通る。自轉車が來る。自動車が通る。活動寫眞館の奏樂が聞える。數年前の形原を思ひ出して、しばらく瞑想に沈んだ。蒲郡の方から自動車が來た時には、もう電燈が輝やいて居た。自動車には三人ばかりの乘客があつた。音羽の町へかゝつたと思ふと、間もなく右に折れて中畑の方へ上つた。學校の前を通つたことはよくわかつたが、それから先はどの道か更に見當がつかなかつた。終點で下車した時には、自分たちと洋服をきた會社員との三人のみになつた。洋服の男は丸屋へはいつて行つた。丸屋の隣りに西又旅館といふ名の旗がたつて居た。數年前に白川梅次郎君と一しよに遊んだ時のことを思ひ出した。當時はまだかうした旅館らしい家ではなかつた。通常の家であつた。白川君とこゝへ來た時は、十月のはじめであつた。海水浴の人々はみな歸つてしまつて、二階の室は戸がしめ切つてあつた。しばらく休憩させて貰ふやうに賴んだ。主婦らしい人が戸を

明けて掃除をしてくれた。靜かな西日を浴びながら、病後の白川君と人生觀や古い回想談などに耽つた。其の時には、「西浦の又さ」と云つて居た。西又といふ名をきいた時に、思ひ出したのは、白川君と遊んだ時の又さの家であつた。今は大分樣子が變はつて居る。新らしい建物が二棟も奥の方に出來て、室の數も多くなつて居る。どの室にも浴客が澤山詰め込んで居る。昔のことを語りながら、しばらくの休憩を乞ふと、通されたのが、海岸の松原の中の納涼臺の上であつた。奥の室は直にあくから、しばらくこゝに待つてくれといふのである。海の風が南から吹き込んで非常に涼しい。食事をすることにした。運ばれた食膳には、新らしい魚類の料理が並んで居た。食後、海岸を歩いた。暗くなつて居るのでよくわからない。たゞ長く彎曲した砂濱が闇の中に消えて居るのと、沖に瞬いて居る漁火とが、夏の夜の海の涼味をそゝつた。避暑の客は、室に充ちて居た。其の日歸りの一同が立つてしまふと、自分等に與へられた室が明いた。椽側に腰かけてゐると、隣室から呼びかける婦人があつた。はじめは如何なる人か更にわからなかつた。だんだんと聞いて見ると、自分が嘗て深溝の學校で教へたことのある人(岩瀨治雄氏の妹)であつた。尋常小學校の時に一年ほど教へたきり、二十何年か一度も逢はない。まことに奇遇の感に堪えなかつた。目白中學校の教師、帝大英文科出身の文學士牛山氏の許に嫁ぎて、今は十條に住める由、月のはじめより主人と共に四人の子どもをつれてこゝに避暑し、今月末まで止まるときいた。主人といふにも紹介せられた。治雄氏の事や深溝出身の人々の消息がそれからそれへと繰り返された。

夜が更けるに從つて、次第に海は靜かになつた。人はみな眠についた。波の音のみが強くひゞく。おそくま

で山本君と納涼臺の上に仰臥して語つた。獨逸文學の話もあつた。處世上の經驗談もあつた。男女の愛に關する話もあつた。海でパチパチと音がして、火がチラチラと搖れて居る。もう一時に近からうと思はれる頃であつた。海へ出て見た。今、地曳網が着いたところである。五六人の男女が集まつて魚を籠の中へ拾ひ込んで居た。網の中には大小樣々の魚類が跳つて居た。

八月十五日　日　晴

幸田村の鄕家に於て、薄暗きランプの下に、二十年前の自己を偲びつゝ、此の記を認む。

十五日は日曜で且つ休日に當つて居る。避暑客も必ず多からうと人々は話して居た。朝から非常に暑かつた。早朝、また濱邊へ地曳網を見に行つた。昨夕よりも澤山かゝつて居た。カーキ服を着けた青年團の一行が手傳つて網から上げて居た。岡崎市の青年といふことが後になつてからわかつた。青年團の依頼によつて特別に催した地曳網であつた。地曳網を曳かせるには四十圓ほどかゝるとの話。西又旅館の隣りにある魚のセリ場で魚のセリ賣がはじまつた。番臺の上へ跳るやうな魚をあげては、裸になつた大男が五六人づゝ集まつてセリはじめる。セリ落した魚は下の桶にかき込む。その魚を買ひに來る男女もある。實に騷々しい活氣のある光景である。清水義一君が小さい籠をさげて魚を買ひに來た。しばらく會談。

食事をすまして休んで居ると、幸田村の人々が七八人づれで出て來た。今から舟を出して網を打つといふ。

市川柳助君、小田彦藏君に珍らしく逢ふ。淺井といふ老人の醫師も交つて居た。船は其の中に岸を離れて沖の方へ出た。伊野鯉之助君に逢ふ。青年團について來たとのこと。伊野君には十數年ぶりであつた。髮の毛一本もない程の禿頭になつて居る。木俣惣十君にも逢つた。

清水君に敎へて貰つて龍田に杉浦安右衞門氏を訪ねた。海岸傳ひに行くこと三四町のところ。二階の三室を借りて、一家族一ケ月間滯在の豫定であると。十二時半宿に歸つて日記を認めた。山本君清水君を伴ひ來る。しばらく清水君の宅に待つて居たが、いつまでも來ないから杉浦氏の許へ使を出して聞きにやつたと云つて居る。主人の吉見又助氏や其の甥に當る青年會の會長とかいふ人と一しよにビールを拔いて飲んだ。清水君は、しきりに吉見又助の人物の變はり者で、面白いことを推賞した。

午後、うたせ船が歸つて來た。また魚市が開かれた。朝よりも魚の數が非常に多かつた。遠い外海の方から運んで來たものであるから、地曳網の時のやうに新らしくはなかつた。生きて居る魚は殆どなかつた。中には干物のやうになつて居るのもあつた。

夕方山本君は歸つた。舊盆近くなつたので、引上げて歸る滯在客が多かつた。所々の室が明いて、非常にさびしくなつた。夜になつても納凉臺はガランとして居る。渚を歩いたり、石垣の上に座して瞑目したり、十二時頃までも海に出て居たが、濱邊には人の影もなかつた。凉しい風が吹いた。夜も凉しかつた。盛夏を過ぎて秋近くなつたことを意識した。

八月十六日　月　晴

早朝起きて、昨日と同じやうに海岸を歩いた。天氣はよい。日中は暑さうに思はれた。食事をしてから、理髮をした。蒲郡行の自動車に乘らうと思つたが、まだ一時間もあるといふので、しばらく海水に浸つた。水から上つて見ると、自動車はもう出たと云つて居る。渡船で行くことにした。まだ一度歸るつもりで宿屋の浴衣を着たまゝ出た。道の十文字になつて居る處まで來ると、自動車が止まつて居る。蒲郡行だといふ。軍人が一人と洋服を着た若い男が二人乘つて居る。切符を買つて乘ると直に發車した。蒲郡へ着いて三浦屋の順次君を訪ねた。妻君が前のとは變はつて居た。幸田の老母が既に月餘の病氣に惱んで居ることをきいた。幸田へ歸る事にした。稻熊君を訪ねた。學校から歸つて裸體で寢て居た。二三日間學校に何かあるさうである。夕方まで晝寢をしたり、雜談をしたりした。一しよに入浴。朝日湯といふのは、東京にもあまりないやうな立派な設備であつた。湯から上つて、稻熊君に別れ、ひとりで停車場の方へ下つた。俥を賴んで幸田に向つた。もう日はくれて居た。嫌ひな俥に乘らなければ、歸ることが出來なかつた。俥は夜の道を走つた。細い月は空に輝やいて居た。大金橋のところで、俥が轉覆した。橋が落ちて少し下手に假橋が架つて居たのを知らずに、もとの橋の方に引き上げやうとして、氣づいた時に左の方へ倒れたのである。僅にかすり傷を負ふたのみであつた。

歸つて見ると老母は大分よくなつて居た。昨日から起きたいと云つて外の者と話して居た。風呂を貰ひに來

た。隣家の人々と一しよに十一時頃まで雑談。夜は蒸しあつく、妙なにほひが鼻について少しも眠られなかつた。

八月十七日　火　晴

今日は一日山間の郷家に滞在することにした。終日を無聊に苦んだ。前の川の堤へ出て見た。川の形も大分變はつて居る。水は殆どない。逆川の入口まで歩いた。道が一直線になつた。舊道は草が茫々と生じて居る。神社のあとには家が建つた。喜代作の隱居所だときいた。喜代作は妻さの寡婦と同棲して居ると、近所の噂とりどり。

村の人々にも逢つたが、老人の外にはあまり知る者がなくなつた。一年に一回位は歸郷するが、一日と滞在したことがないが、もう二十年も歸郷しないと同じである。青年も少年も一向わからない。舊友がみな大きな子供をもつて居る。中には娘を他へかたづけて祖父になつたのもある。夜、ブリキ屋の喜平といふのが來て話して行つたが、誰かよくわからなかつた。二十九歳になると云つて居た。

市之瀬は追々と家が減つてゆく。此の數年に、他へ轉宅したもの、松右衞門、七藏、重雄、勇作、順治。廢家となつたもの、妻次郎、新五郎（本家相續）

午後、室の中に仰臥して涼しい風に吹かれながら、少しの間眠つた。幼ない時のことが思はれた。かうした

交通の不便な所に生れて、刺戟のない生活に倦みながらも、尙ほ強い愛郷の心を失はなかつた少年の心がなつかしかつた。幾十年を過ぎた今日來て見ても、自然の風物は、昔のまゝに變はらない。その昔の自分と同じやうな少年や青年が同じやうな生活をして居るのを見ると、常には考へて居なかつたことなども思ひ出される。

午後、夕立が來た。旱魃に苦しんで居る人々は非常に喜んだ。併し、直にやんでしまつた。土は少しもしめらない。木の葉にかゝつた雨滴も、忽ち乾いた。夕日は嚇々として輝やき、暮色の中に眞紅の横雲が西の空を彩つた。

夜、前の川の橋の上に佇んだ。昔よりも橋が高くなつて居る。川の水は殆どみな干からびて、底の石が白く見える。蚊が澤山集まつて來た。蚊の多い所である。昔も今も變はらない。薄ぐらくなると、蚊に攻められて仕事が出來ないので外へ出て、川の堤や橋の上でひとり瞑想に耽つたり、ノートへ歌を書き止めたりしたことがあつた。此の川の堤には種々の思ひ出が潜んで居る。

夜は少し涼しかつた。よく眠られた。東京を出てから、今夜のやうによく眠られたことはなかつた。

八月十八日　水　晴

今日は幸田驛から岡崎の方へ出やうと思つて居たが、朝になつて見ると、少し下痢の氣味である。どうしやうかと思つて居る中に、十時を過ぎた。昨日よりも暑い。到底出られない。もう一日滞在して明朝出發するこ

とにした。

とうとうこゝに三泊することになつた。歸鄕して生家に三泊したことは數年來ないことである。老母は益〻快癒して、昨日よりも更に元氣がよい。長い間の病氣に身體が非常に衰弱して居る。全快してから恢復までにはまだまだ日がかゝりさうに見える。秋にでもなつたらよからうと思はれた。

晝寢をしたり、家のまはりを歩いたりして一日をくらした。家の中に座つて居ると、前の道を時々人が通る。トラックやオートバイが通るやうになつたのは、時勢の力といふものであらう。

（以下歸京後中野に於て認む）

午後と夜とに驟雨があつて、非常に涼しくなつた。

八月十九日　木　曇後晴

九時に幸田の家を出た。深溝の郵便局から清水義一君宛の手紙を出した。涼しくなつた。歩いても汗が出ない。蒲郡へ出た。稻熊君を訪ねた。青年が來て盆の同窓會の餘興の相談をして居る。明日が盆の十三日だといふ。水竹の浪花節と琴の演奏とに決して青年は歸つた。四橋君を訪ねた。西浦へ行つた事や幸田の老母病氣の事などを話した。清水君に萬事を依頼して、直に歸京する事を告げた。一じよに學校の二階へ上つて、宿直室の疊の上に寢ころびながら話した。海の方を眺めると秋らしい色になつて居る。庭の柳が大きくなつた。樹木

の生長を見ても、蒲郡に居た當時が古い過去になつたことが意識された。朝日湯へ寄つて再び東町の宅へ戻り、辭して××君をまた訪ねた。夜になつた。一しよに海岸通りを下つた。停車場で新宿行の切符を買つた。牧山の青年二人に誘はれ、××君の伴をして、何とかいふ怪しげな家へはいつた。藝妓と云はれて居る者が四人來た。少しも藝妓らしい感じがしない。あはれに氣の毒な思ひがしたのみであつた。××君と二人で青年を殘しておいて早く出た。近頃發展した花柳界の町々を通り拔けて海岸傳ひにお釋迦様の前へ出た。防波堤の光で二三人の者が蝦を捕えて居る。夜警の青年が來て顏をのぞいて行つた。終列車におくれたので××君の宅で一泊した。

東京を出てから十日になる。私の頭腦には十日間のことがはつきりと浮んで來た。東京を出る時には、非常に暑かつた。千本松原の濱へ着いた時の暑さ、蒲郡の驛へ下車した時の暑さ、それは文字通りの酷暑であつた。私は、旣に長い間夏の旅行をしたことがない。腸を痛めて元氣を失ひ、死んで居るのか生きて居るのかわからぬやうな生活をして、夏の間を終るのが例であつた。暑さにあてられて苦しい夏を過す時には、いつも田舍の自然にあこがれた。綠の色に蔽はれた田舍の野山の涼しさを思つた。然るに、今年、珍らしく夏の旅行をして見ると、暑い時にはどこへ行つても暑かつた。到るところの海水浴場も、溫泉場も、避暑客のために喧噪を極めて居るせいか、東京の郊外に閑居して居るよりも尙ほ一層むし暑いやうに感じた。併し、田舍の自然は、都會の生活に疲れて居る者の心をよく慰めてくれた。私は、十日の旅行によつて非常に元氣づいた。沈滯して居

る腦裡の汚物が一洗されたやうな氣がする。

夏から秋への推移を、此の短かい旅行中に感じたのは、私の最も喜ばしく思つたことであつた。秋のおとづれ、それを私は海村に來て泌々と感じた。何ものをも威壓しやうとする力を含んだ盛夏が、いつとはなく過ぎ去つてゆくあとのさびしみ、私は、西浦の海岸に於てそれを味はつた。空いた室もない程殺到して居た避暑の客が、僅かに一二日もたゝぬ中、大方引き上げてしまつて、納涼臺に人かげもなくなつた時、ひとり夜の海に向つて瞑想して居ると、風の涼しさを先づ知り、波の上に臨いて居るともし灯の色の變はつたことを次に感じた。さうして、秋の訪れを風の音にきいた。取り殘された孤獨の寂寥に咽ぶやうな甘い哀感にも浸つた。

まだこれから殘暑は續くであらう。暑さに堪えられぬ日もあるであらう。併し、盛夏はもはや過ぎ去つた。秋は天涯のあなたから訪れて來た。

秋の訪れを感じて再び歸京する此の落ちついた夜の喜びも、今日までの旅行の賜ものであつた。

秋郊雜記

初秋の郊外より

第一信

SO兄　御無沙汰しました。お許し下さい。秋風が立つて來て、空が高くなりました。暴風雨の過ぎ去つた今朝のしづけさ、庭の落葉を掃きながら、芝生の中に虫が鳴いて居るのをきゝました。快よい朝の窓によりながら、今此の通信を書いてゐます。

「安土行」の記事、面白く拜讀、日を繰つて見ると、丁度其の頃私は西浦の海岸にゐました。暑さに追はれて、どことといふ目當もなく八月十日に中野驛出發、沼津に下車。靜浦行の乘合自動車に乘りました。同じ列車の乘合客に、靜浦はよい所ときゝましたから、沼津へ下車すると、直に靜浦行きの自動車が目につきました。「どこまで」と切符に鋏を入れながら、女車掌がきゝました。「此の自動車は、どこまで行くのか。」と私の方から問ひますと、「江の浦まで。」と答へました。江の浦がどこか靜浦かどこか更に知りませんから、終點まで行くことにしました。自動車は町をはづれ、香貫山をうしろに青田の間を走つて海岸へ出ました。西に傾いた日が波の上

に美しく輝やいて居ました。自動車の止まつた所は、山かげの漁村のはづれでありました。海の景色は非常によかつたが、何一つとして見るものはなかつたのです。黒褐色の皮膚をした兒童が五六人磯端で水の中へもぐつたり出たりして居たのでした。私は客待の茶店に腰かけ、ラムネを二本拔いて、次の自動車が來るまで、一時間餘をぼんやりと海と睨め合つて居ました。隨分退窟な譯でしたが、これも亦旅の興味を添へる思ひ出の種でした。

沼津の驛へ歸つたのは夕方でした。また千本濱行きの自動車に乘りました。電燈のつく頃濱邊につきました。海を見晴らす宿に一泊して、盛夏の避暑地の空氣を味はひました。

其の夜濱邊の石の上で諸國をめぐる旅商人の話しをきゝ、急に修善寺へ行つて見る氣になりました。翌朝千本濱を去り、十二時頃修善寺へ着。三日程滯在。入浴も少し飽いたので、三島の驛に向ひました。行く先も定まつて居ない旅ですから、涼しい土地をたづねてだんだん西の方へ行くことにしました。

其の夕方蒲郡へ着きました。蒲郡はいくらか涼しからうと思つて下車して見ると、全く驚ろきました。風は少しもなく、土のにほひが蒸せ返るやうに鼻を衝きました。震災當時の燒跡へはいつたやうな感じがしました。蒲郡が一番暑かつたのです。翌朝の新聞を見ると、其の日は特別に溫度が高かつたので、蒲郡だけが暑いのでもなかつたことをあとで知りました。其の夜友人の宅で琶琵湖畔は涼しからうといふ話が出ました。私はまだ琵琶湖を知りません。急に湖畔の夏が偲ばれ、遊意が勃々と起つて來ました。石山あたりの夜景がしきりに想

像されました。

所が其の翌日偶然京都大學へ行つて居る友人と西浦行を企てることになりました。蒲郡から乘合自動車が往復するやうになつたことをはじめて知りました。夕方西浦へ着きました。西又旅館に泊りました。四年程前に此の家へ寄つたことがあります。其の時にはまだ西又旅館と云はなかつたのですが、すぐに同じ家だと氣づきました。西浦の海岸を前から私は非常に愛好して居ました。二泊しました。多くの舊友に奇遇しました。三日目の朝、蒲郡へ出ますと、同村の人に逢ひ、老母の病氣を知りました。幸田の生家に三日過ごして蒲郡から歸京しました。まだ一度西浦へ歸つて、更に西の方へ出かけるつもりでしたが、意外の事に豫定が狂ひ、平凡な終りになつてしまひました。兄の安土行きは何れにしても其の頃であつたことと思ひます。

此の夏の旅行は割合に愉快でした。全く裸の旅行で樂々と歩きました。浴衣一枚、手拭一筋、萬年筆一本、これだけの所有物です。尤も着換へを一枚入れたバスケットを持つて出ましたが、これは一度も用ひず、其のまゝ持ち歸りました。旅館へ着けば、まづ汗じみた浴衣を脱いで、借りた着物にかへる。蒲郡では友人の宅で借りた浴衣を着たまゝ西浦へ行つてしまひ、西浦では宿の浴衣を着て出たまゝ歸京してしまつたのです。あとで西浦の學校の友人に頼み、あちらこちらと浴衣の交換をして貰ひました。借衣で五六日も遊んで居たのは、はじめての話です。蒲郡の友人はあの派手な辨慶縞の浴衣を着たまゝ近江八景めぐりに行つてしまつたのかと思つて居たさうです。バスケットは蒲郡驛へあづけたまゝ數日間捨て置いたので、預かり料金八十錢を取られてし

まひました。（大正十五年九月五日）

第二信

SO兄　今日は祭禮です。町内の若者や子どもたちは、朝から御輿をかついで騒ぎ廻つて居ます。正午頃、近所の植木屋が古い三味線を提げて通つたので、「何をするのか。」とたづねたら、「三時から湯屋の前の空地に餘興がある。」と答へました。餘興といふことで、私にも祭禮らしい感じが起りました。さうして昔の村の祭禮のことなどを思ひ出しました。

田舍では、此の祭禮といふものが、樂しい年中行事の一つになつて居ました。幼少の頃は、「もういくつ寢るとお祭りだ。」と云つて、十日も二十日も前から其の日を待ちあぐんだものです。親類の人が集まつて來るのも、衣服を着換へて鎭守の社へ參拜するのも、子どもの心には樂しいことであつたのです。また他村の祭禮に招かれるのも、愉快なことの一つでした。祭禮の季節になると、毎年親類の家から招かれたものです。吉良の一色へ大きな提灯を見に行つたことなどは、今でも記憶にのこつて居ます。かうした古い祭禮の思ひ出を辿つて見ると、田舍に育つた私には、それが忘れ難い樂しい年中行事の一つであつたやうです。恐らく現在の田舍に住める人々にも同じことでせう。

そこで、私は此の郊外の祭禮に就いて考へました。一昨年も昨年も私は此の祭禮を見ました。私にはそれが

何の興味もなかつたのです。町内の人が來て、門へ提灯をさげる釘を打ちつけてゆくのを見た時に、「また今年ももう祭禮の時が來たのかな。」と思ふ位のものです。私ばかりではなく隣家の人々もみなさうらしいのです。夕方になつてから、外へ出ますと、提灯にあかりをつけて居ない家が澤山ありました。祭禮だと云つて大騒ぎをして居るのは、みなもとから土地に住んで居る人ばかりです。他郷の人々即ち近く市内から轉居した人々は、全く冷淡なものです。子供までがさうです。御輿のあとへついて歩く者は、土地の子どもばかりです。新らしい住宅に住む官吏や軍人の子どもたちは、祭禮よりも、日曜に動物園へ連れて行つて貰ふのを喜んで居る有樣です。かうした所にも、新らしいものと舊いものとの距たりははつきりとあらはれて居ます。

區内では、昨年の末頃に寄附金をあつめて、すばらしい立派な御輿をつくりました。今年は、其の御輿が出來てから、はじめての祭禮です。町内がいくつかの區に分れて居て、どの區にも立派な御輿があるのに、此の區内だけは今までなかつたさうです。

西町は貧乏町と云はれて居た通り、全く此の區内では、到底御輿などの出來やう筈もなかつたのですが、だんだん戸數が增加して來たので、寄附金を募ることにしたのださうです。土地の若い者たちのいふところをきくと、外の區にある御輿が、此の區だけないのは、肩身が狹くて外の區の青年に顏が合はされぬといふのです。寄附は非常に不評判でした。祭禮に何の興味もたない他郷の移住者には、一萬圓以上もかけて今頃神輿をつくるなど、馬鹿々々しいやうに思はれたのです。それでも絶對に反對するやうな者はなく、みな若干の寄

附をしたので、やつと御輿が出來たのです。

私は、最初に思ひました。大都市の近在に住む青年が、今頃御輿をかつぎたがるやうではしかたがない。今日はもうそんな時節でもあるまい――と。だが、よく考へて見ると、それは餘りに沒趣味な解釋だと思ひました。歴史的に多年傳はつて來た趣味の生活を、さう簡單な理屈で拋棄してしまふわけにはなりますまい。一年に一度のことだ。御輿をかついで見ることもよい。寧ろそれ位の餘裕は、忙しい人間の生活の中に、殘して置きたいやうに思ひました。

私は、御輿をつくることに少しも異存がなかつたのです。たゞあとで不愉快に思つたのは、御輿に關係して種々の醜聞を耳にしたことです。集まつた寄附金がかなり不正なことに消えて居るといふ話を度々きゝました。寄附金の不正消費などは、珍らしい問題とも云はれません。どこにもあることです。併し、東京の近郊に住む有力者などの中には、一筋縄でいかない人物が多く、何かにつけ常に惡辣なことをして居るらしいのです。學問も何もない古い百姓は、これを牽制する力がないばかりでなく、却つて彼等のために籠絡せられ、其の手足として使用せられ居るやうな有樣であり、新たに移住した者は、町内のことなどに容喙するのを面倒に思つて居るのです。そこが彼等のつけ込みどころで、時々不埒なことを耳にします。

都市と農村の空氣が混同しつゝある郊外には、種々樣々の奇異な現象が現はれて居ます。此の祭禮を見ても、私はそれを切に感じました。昨今のやうに家が立ち續いてしまひますと、村祭りの氣分がだんだんになくなつ

て行きます。御輿をかつぐことを樂しみにして居る先住の人々に氣の毒な氣がします。（九月十四日夜）

第三信

SO兄　本日おハガキ拜見しました。拙作御高讀、慚愧の至りに存じます。

「子守唄」に就いての御教示、深謝します。如何にもこれは大阪のことでせう。橋の名は「木津や難波」に相違ありますまい。さうすれば、自ら「てんまの市」とあるは、「天滿の市」のことになります。大阪の事情をよく知らないので、近所の橋の名ばかりを考へて見た結果、あゝいふやうに書いたのです。岡崎に傳馬といふ町のあつたのを思ひ出して、てんまの市は傳馬のことではないかと、最初には考へて見たのですが、岡崎の近所には、それに似た名の橋がないので、全くわからなくなつてしまつたのです。

幼い時に、交通の不便な山の中で、大阪のことをうたつた子守唄をきかされて居たのも興味の深いことです。村の中には、大阪へ行つて居たやうな人はありません。どこからか順次に傳はつて來たものでせう。それを唄つて居た老人や子守女も、内容が何のことか知らなかつたかもわかりません。口から口へ移つて來たのにしては、意味が全くわからなくなるまでに、形のこはれなかつたのが不思議です。

いつか歸鄕の際に、「五萬石でも岡崎さまは、城の下まで船がつく。」といふ民謠の作者と時代がわからないといふ話が出た時、私はそれを全國各地に傳はつて居る類型的な民謠だと云ひました。此の民謠は、決して岡崎

だけのものではないと、其の時に私は斷定しましたが、歸鄕してから、ふと「吉備郡民謠集」を繙いて見ると、全く同じやうなのが一つ出て居ます。「五萬石でも松山樣は、城の下まで船がつく。」といふのです。多少文句の變はつたものは、全國各地にのこつて居るやうです。岡崎が發祥地で、全國各地に擴がつたのか、それとも別々に發生したのか、さうしたことは、到底調べやうがあるまいと思はれます。とにかく此の歌は如何にもあつさりした調子の高いものです。お國自慢の歌として上々の作と思はれるのです。同巧異曲の民謠が各地に傳はつて居るところを見ても、日本人の趣味と性格とによく調和したものに相違ありません。

民謠の傳播といふやうなことに興味をもつて居る私は、子守唄に就いての御教示から、一寸思ひついたまゝに書き添へました。（九月十六日）

第四信

ＳＯ兄　一昨日、突然太田君が訪問されました。久しぶりでした。一年近く逢はないやうに思ひます。過日歸鄕した時に、一度尋ねやうと思つたのでした。私はまだ碧海郡を歩いたことがないのです。いつも汽車に乘つて通るだけです。太田君を尋ねて高濱の方へ出て見たいといふ氣がしました。高濱には知人もありますし、海水浴場としてよい所だといふことを聞いて居ましたからです。豫定を變更したので、さうした希望は水泡に歸してしまひました。歸京後間もなく太田君の訪問を受けるといふのも偶然なことでした。

太田君は、名古屋で鷄の雜誌に飜譯の筆を執つて居ると云ひました。話は先づ鷄のことからはじまりました。妙な事情から、今年は私も少し養鷄や養魚のことを調べて見なければならぬやうになりました。親戚の中に東京近郊で養鷄事業をはじめたらどうだらうといふ者があつたからです。養鷄は、愛知の方が非常に進歩して居るといふこと、殊に碧海郡の養鷄は全國に冠たるものだといふことを、はじめて知つたやうな次第です。「文學の研究に興味をもつ者が、養鷄の記事を飜譯して居ては面白くなからう。」と云へば、「どうせ生活を支へる仕事は面白くないものだとあきらめて居る。」と、太田君は云つて居ました。さう云へばそれまでのものでせうが、何だか皮肉な感がありました。

ステヴンソンや馬琴の話が出ました。馬琴の話は、非常に愉快でした。私もその中に馬琴のことを書いて見たいと思つて居たからです。馬琴の長命を保つて多作をした話や、無愛想で人好きが悪く世間の評判のよくなかつた話などが長くつゞきました。高橋お傳や鳥追お松の話に移りました。其の話もまた大分長く續きました。

太田君は覺王山のことを語りました。私は覺王山を十五年來見ません。名古屋に住んで居た時には二度ばかり行つたやうに思ひます。一度は學校の兒童を連れて遠足に行きました。過日古い原稿の整理をしたら、其の中に「覺王山日暹寺」といふ一文がありました。當時の紀行文です。私は非常に面白く讀みました。當時は何の意義もないと思つた此のまづい紀行文が、今となつて見れば、如何なるものにも換へ難い記念です。

ＳＯ兄　私はものを書き記して行くことの意義をよく知つて居ます。これといふ目的もなく、毎日根氣よ

く書き止めて置いた日記が、風俗史や世相史の研究に必要な文獻となつた例もあります。よし他人には利益を與へず、興味をも起さしめない拙文でも、自分が讀めば、なつかしく往事を述懷し得る材料となる、それだけでも十分だと思ひます。

私は書いたものをみな印刷して置きたいと思つて居ます。稿本のまゝ持つて居れば、いつ燒けてしまふか知れません。東京のやうな火災の多いところに居れば、殊更にそれを深く感じます。發行して置けば、それが世間から影を潜めても、何れかに殘つて居ます。自分の書くものがよいものだとも思ひません。たゞ殘して置けばそれで滿足です。人間はそれぞれ天分が定まつて居り、且つ境遇の支配をも受けて居ます。努力して自己の內容を充實せしめ、其の內實の力を以て表現して行くこと、これより外にはどうとも方法がありません。よいものでなければ發表してはならぬといふやうな不得要領な拘束を受ける必要を私は少しも認めません。私は自分の書くものを他人が讀んでくれなくても左程悲觀しません。結局は一人で生れて一人で死んでゆく人間です。自分一人が歩いてゆく世界です。自分だけが其のものに浸ることを得ればそれでよいのです。少しでも多く賣れる書物でなければよい顏をしないといふやうな書店を相手にするものも不愉快でなりませんから、自分のものは自分に出版したいと、私は此の頃熟〻思ふやうになりました。

貴兄の健筆の話が出ました。每日の精力、敬服して居る次第であります。太田君も同感でした。每日の文字がたゞ新聞に出たのみで、片端から消えてゆくのは惜しいことだと思ひます。一氣呵成の粗雜な文字もあるや

うですが、紀行文や感想文の中には、後になつてから讀んでもかなり趣味の深いものも少なくないやうです。太田君とそんなことも話し合ひました。

SO兄　まだ書き足りないのですが、これで一と先づ此の通信を終ります。今年の秋は大に讀み大に書きます。此の夏は例年よりも壯健に暮すことが出來たのが、何よりも有り難いことです。私も貴兄の如く旅行する機會が今少しほしいと思ひます。さうすれば、私は、必ずもつと頑強な身體となり、夏の暑さに負けるやうなことはありませんから――。

太田君は、近く歸鄉するやうに云つて居ましたから、其の中にまた御會談の日もありませう。私も今度歸鄉したら、是非碧海郡の方を歩いて見るつもりで居ます。（九月十七日）

形原村の思ひ出

×

郷里の山水と云へば、私には先づ形原村が思ひ出される。形原村は、三河灣に沿へる淋しい漁村である。「海の眺めは蒲郡」と鐵道唱歌によつて紹介せられた蒲郡から渡船に乘ると、早い時には三十分位で着く。陸の方を迂回してゆくと、一時間半はかゝる。とにかく交通の不便な所である。

×

私は、こゝに四年ほど居た。それは、十八歳から二十二歳までの間であつた。青年の日は、何かにつけて思ひ出されるものである。一年一年と遠ざかつて行くに從ひ、其の思ひ出は、益ゝ深くなるやうに感ぜられる。青年時代の生活の背景となつて居る土地の山川風物、それは、恐らく何人も生涯を通じて忘れ難いものであらう。私は、もはや十五年も都會に住んで居る。形原村の生活は、遠い昔の夢となつてしまつた。が、私は、ま

だ形原村のことを忘れない。故郷忘じ難しといふ言葉を、年々歳々、次第に強く感じて行くばかりである。

×

形原村は、山水の美に惠まれた漁村である。北に山脈がめぐり、南を靜かな入江の波が洗つて居る。海にもいくつかの島々が遠く近くに散在し、海のあなたには、半島が長く横はつて居る。三河灣の沿岸には、風光の明媚な所が多い。海の眺めは、たゞ蒲郡ばかりでない。近年、海水浴場として、蒲郡以上に好評を博して居る御油の引馬野をはじめ、尙ほ世に現はれぬ勝地には、三谷の弘法山、西浦の龍田の濱、西へ廻はつて、宮崎の海岸等がある。形原村には、西浦や御油のやうに、小須磨を思はしめる白砂青松の長汀もなく、弘法山ほどの奇勝もない。併し、夕ぐれ、丘陵に立つて眺める海の景色により、かくれた勝地として紹介するだけの價値は十分ある。私は、四年間も同じ土地に暮し、其の風光の美には、殆ど麻痺して居たが、秋の夕べ、鮮かな殘光を浴びて、青い水と空との中に、紫色に浮ぶ沖の島などを見ては、自ら其の自然美に襟を正したものである。

×

此の村の人達は、みな質朴であつた。天眞爛漫であつた。言葉がぞんざいで、動作が粗暴であつた。交通の不便な漁村と云へば、すべてかうしたものかとも思はれたが、實に亂暴な人間が多かつた。些細なことにも、

濁聲を張り上げて爭つた。併し、此の村ほど、親しみ易い愛すべき人の多い所はなかつた。私は、其の純眞な村人の心を尊いものと思つた。今でもさう思つて居る。尤も私の云ふのは、二十年も前の形原村のことである。今では、村が町になつた、人々の氣質も大分變はつたであらう。昔の面影が殘つて居るかどうか。それさへも私は知らない。

×

村には樣々の人が居た。今日まではつきりと記憶に止まつて居る人も少なくない。形原村のことを思ひ出す度毎に、種々雜多の人々の印象が浮んで來る。酒の好きな人が多かつた。一晝夜でも二晝夜でも飲み續けるといふ酒豪の村長があつた。大酒飲みでありながら、規模の大きなしつかりとした珍らしい人材であることをあとで知つた。醉ふと無闇に人の天窓をなぐる癖のある郵便局長があつた。笑ひ上戸、泣き上戸といふやうな癖は、よく聞いて居るが、それはまた一種の特別な性癖であると思つた。道化役者のやうな小學校の校長があつた。醉ふと五圓紙幣を額に縛りつけて踊つた。心ある者は、其の下品な趣味を笑つた。併し、これも亦此の村の一偉彩であつた。三十一二歳で、郡内に少ない大きな小學校長の椅子を占めるほどの才人である。中々優れた所もあつた。頑固で强情な老教師があつた。何十年も尋常の一年ばかりを受持つて居た。村の者で、此の先生の教を受けない人はないといふ有樣であつた。自分の意見を容易に枉げないので、若い教員からはよく思は

れなかつた。常に校長からは煙がられた。が、私は其の直情徑行の性質を面白く思つた。度々學校へ暴れ込んで來る男があつた。立派な手腕をもつた職人であつたが、酒のために心が荒んで居た。どういふ事情か知らなかつたが、男の手一つで、尋常三年になる兒を養つて居た。あはれな家庭だと思つたが、今、自分の兒が尋常二年になつて見ると、尙更あはれに其の男のことが思ひ出される。よく太つた主婦と、痩せた亭主とが、海岸通りで雜貨店を開いて居た。働らき者で、近所の評判がよかつた。かうした人の印象は、書いても際限のないものである。此の邊で止めて置かう。

×

いつまでも記憶に殘る人、親しみを感ずる人、必ずしも優れた善行者や、村内の名望家とは限らない。酒飲みの村長や、道化役者のやうな校長や、頑固な老教師や、さうした人々の方が、今日では却つて慕はしく思はれる。青年時代と云ふものは、悲劇や喜劇を取り交ぜた一篇の戲曲である。背景たる山川風物、登場者たる多くの人々、何れもみな戲曲全體の上に何等かの意義をもつて居る。樣々の奇行を演じて、いつまでも消え去らぬ印象を與へた老壽男女は、自分の青年時代といふ戲曲の上から見れば、重要な役割をもつた人々である。心から尊敬することの出來ない人でも、なつかしく思ひ出される者のあるのは、さうしたわけから來て居る。

×

形原村は、私の青年時代の生活の背景をなして居る。故に、今日でも、郷土の風物と聞けば、先づ此の漁村の美しい山と水とが髣髴として浮んで來る。さうして自分の周圍をめぐれる當年の人々の活動が、繪卷物を繰るやうに、次から次へと展開されてゆく。

春風秋雨既に幾十年、世も移り、人も變はつて居る。此の偏僻な漁村にも、近く鐵道が敷設されるといふ話がある。山川風土のみは昔のまゝでも、人情や風俗といふものは、時勢と共に推移してゆくから、今日、其の土地で、昔のまゝの漁村を見ることは出來なからう。私は、現在の形原といふものに興味をもつて居ない。青年の日の追憶に織り込まれて居る靜かな三河灣の一漁村、其の山水と人とに無限のなつかしさを感じて居る。

(大正十五年七月三十一日)

秋窓雜記

×

此の間、或る雜誌から、現代の教育家の中で、最も尊敬して居るのは誰か、最も親しみを感じて居るのは誰かといふことを、ハガキで問ひ合はせて來た。最も尊敬して居るもの、最も親しみを感じて居るもの、しばらく考へて見たが、結局、一人もなかつた。尊敬して居る者は澤山ある。親しみを感じて居る者も澤山ある。私はあらゆる人を尊敬し、あらゆる人に親しみを感じて居る。其の中で誰を最も尊敬し、誰に最も親しみを感ずるといふやうな比較的の問題になると、答が出來ないのである。勿論、私には絶對に尊敬して居る人、絶對に親しみを感じて居る人といふものはない。さういふものを強ひて求むれば自分だけだ。自分を絶對に尊敬し絶對に親しむと云つても、不遜な意味が含まれて居るのではない。人間は自分の事だけしかわからないやうだ。自分の事もほんたうにはわからないが、他人の事よりもよくわかる。どこまでも深く内省して行けるものは自分だけだ。掘り下げて行けば、汚ないものにもぶつかる。きれいなものばかりではない。汚ないものの方が多

い。併し、そこに私は赤裸々な人間性を認める。其の人間性に最も深い親しみを感ずることが出來る。さうして、此の人間性の底にひらめく或るものに無限の敬意を拂ふことが出來る。誰を尊敬し、誰に親しみを感ずると云つたところで、つまるところは自分の中の尊敬するもの親しみを感ずるものを、外の人に移して見るだけだ。私には自分より外に絶對の尊敬や親昵の情を寄せるものはない。私の個人主義も、此の意味では大分徹底して來たやうだ。

×

また或る雜誌から、貴下の著書の中で、最も自信のあるものは何かといふハガキを受けた。これにも答が出來なかつた。私には自信のある著書などは一つもないからである。私の思想から云ふと、自分の著書などには自信のないのが當然であつた。誰でも書物を著はすまでには多少何かの意味に於て自信をもつであらう。全く自信のない著書が出せるものではない。だが、それが出版されて世に著はれるまで、その自信が保てるかどうか。人間の思想や生活は固定したものでない。絶えず流動して行くものである。昨日の說が今日になつて變はることも往々ある。人間が間斷なく進んで行くものとすれば、著書に對する自信などが長く保てる筈はない。三年も四年も前に出た著書に尙ほ自信があるといふならば、それは寧ろ不思議なことに屬する。生きた人間では云へない。人間の化石のいふことである。

書物といふものに妙な考をもつて居る人が多い。書物を著はすことを非常な重大事のやうに云ふ。書物として發表するものは、一世一代の定說でなければならぬやうに云ふ。多くの書物を著はすものに種々の難癖をつける。間違つた考だと私は思ふ。あとでいつまでも自信の保てるものでなければ書物として發表してはならないといふならば、生涯書物などは書けるものでない。自信などは出したあとから直に消えてゆく方がよいのだ。また當然さうあらなければならないのだ。出したあとで三年も五年も自負して居られるのは、却つて耻づべきことである。書物などは生きた人間の歩いてゆく記錄に過ぎないものだと私は思ふ。表現欲をもつた人間は、自分の思想を發表したいといふ要求をもつて居る。言語で發表するも文字で發表するも同じことである。今日發表するものは、今日の自分が全我を傾倒したものであればよい。明日明後日のことは人間の力で豫期し難い。明日になつても明後日になつても後悔しないものだけを發表せよといふのは理窟が合はない。書物の事を非常にやかましく云ひながら、言語ではかなり無責任な人がある。矛盾したことである。自重して容易にものを發表しないやうな口吻を漏らして居て、講習會や講演會に招聘せられて行くと、箆棒に筋道の立たない放言をする者がある。これは非常に耻ぢてよいことだと思ふ。言葉は其の場限り消えてゆくが、書いたものはいつまでも殘る。あとに痕跡の殘らないのを幸にして無責任な放言をする。卑劣の極である。痕跡の殘る著書はなるべく出さないやうにし、表面に篤學を裝ひ、先輩の歎心を買ひ、何等かの地位を得やうとする者に至つては唾棄すべきである。講壇學者にはかゝる者が少なくないと聞いて居る。短かい人間の定命だ。もつと樂々とし

た日を送りたいものだと思ふ。

自分の書いたものを粗末にして顧みない人がある。私にはそれも不思議である。文章といふものは表現欲を有する人間の餘儀ない排泄物だ。生きて居る限り止み難いところは糞尿に似て居る。併し、ものを書くといふ時には、人間の全我が活動する。或る思想が腦裡に閃めいて、それが文字になるまでには、其の精神上にかなり緊張した活動が起る。肉體の上にも少なからぬ疲勞を感ずる。さうして生み出した著書を粗末にする程わからない話はない。如何に全我を傾けて書いても、あとから見れば不滿足を感ずるやうになるのが當然だ。不滿足を感じても、自分の書いたものは、自分の書いたものに相違ない。低能兒でも不具者でも、自分の子は自分の子だ。粗末にすることは出來ない筈である。私は自分の書いたものを特別に愛着して居る。如何なる種類のものでも粗末にしない。長くも生きて居ない人間の一代の中の或る時期に精力を傾け根氣をつくしたものである。あとから見て拙くても、更に自信のないものでも、これを愛着する心は頗る強い。不具者でも低能兒でも、自分の子はかはいゝと同じ心理作用であらう。

×

人間には先天的の孤獨性をもつた者があるやうだ。例へばデカルトのやうな人がそれだ。名門の家に生れながら、生涯を孤獨の生活に終つた。學界の名聲が如何に高くなつても、諸方から非難攻撃せられても、喜びも

悲しみもしなかつた。自己宣傳をして、自分の學說を押賣りして歩くやうなことは全然出來ない藝當であつた。却つて、彼は殊更に人を避けた。彼は嘗て住所を人に秘するために度々轉居した。世にはまたかういふ孤獨性に全く反對した性質をもつた者もある。何といふ名をつけてよいかわからないが、とにかく賑やかな生活をするに都合のよい性質をもつた者がある。其の例として私はいつもイエス・キリストを思ひ出す。彼は常に種々の迫害を受けながらも、多くの弟子と多くの信者に圍繞せられて居た。彼の行くところ其處には多くの人が集まつた。彼自身も民衆に向つて話しかけなければ居られなかつた。

人間は前のやうな二つの性格に分けて見ることが出來る。歷史上の人物もさうだ。現在吾人の周圍にある人物もさうだ。學問の方面でも、事業の方面でも、默つて着々と進んでゆく者もあり、常に自己宣傳にばかり浮身をやつして居る者もある。

×

私は孤獨性のタイプに屬するやうだ。私は殊更に人間の群から離れやうとしたことはない。現在でも人間の集まる社會の中に活動して居る。人間を相手にする仕事をして居る。家族もあり、友人もある。併し、多くの人間の中に居ることは、私の心に滿足を與へない。時には却つて苦痛を感ずることもある。往々、人の世の煩はしさを厭ひ、ひとり離れて住みたいと思ふ。人から賞められてもさほど嬉しくはない。誰に賞められても有

頂天にはなれない。輕薄な追從に至つては、自ら嘔吐を催すだけである。私は自分の孤獨性を此のごろ最もはつきりと自覺するやうになつた。

孤獨はさびしくない。孤獨の境に徹してゆけば、自ら其處に一つの歡喜といふものが湧いて來る。孤獨性をもつた昔の思想家や哲學者は、最も深くさうした歡喜の情に浸ることが出來たであらう。何かに縋るものがなければ生きて居る甲斐がない——といふ者がある。私はさう思はない。自分のことだけしかわからないのが人間だ。自分の外に自分の生命を托するものがあるかどうか、それは到底わからない。何か縋るものがあるやうに見えるのは、溺れる者に對する一本の藁だ。さうしたものに縋つて眞の喜びが得られやうとは思はない。孤獨の境に徹した喜びのみが眞の喜びだ。私はさう信じて居る。

×

これは深川にあつた實話である。納豆を賣つて不具者となつた父を養ふ殊勝な孝女があつた。模範兒童として表彰せられた。映畫になつて全國に紹介せられた。其處の校長は自分の著はした細民哀話の中にそれを書いた。此の書物がまた大に賣れたので、彼女の名は益〻高くなつた。かくして遠近から非常な同情を得た。今日でもまだ田舍の方では其の寫眞を見て涙を流してる人もあらう。また其の著書を讀んで感激して居る人もあらう。それはそれでよい。物には表裏がある。裏面が表面ほど美しいものであるならば、世の中はもう少し住み

よからう。どこでも裏面は表面ほど美しなくい。孝女の話には後日物語がある。震災の時に不具者の父は死んでしまつた。死ぬと間もなく母親は情夫をこしらへて其の子を生んだ。孝女は小學校を卒業して或る會社につとめ、妙齡の娘になつた。其の娘が此のごろ母親をすてゝ置いて家出をしてしまつた。情夫が出來て、手に手をとつて雲がくれしたのだとみな信じて居るさうだ。かうした話は、ザラにあることだ。珍らしい種でもない。夫の死後妻が他の男と通ずることも、妙齡の娘が戀愛沙汰で家出することも、甚だ月並な話だ。が、孝女の映畫や書物で涙をしぼつた者は、此の話をきくと一寸不快な感が起る。だまされたやうな氣がする。それはどうしたわけであらう。醜惡な事實は、人間の生活につきものだ。人間といふものは、必ず醜惡な一面をもつて居る。此の娘が家出をしたとて少しも不思議な話ではない。彼の女は貧しい家に生れた。父は不具者で勞働の出來ない身體であつた。納豆を賣つて家の生計を助けて居る子どもは、開闢以來、此の少女が一人だけかといふと、決してのことだ。納豆を賣らなければ生計を立てゝ行くことが出來なかつたから、毎朝納豆を賣り歩いただけさうではない。現に私は毎朝近所で納豆を賣り歩く少年を見て居る。細民の多い下町の方へ行つたら、此の種類の子どもは其の數も夥しいことであらう。然るに偶然にも何等かの事情で彼の女一人のみが、特別に社會の注目を惹くやうになつただけである。彼は孝女に相違ない。孝女を孝女として賞揚するはよいことである。併し、彼の女を賞揚するならば、勞働して家計を助けて居る者は、みな同じやうに賞揚しなければならない。其

の一人だけを特別に取りたてゝ賞揚するは不公平の極である。況んや、彼の女は過當に賞讃せられた。彼の女がひとり孝女であるかの如く映畫や文字で全國的に紹介せられた。如何に其の名が高まつたところで、別に彼の女が常人と列を異にする偉人になつたわけでもない。彼は矢はり女子に過ぎなかつた。妙齢の娘になれば、妙齢の娘にありがちな煩悶をはじめる。幼少の頃には、多少殊勝な心がけをもつて居たにしても、もともと貧しい家に生れてよくない家庭に育つた女である。學校はたゞ小學校を出たばかりだ。無分別な家出をしたとて不思議な話でもない。過分な美名をうたはれたことは、彼の女にとつて却つて不幸であつた。彼の女が偶像化したために社會其のものは種々の利益を得た。映畫會社はフィルムの材料を得た。新聞や雜誌は紙上を賑はす種を得た。世の中の人々は感動して若干の善心を起したであらう。不孝者は不孝の行を耻ぢ、子をもつ親はよき教訓談を見出したのを喜んだであらう。併し、當人たる彼の女は何ものを得たか。偶像的な名聲を高めても、彼の醜い顏は美しくならなかつた。一躍して玉の輿に乘ることは出來なかつた。たゞ幼ない心に虛榮心を植ゑつけられただけであつた。何にもならない虛名を馳せたばかりに、あまり美人ではない彼の女に云ひ寄る男が多くなつた位のことが結論であつた。

此の話を思ふにつけても、人間といふものは人間らしく暮したいものだと思ふ。人並はづれた虛名などを思ふ者のあはれさを感ずる。何でもない平々凡々な人間が、新聞や雜誌に肖像入りで麗々しく掲げられて居るのを見ると、何となく淺間しくなる。（大正十五年九月五日）

或る友へ

U S 君

今年も秋が近づいた。殘る暑さはきびしいが、朝夕の風の涼しさ。今、机に向つて居ると、窓から青梧の枯葉が舞ひ込んで來た。一葉落ちて天下の秋を知るといふ言葉が思ひ出された。

夏になると私は全くいけない。腸の病氣はもう蔓性だ。容易に癒りさうにない。だが、まだ幸なことに、困るのは夏の間だけだ。秋になれば忘れたやうに壯健になつてしまふ。秋から冬へかけては、非常に元氣が出る。少しも疲れといふものを知らない。讀むことや書くことに興味が湧いて來る。いくら讀んでもいくら書いても疲れない。讀めば讀む程書けば書くほど頭腦が透明になつてゆく。夏は全くそれに反對だ。七月になるともう駄目だ。食慾はなくなる。消化は不良になる。元氣は衰へる。仕事は一切手につかない。ハガキ一枚でさへも中々書けない。嘘のやうな話だが事實だ。毎日何もせずに遊んで居ると、樣々の妄想が頭腦の中に浮ぶ。世の中のことが馬鹿らしくなる。人間の事業が無意義に思はれる。思想が恐ろしく破壞的の傾向を帶んで來る。人の話によると、これは神經衰弱だといふ。近ごろは自分にもさう思つて居る。私はもと神經の健全を人に誇つ

て居た。神經衰弱は、閑人が贅澤にかゝる病氣だと思つて居た、然るに、數年來私も自分の神經衰弱を意識するやうになつた。腸の機能が鈍つて、消化が不良になり、健康が衰へて來ると、同時に神經の活動も常態を失ふやうになる。私の神經衰弱は、いつも腸の病氣から來るやうに思つて居る。今年も亦例年の通りであつた。七月のはじめから、私は殆ど何もせずに遊んでしまつた。生きて居るのが苦しかつた。毎日無聊に苦しんで居たが、急に思ひ立つて十日程旅に出た。駿豆の山と海に數日を暮してから一寸歸鄉した。其の時に君を訪ねる機會を得なかつたのは殘念だつた。が、君の消息は友人から間接にきいた。身體ももとのやうになつたさうで先づ先づ何よりの事だ。

U　S　君

旅行中に偶然N海岸へ寄つた。乘合自動車がN海岸へ着いたのは夕方だつた。車から降りると、其處は×旅館の前だつた。××旅館といふ文字を見て、ふるい記憶をよび起した。嘗て二人で氣まぐれな散歩をした時に、寄つて食事をした家だつた。あれは大正十一年のことだから、四年前の話だ。當時はまだ旅館といふ名もついて居なかつた。避暑の客を泊めるやうな設備も出來て居なかつた。四年の間に樣子がすつかり變はつてしまつたが、紛れもない其の家だつた。歩き疲れた身體を休めながら信仰の話などをした二階の室が先づ眼についた。私は其の旅館に三日の間滯在した。もう少し長く居たかつたが、思ひがけないことから急に引き上げ

てしまつた。

U　S　君

私は今こゝになつかしいN海岸の思ひ出を君に語りたい。N海岸へ着いた時に、何よりも先づ驚いたのは、時勢の變はりやうと云ふことだつた。私は四年の間一度も其の地を踏まなかつた。其の地を訪ねなかつた。其の地の話をきいたこともなかつた。四年後に偶然訪れた時のN海岸は、かなり烈しい變はりやうであつた。交通不便で聞えた邊僻の漁村へ、K驛から汽車の發着毎に、乘合自動車が通ふやうになつたこと、それが第一に私を驚かした事實だつた。海水浴の客に二階の室を貸して居た家が、旅館と變はつたことも、意外の感を與へた。かうした推移は、たゞ此の海岸ばかりではなかつた。通路に當つて居るK町の如きもひどく變はつて居た。こゝも數年前までは寂しい漁村であつたのに、今では町制が布かれて居る。道路なども非常によくなつたやうだ。町の入口から渡船場まで一直線に幅の廣い新道が出來、兩側には家が立ちつゞいた。渡船場のあたりには活動寫眞館も建つて、中から奏樂の太鼓が聞えて居た。Kの松原から渡船に乘つてこゝへ着き、N海岸まで歩いた頃とは、全く樣子が違つて居た。

私は××旅館の納涼臺に横はつて、ひとり追憶の夢に浸つた。夢、夢、それは私に最も慕はしいものだ。私は夢なしに生きて行かれない。まだ見ぬ未來の夢にあこがれるのもよいが、過ぎ去つて再びかへらぬ過去の夢を趁ふのも樂しい。現實の世は苦痛だ。夢の世界のみが悅樂の境地だ。

前には形ばかりの小さい松林があつた。林の下から砂濱がひらけ、砂濱の裾を波のしぶきが濡らして居た。夏の日は砂濱にあかあかと輝やいて居たが、海の上を吹いて來る風は涼しかつた。引潮の淺瀨には、海水浴の男女が群がつて居た。沖の力でボートを漕ぐ者もあつた。砂の上を裸で飛び廻はつて居る子等もあつた。室の中からはハモニカやレコードの唄が聞えた。夏の海岸は騷がしかつた。此の騷がしい中に居て、四年前の靜かな秋の海を思つた。

君と一しよに此の海岸へ來たのは、十月の末であつた。それは、ほんたうに氣まぐれな散歩であつた。K町(其の頃は村)通ひの渡船に乘つたのは、船の上から海を見たいといふだけの希望であつた。船が渡船場に着いても行くところはなかつた。たゞ目的もなく歩いて居る中に、ふとNの海岸といふことが腦裡に描かれたのであつた。Nの海岸へ着くと疲れて空腹を感じた。併し、其の頃はまだ食事の仕度をして貰ふ家もなかつた。濱邊を通る人にきいて、漸く此の家を訪ねたのでめつた。二階から海を眺めると、秋の日が美しく輝やいて居た。其の光の明るさ。明るい中にも寂しみの含まれた秋の日を浴びて、海は吐息して居た。波の音が極めて靜かに聞えた。さうした情景は、君も今尙ほ忘れないことと思ふ。

U S 君

二階の室から海を見下しながら、雜談に時を費やしたが、其の話の中で今日までよく記憶して居るのは、人生觀や信仰の問題であつた。君の人生觀や宗教觀は、如何にも秋の日光に調和したものであつた。

君は長い間病氣に苦しんだ。君を市の病院にたづねた時は、再會の機があらうとも思はれなかつた。君の病氣が追々よくなつて退院の知らせをきいたのは、それから數ヶ月の後であつた。いく人かの友人を同じ病によつて失つた私は、君の全快を非常に喜ばしく思つた。偶然Nの海岸を訪れたのは、君が病後の身體をKの農家に靜養して居る時であつた。一度び生死の境をさまよつた君の思想がよほど變はつて居たことは、健全な時の君を知れる者の直に感ずる所であつた。併し、病院で逢つた時のやうなセンチメンタルの影は全く失せて居た。秋の海邊に照る日光のやうな靜けさが、君の思想の中に流れて居た。君は病苦の體驗から得た人生觀を語つた。しめやかな浪の音が時々聞えた。私は君の話に最も深い意味を感じた。

U S 君

其の時からもう四年の歲月が流れて居る。其の後一度も君に逢はない。二三度手紙を貰つたが、いろいろな俗用にまぎれて詳しい返事も書かなかつた。今でも當時と同じやうに人生問題や宗教問題を君が考へて居るかど

うかわからない。時の流れは總べてのものを消して行くやうだ。地上に生ずる樣々の事件や葛藤も時と共に跡方なく消えてしまふ。それのみではない。人間の生命も一定の時が來れば、地上から消え去るものだ。灯皿に殘る行燈の油が燃えるだけ燃えてしまへば、いつとなくともし灯が消えて行くのと同じことだ。さういふ問題はまた別に書くとしやうが、とにかく時が移れば、人も變はり、人の思想も變はつてゆく。當時を回想した私は、四年前の君が如何に變はり、君の思想が如何に變はつて居るかを先づ考へて見ないわけにはいかなかつた。

U S 君

同じ渚の同じ家に着いて、私は先づ君のことを思ひ出した。君の話を思ひ出した。秋の海の靜けさを思ひ出した。氣づかはれた君の身體も、今では全く恢復したと人の噂にきいた。壯健な身體となつた君の話を、同じ渚にきくことの出來なかつたのは殘念だつた。君を訪づれる機會を失つたことも殘念だつた。それで歸京してから此のとりとめもない通信を書いた。いろいろな感慨が湧いて來て、思ふことが十分に書けない。これで失禮する。(大正十五八月二十五日)

塙檢校の墓に詣づるの記

檢校塙保己一の墓が四谷にあることは、何かの書物で讀んだやうに思ふ。併し、南寺町の愛染院に其の墓のあることは、近ごろまで知らなかつた。はじめは安樂寺といふ寺にあつたが、安樂寺が廢寺になつてから、こゝに移されたといふ話もあとできいた。

暮の二十日、山田氏と一しよに、山中共古老先生を訪ねる途すがら、偶〻南寺町を通りかゝつた時、山田氏はふと自分を顧みて、「こゝに塙保己一先生の墓があります。」と側の寺を指示された。道が少し勾配になつた其の坂の中程の左に古い寺の門があつて、門の前に立てる木標には、塙檢校の墓此の寺にありといふ意味の文字が記してあつた。山田氏はまた門の傍の土藏を仰いで、「此の中に群書類從の板木がしまつてある筈です。夏の頃はあの窓からよく見えて居りました。」と語られる。

私は、塙檢校の墓に詣でたいと思つた。門前を通りかゝつたのは、何よりもよい機會だ。一寸立寄つて見たくなつたので、山田氏に案內を賴んだ。門をくゞつて石疊の上を歩き、本堂の前から右に折れて裏の墓地へ出た。冬ぐれの墓地はさびしかつた。よく晴れた空に、日は美しく照り輝やいて居たが、其の光が白銀のやうに

冷たかつた。霜どけのした土は雨あがりの如く下駄の裏に粘着した。「私も大分長い間來ないから、どれか忘れてしまつた。一寸きいて來ます。」と云つて、山田氏は本堂の方に引き返へされた。私は、ひとり墓地の間に彳んで居た。並んで居るさまざまの墓標を眺めた。大きな墓もある。小さい墓もある。中にはかなり廣い面積を領して居るのもあつた。生きて居る間のみならず、死後までもかうして等級がつけられるのかと思ふと、よい心地がしなかつた。名もない人の墓が廣い面積を獨占して傲然と立つて居るのを見ては、少し悲哀の感を催した。死んでも墓だけはいらないと思つた。墓を立てることだけは固く斷はりたいといふ氣がした。まだ新らしい墓石の上に香華が捧げられ、煙がさびしく立ちのぼつて居るのは、あはれであつた。

私は、墓參といふやうなことが好きでない。かういふことは、如何につとめても駄目だ。死んだ人を悼む心が起らないのではない。死んだ人を悼む心は他の人々よりも一層深い。たゞ墓參といふやうな形式的なことが辛いのだ。今までに滅多に墓參をしたことはない。墓參をしやうとは思はなかつた。今日、塙檢校の墓に詣でやうといふ心になつたのは、甚だ珍らしい例だ。私は、塙檢校に深い敬意を表して居る。盲人は元來記憶力に富めるものだ。併し、彼のやうに恐ろしい記憶力をもつた者は少なからう。たゞ記憶力が優れて居たのみならず、彼は、古典の蒐集上梓といふ大事業を企て、而かもこれを生涯の中に成し遂げた。塙檢校の如き天才の輩出したことは、我が國の誇りだ。かゝる天才の事業はもう少しよく認められてもよい筈だ。「群書類從」の編纂上梓の如きは、今日の學問と云ふものから見れば、或は無意味な徒勞であると云へば云はれやう。博覽強記、

古今の典籍に通じて居るのみで、彼は、自家の學說といふものを主唱しなかつた。學說の歷史や思想の歷史の上には、何等の痕跡も殘して居ない。併し、彼の成し遂げた古典の蒐集上梓は、今日の研究者に多大の便宜を與へて居る。彼の企てた大事業を無意味な徒勞と見るのは酷だ。「群書類從」は、塙保己一其の人の自說を傳へたものでない。日本の文化を集積した一大寶庫だ。此の寶庫の建築者たる功績は、當然彼が負ふべきものだ。墓參の心を私が起したのは、此の天才の事業を思ひ浮べて、回顧的の夢に耽りたいからであつた。

私は、塙檢校を思ひ出す時に、必ず其の師匠の雨富檢校須賀一を聯想する。さうして、雨富檢校の人格をなつかしく思ふ。賴山陽の兩親が其の子の將來に心を勞したことと、併せていつも思ひ浮べるのは、雨富檢校がよく其の弟子を愛したことだ。其の純情は、輕薄な世に求め難いものであつた。塙檢校の門人中山信名平四撰「溫古堂塙先生傳」（「日本教育史資料」收錄）の中に曰く、「はじめ大人雨富が室に入りし時、其のをしへにまかせ、三弦を習ひけるに、今日習ひ得しものは、一夜が程に忘れて、明日は知らずなりけり。すべて三年が間に一曲をも全く覺え得ざるのみか、調子さへ合はざりければ、雨富もせんすべなくて、針治の術を旨と習はせけるに、醫書讀む方は人にすぐれて、二度よますれば、其の次の度には、一文字もたがへず讀本となりけれど、術にかくれば人よりは遙かに劣れり。こは文讀むかたにひかるればなるべし。雨富餘りに覺えて、せめ云ひけるは、凡そ人の鄕里を去りて他邦に赴くは、なすことあらんとての意なり。汝、父母の家を出でゝ、こゝに來るも然かなるべし。されども、產業となすべきこと一つも習ひ得るものなし。且つ朝夕汝がなす所は、露ばかりも我

が心にかなはず、さはあれども、門人の祿となる術ををしふるは師の職分なり。汝が好まざることをなせといふにあらず、賊と博とを除きてのほかは、何にまれ、心にかなひたらむものをつとむべし。これよりして三とせが間、汝を養ふべし。三年へてなすことなくば、速かに鄕里に送りやるべしといふ。大人肝にしるして晝夜となく讀書をつとめしかば、終には名をあらはすまでになりにけり。」此の一節を讀んでも雨富檢校の弟子に對する態度が察せられる。彼はまた塙保己一の病身を憂ひ、旅費をとゝのへて旅行をさせた。其のことがかう書いてある。「大人もと病多し。雨富、よく養ふになほいえず、一日、雨富、大人に告げて曰く、なす事あらんと思ふもの、病多ければ果すこと能はず、病ある人旅に赴くときは、まゝいゆる事あり。思ふに汝が病もまたしかる事あらん。我れ金五兩をあたふべし。われに代はりて伊勢の神宮に詣でよ。雨ふらん日はゆくことなかれ。必ずあしき氣を受けぬべし。費あまりあらば、なほ他方にゆき疇くるに從ひて歸り來るべし。」雨富檢校が如何によく弟子をいたはる人であつたかといふことは、此の文章によつてよくわかる。雨のふる日には旅をするなといふやうな細かい注意を與へるところには、兩親も及ばぬ師匠の情が溢れて居る。雨富檢校は、死ぬまで保己一のことをかれこれと心配した。保己一が檢校の地位についたのも雨富檢校の情ある盡力によるものであつた。雨富檢校の如きは、實に立派な教育者の魂をもつた人だ。學生に少しの失策があれば、これを放校して、自分の責任を免れやうとするやうな今日の專門學校長などとは、雲泥の相違だ。保己一が天分を自由に伸ばして大事業を成し遂げ、塙檢校として今日までも尊敬せられるやうになつたのは、雨富檢校の後援と鞭韃の力少な

からざるものだ。「大人意を得て後常に謂へらく、われ柔より讀書を好まざるにあらず。然れども、業をなし名を顯はすものは、みな師のたまものなり。たゞうらむる處は、師の在世のほど、かばかりの幸をきかしむることなきのみあり。」とある。塙檢校も亦恩誼を知れる者であつた。此の師にして此の弟子ありだ。

塙檢校に就いて常に感ずるのは、記憶力の特に强かつたこと、盲人として古典保存の大事業を成し遂げたことの外に、人格の高潔なことだ。塙檢校が利慾に淡泊であつたことには、種々の逸話が遺つて居る。法兄豊一の遺産相續を辭退した話は最も有名だ。當時の盲人は、みな財を蓄へて、或る地位に就く權利を購ひ、安樂な生活をするのを理想として居た。然るに、塙檢校は、蓄財といふことを全然念頭に置かなかつた。人のすゝめにも容易に從はなかつた。彼が勾當となり、檢校となつたのも、友人や師匠の好意と同情によるものであつた。非常に質素な生活をなし、餘財は悉く藏書のために費やしてしまつた。從つて、彼は常に貧しい日を送つた。時には食を得ることも出來ない窮乏の日が續いた。併し、彼は、さういふ生活を少しも厭はなかつた。檢校が溫厚な人であつた事に就いても、種々の記錄が殘つて居る。溫顏を以て人に接し、犬馬に對してすら叱咤の聲を發したことはなかつたとある。人格といふ點に於ても、罕に見る立派な學者であつたことが想像される。

間もなく歸つて來た山田氏は、「やつとわかりました。これでした。」と私を墓地の片隅に導いて、其の一つの碑を敎へられた。坪ばかりの土を少し高く盛り、石の圍をめぐらした中に、黑ずんだ石の碑が立つて居る。碑面の文字によつて、それが紛れもない塙檢校の墓であることを知つた。私は輕く目禮して立ち去つた。

中島半次郎氏を悼む

今朝(十二月二十二日)の新聞紙によつて、中島半次郎氏の病歿を知つた。中島氏が肋膜炎に罹り、自宅に療養中であることは、數日前に友人から聞いたが、今日、此の訃報を見て暗然とした。

最近に、我が教育界は、幾多の名士を喪つた。其の中でも、佐々木吉三郎氏の如き、稻垣末松氏の如き、中島半次郎氏の如き、教育社會に親しみの深い、而かも、尙ほそれぞれの方面に活動を期待せられて居た人々が、忽然と此の世から消え去つたことには、無上の哀愁を感ずる。

中島半次郎氏は、我が教育學界にも少なからぬ貢献をした人だ。嘗て獨逸に留學し、歸朝早々、人格的教育學を提唱して、教育界の注意を喚起したことは、今尙ほ人の記憶に新らしく殘つて居る。著書としては、未だ十分に其の力量を示した程のものも出なかつたが、氏の本領は、慥かに教育學者たる點にあつた。「教育學の本質」と題する一書が最近に出版されるやうにきいて居たが、其の書物の出ない中に他界せられたのは、返す返すも遺憾なことであつた。

中島半次郎氏は、實際教育界にも、大に活動した人だ。今日までの經歷を吾人は詳しく知らない。併し、最

近まで、早稻田高等學院長として、其の繁雜な實務に執掌して居られたことは、何人もよく知れることだ。

予は、學者としての中半次島郎氏よりも、教育者としての中島半次郎氏よりも、個人としての中島半次郎氏に、より深い親しみを感じて居た。中島氏の名は、早稻田大學の講義錄によつてはじめて知つた、予は、明治三十六年度の早稻田大學の校外生だ。文學教育科と政治經濟科とを兼修した。當時の文學教育科の講義錄に、中島半次郎氏の「東洋教育史」と「西洋教育史」が掲載されて居た。當年十七歲の讀書慾に富んだ予は、毎日それを耽讀したので、中島氏の名は、自ら深く腦裡に銘記せられて居た。中島氏の人物に就いての具體的な話は、後に同じ小學校に居た伊與田幾次氏から聞いた。伊與田氏は名古屋師範學校の出身で、現在に於ても同市內有數の小學校長だ。かつて天津居留地の小學教育に從事して居た頃、其の地で中島半次郎氏や吉野作造氏や渡邊龍聖氏を知つたと云つて、よくこれ等の人々のことを語られた。予は全く此の伊與田氏を介して個人としての中島半次郎氏を知れる者だ。

中島半次郎氏に初めて面會したのは、上京後一年もたつてからの事、何かの會合の時であつたやうに思ふが、はつきりと記憶して居ない。尤も其の前に面會する機會は度々あつたらうが、かうした職業に似合はない出不精で不愛想な予のことであるから、いつも機會を逸してしまつたのだ。其の後高田豐川町の私宅へ一度、一橋の高等商業學校(今の商科大學)講堂へ一度訪れた。何れもみな雜誌の用件であつた。馬橋の新邸に移られてから、間もなく、予も中野に轉居し、住所が接近したので、予は、再三訪問した。高臺のひろびろとした邸

宅の應接室で、萠え出た綠の芝生を見下しながら、世間話に興じたこともあつた。一度は、伊與田君と同道して訪問したこともあつた。其の時には不在であつた。震災後間もない時の事だ。應接室の修繕中であつたことを記憶して居る。

中島氏は靜かな感じのする人であつた。溫厚で、正直で、眞摯で、怜悧なところがあつて、如何にも教育家らしい型の人であつた。缺點を云へば、少し小心過ぎることだ。早稻田大學といふ私學の本山の幹部といふ地位にある人だから、もう少し膽力があり、力强いところがあつてもよいやうにいつも思はれた。併し、また一面からいふと、これほどの地位にありながら、少しも傲然としたところがない親しみ易い人だつた。近所まで來たとか云つて、二度ほど拙宅へも立寄られ、いろいろ古い書物の話などをして歸られた。學問の話としては、狹い意味の教育學や教育問題に限られて居たが、多少世俗的の知識や興味もある人であつた。馬橋の邸宅は、中島力造氏にすゝめられて、今から何年か前に坪何錢とかで買つた土地だといふやうなことを語られたこともあつた。中島氏は要領のよい人だ—などといふ評も時々耳にした。併し、さういふ評によつて中島氏を才人肌の人間と思つたら非常な誤解だ。中島氏は、書齋へこもつて學問に沒頭すべき人であつた。高等學院の院長といふ地位さへも不適任に思はれた。學校の關係で餘儀なくかうした椅子を與へられたものであらうが、中島氏自身には苦しい仕事であつたに相違ない。高等學院長時代にも、二三度逢つた。一度は高等學院に訪問したこともあつた。いつも俗務が多くて何も出來ないことを歎じて居られた。其の歎聲は、たゞ予の如き門外漢に對

するお座なりの辭とも思はれなかつた。其の後中島氏は、神經衰弱に罹つて、かなり長い間、或る溫泉に靜養して居られた。此の一事によつても、中島氏のために高等學院長の事務が苦痛であつたことが察せられる。

最近に、予は、偶然中島氏と同じ電車に乘り合はして、角筈の終點で下車した。これが最後の袂別であつた。歩きながら、近況等を話された。高等學院を辭して、大學部の教授專任になつたことを語られ、これから少し讀書や研究をしたいといふ抱負を漏された。住友銀行の前まで來ると、訪ねる人があると云つて、横丁へはいつて行かれた。

予は、中島氏と特別の關係を有する者でない。他の教育學者に對する關係と全く等しい。併し、今日、訃音に接して、哀惜の情に堪えないものがある。惜しい人を喪つた、よい人を喪つたといふことを深く感ずる。予は、中島氏の逝去を心から悼む者だ。依つて、予の如き生活をして居る者にとつて、哀悼の意を表するに最も適當な途と信ずる方法により、此の一篇を草して、これを自分に關係のある雜誌に掲げ、且つ自分の著書に採錄し、ながく故人を追憶する資料とすることにした。(一五•一二•二二)

窮迫先生

友人から送られた地方の新聞を見て居ると、第三面にある「窮迫先生」といふ記者の書いた隨筆の文字が目についた。それを一氣に讀み下した。

山幸吳服店で我々の會の展覽會を見て居ると、五六人の子供を連れた五十餘りとも見える男がやつて來た。近藤力太郎君の紹介によると、石楠派の俳人であるさうだ。窮迫先生と、まさか然うも言はなかつたが、そんな變な名の人であつた。蛙が好きなので名聲は四方にとゞろいて居る。

と先づはじめに書いてある。蛙の好きな俳人とあるので、私も直に「あの男の事だな。」と思ひ起した。記者の所謂窮迫先生は、私の知つて居る人だつた。

窮迫先生は、もと小學校の校長だつた。かなりに信用のある良教師だつた。小學校教員中には珍らしい學者だといふこと、磊落で剛腹な親分肌の男だといふことが、多くの若い教師を彼の周圍に引きつけた。一時は、郡教育會の副會長か何かに推された程の人氣があつた。

所が、此の校長は、何かの失敗があつて、教育界を去らなければならなくなつた。部下の女教員と醜聞を流

したとか何とかいふやうな話だつた。私が其の話を聞いたのは、東京へ出てからのことだつた。其の校長と親しくして居た友人から、偶然にそれを聞き出したのであつた。

「あれだけの才人だから、學校を退いたとて、外に何でも出來るだらう。」

と私は云つた。友人は、私の言葉を否定して、

「駄目だよ。あの男も今では更に元氣はない。學問もあるし才氣ももつて居るから、新聞記者のやうなことはどうかと思つて、一旗擧げるやうにいくらすゝめても效能がない。五年前には、あんなしみつたれた人間でもなかつたのに……。」

と言つた。それから一年程たつた。其の男がT市で中學生の寄宿舍のやうたものを經營して居るときいた。さうして、時々不都合なことをするので、信用は全くないといふ話を耳にした。

私は、その男の全盛時代を思ひ出して、何となくあはれに感じた。多くの若い教師を左右に集めて、一郡の親分を氣取つた姿が眼に浮んだ。

私は其の男にたゞ一度ぎり逢つた。それは、其の男が師範學校を卒業して間もない頃の事だつた。當時、私は、まだやつと准教員になつたばかりだつた。同じ學校に、其の男の許へ通ひ、國語を教へて貰つて居る者があつたのを、窮知心の旺盛な私やまだ一人の若い代用教員は、ひどく羨ましがつて居た。土曜日毎に一里半ほど隔つて居る其の男の許へ出かける友人を見ては、嫉ましいやうな心も起つた。友人は、いつも其の男からき

いて來た詩の話や小說の話をした。かれこれして居る中に、また一人其の男の許へ弟子入りをした者があつた。それは、私の下宿して居る近所の青年だつた。教員ではなかつた。土地の豪農の一人息子で、私とは讀書の友人だつた。其の男の話を兩方から聞いて、私の好學心は更に一層煽り立てられた。其の頃から既に其の男の許へは、青年教師が澤山押しかけて行くらしかつた。歌の會などが時々開かれるといふこともきいた。文學好の青年であつた私には、それも亦羨望に堪えないものの一つであつた。私は、遂に、もう一人の友人と一しよに校長の紹介狀を貰つて、其の男の許を訪れた。弟子入りを申入れたわけである。

寒い冬の夜だつた。學校の教員住宅に其の男を訪れた。それが私には初對面でさうして最後だつた。まだ師範學校を出たばかりの若い訓導が來て居て、主人と盛んに教育論や文藝論を戰はせて居た。主人は、紹介狀を讀んだ。何とも云はずに校長宛の手紙を書いて渡した。さうして「××君によろしく。」と云つた。また「折角來たから話して行くがよい。」と云つた。其の中に牛鍋の御馳走が出た。肉をつゝき合ひながら、若い訓導と一層盛んに議論を續けて居た。私たち二人は、はじめから一言も云はずにたゞ傾聽して居るのみだつた。二時間ほどたつてから辭去したことを記憶して居る。

翌朝手紙を校長に渡した。校長は、其の手紙を讀んできかせてくれた。昨今は非常に忙しいから、此の上多くの人々に國語の講義などをして居る餘裕がないといふことだつた。早い話が入門謝絕だつた。校長の紹介が效を奏しなかつたわけだ。校長は、ひどく氣の毒がつた。私は、非常に力を落した。其の時の失望落膽は隨分ひ

どかつた。當時其の男が若い教師から如何に敬慕せられて居たかが、それだけでもわかる。其の男の周圍に集まる者でなければ、郡內の青年教師の中に羽振がきかなかつた位だ。私は、頗る失望落膽したが、熊澤蕃山のやうに幾日か門前に座はつて居る程の根氣もなかつた。二三日たつと却つて持前の反抗心が擡頭して來た。「彼何者ぞ。自分だつていつまでも乳臭の少年では居ないぞ。」といふやうな激しい負け惜しみの心が起つた。よくよく私は師匠といふものには緣のない人間だつたと見える。

それだけの信用のあつた男が、僅か十二三年の間に落伍して、人から忌み嫌はれるやうな者に成り下つたといふことをきいた時、私が何とも云はれない哀感にうたれたのも無理はない。

其の後、また多くの歲月が流れ去つた。其の男の消息は、時々友人からきいた。いつもよくない話ばかりだつた。今讀んだ新聞にも同じやうな非難が出て居る。記者は特に窮迫先生といふ見出しをつけた。其の本名からもじつた嘲笑的な尊稱(?)だ。記者はかう云つて居る。

さう聞くと、何とやらそんな名の校長が××郡あたりに居たやうな氣がする。女教員と云々の事件があつて首になり、恩給も貰へず豐橋あたりにうろうろとして居り、「警察へ引つ張られた」と同地の新聞が報じた事もあつた。

然るに、此の窮迫先生は、英文・漢文・數學・地理・歷史何でも御座れ、特に書はよくかく。俳句も作れば、和歌・狂俳、趣味の廣い事と知識の多方面に亘ることは驚ろくばかり。しかも、目から鼻へぬける才智があるとの評判であるが、窮して通ぜず、時習舍と稱して中學生數名を預かつて生活の道を立てゝ居るが、貧的と來てはいゝ方へ智慧の廻はしやうもなく、まじめなものは相手にして吳れぬ有樣だとの事である。

「あの男も地所の周旋ね。それから書畫骨董の賣買なんかやつてゐるのだが、知友として一人たりとも目に逢つて居ないのはないのだから困るですよ。いつぞや怪烏和尚の處から句佛の「もたいなや祖師は紙表の九十年」の半折を持ち去り、周旋すると云つたのはウソ、品も返さねば金も呉れぬので、取りにやると「アレは疾に返したじやアありませんか」と、すましたもの。此の手で借りられるだけは借りて叩き賣つて食つて了ふものと見へる。しかし、考へて見れば氣の毒なものでね。あれだけの學問と才とがありながら、大手を振つて世が渡れぬなぞ、同情に堪へぬ事ですよ。」と、しみじみとして、これも目にあつたと云ふ一人のAが話したが、私は其の男を一と目見た時、曇つたいやな顏の男だと思つた。

同情のない書き方だ。新聞記者からは、大に好意をもたれる方の性質をもつた男だつたのに、それがどうしたものであらう。たゞ同情のない文字が並べて居るばかりでなく、「其の男を一と目見た時、曇つたいやな顏の男だと思つた。」と書いて居る。かつて青年教師が憧憬の的とした人氣者が、一見して惡感を催すやうな顏の男になつたとは、どうも私には思へない位だ。

人間は、どんな生活をするもよいが、自己を破滅させるやうなことをしてはならないと、私はいつも思つて居る。人間には長所も短所もある。如何なる時に如何なる失敗をするかもわからないが、失敗は必ずしも悲むべきことでない。失敗によつて自己を生かして行くことが肝要だ。（大正十四年十月十四日）

泉村君

あまり多くない友人がだんだんと亡くなつてゆくのは、非常に淋しい感じがする。

×

此の數年間に、私は、多くの友人を失つた。まだ働らきざかりの身で、ぽつくりと亡くなつてしまつた者が多い。さういふ人のことを考へると、生きて居る者の幸福が思はれる。生きて居たいといふことを深く感ずる。どうかすると、私は、人間の生活といふものを頼りなく思ふ。何のために生きて居るのかを疑ふ。此の先、何十年生きて居たところで、何も出來さうにない。生きて居るだけが無意味なやうに考へる。併し、死んでしまつた人々のことを考へると、何が出來なくとも、生きて居る者は幸福だといふ氣がする。何かしやうと思つて努力して行くだけでも幸福だと思ふ。

×

死んだ友人の多くは、みな何かしやう何かしやうと努力して居た者ばかりであつた。さうして、何もせずに死んでしまつた。全く何もしないわけではないが、死んでから思ひ出されるやうな痕跡は一つも殘して居ない。絶えず何かしやうとあせりながら、これといふ程の業績も殘さずに死んだ友人のことを思ふと、人生といふものの淋しさを感ずる。

×

泉村源清君の如きもさうした友人の一人であつた。私は、今でもよく泉村源清君のことを思ひ出す、泉村君は、深川の小學校教師であつた。私が上京してはじめて奉職した學校に教師をして居た。私は、其の時に初めて泉村君を知つた。年齢は、私よりも七八年ほど上であつた。私は、半年ばかりで、其の學校を退いてしまつたが、泉村君は、死ぬ少し前まで同じ學校に勤めて居た。

×

泉村君は、非常に親切な人であつた。さうして、さつぱりした氣分の男であつた。九州の方の人には、快活な氣分の者が多いやうに私は思ふ。泉村君も典型的な九州男子であつた。鹿兒島縣の出身だと聞いて居た。風采には、西洋人みたいなところがあつた。包みかくさず、何もかも話す人であつた。校長の非難も學校の不平

話も時々漏らした。さういふ點も、私には却つてよい感じを與へた。正直な人だといふ氣がした。半年ほど同じ小學校に居たといふだけで、外に何の緣故もなかつた泉村君は、遂に終世の友人であつた。私は、時々泉村君を訪問して、夜の更けるをもかまはずに話し込んだものであつた。私のやうに人を訪問することの嫌ひな者が、さうした親しい交はりのある友人は、澤山あらう筈がない。泉村君もよく私を訪問せられたが、私の訪問する度數の方が多かつた。

×

泉村君が親切な人だといふことを、私は、歸鄕した時に熟〻と感じた。私は、上京後二年ほどたつてから、病氣で一度歸鄕したことがあつた。勿論、其の時には、再び上京する機會があらうとは思つて居なかつた。

歸鄕してから、私は、しばらく遊んで居た。健康を恢復してから、隣村の小學校に代用教員として勤めることになつた。泉村君は、其の間にも度々見舞の手紙を送られた。小學校に勤めてからのこと、私は、ひどい皮膚病に冒されて非常に困つた。返信の端に其のことを書いて出すと、泉村君は、直に藥を私の許に送られた。泉村君の學校は、下層の生活をして居る者の子ばかりを收容した學校であつたから、皮膚病患者が非常に多く、いつも學校に種々の藥が調へてあるので、如何なる病氣には、如何なる藥がよく利くかといふことを、泉村君は、よく知つて居たのであつた。私は、泉村君の厚意に深く感激した。其の藥によつて、私の病氣は、間もな

く全治してしまつた。私は、今でも泉村君のことを思ひ出すと、わけわざ東京から藥を送つて呉れた親切に涙ぐまれる。

×

私は、やがて再び上京することになつた。再度の上京を泉村君は非常に喜んで呉れた。上京したら早速訪ねて來るやうにと、自分の宿所の略圖までもハガキに書いて來た。私は、上京して直に泉村君を訪問した。其の頃、泉村君は、本郷の動坂に住み、其處から深川の學校まで通つて居た。どの邊であつたか、はつきりと記憶しては居ないが、駒込病院の裏あたりのやうに思ふ。大きな門があつて、門の中に小さい貸家の澤山ある其の一ばん奥の家であつた。一軒の家が眞中でしきられて居て、兩方に入口があり、二軒になつて居た。泉村君の家と背中合はせになつて居る外の家には、若い畫家か何かの夫婦が住んで居た。

私が退京した頃は、泉村君もまだ獨身であつた。併し、此の時には、もう獨身ではなかつた。泉村君の話によると、もう數年前に結婚したのだが、奥さんは或る事情で田舍の小學校に女教員をして居たといふことであつた。私は、此の時にはじめて泉村君の奥さんといふ人に挨拶した。これがまた泉村君と同じやうな非常によい人であつた。長く女教員をして居た人とは思はれない親切な世話女房であつた。其の頃、私は、千駄木町の下宿屋に居た。讀書に倦いたり、無聊に苦しんだりする時、いつも泉村君を訪ねては、泉村君の呑氣さうな話

をきいた。それが私には何よりも大きな慰安であつた。泉村君の夫妻には、子どもがなかつた。泉村君も奥さんもそれを淋しがつて居た。子どもがなくて退屈だから、女教員の奉職口を探して出やうかといふが許さないと泉村君はよく話した。私は、よく泉村君の家で洗濯をして貰つたり、着物を縫つて貰つたりした。或る時、私は、田舍から訪ねて來た客に、淺蜊を一籠貰つた。下宿に居る私には、どうすることも出來なかつたので、泉村君の宅へ持つて行つた。同じやうなことは、外にも度々あつた。

×

泉村君は動坂の家にかなり長く住んで居たが、何かの都合で富士前町の電車通りへ移轉した。轉宅した先は、女髪結の二階であつた。どうしてもお勝手のやうなところを通らなければ二階へ上れないやうな非常にはいりにくい家であつた。どうしてあんな家へ轉居したのか私にはわからなかつた。

此の家へも私は三度程遊びに行つた。はじめて訪れた時には、泉村君の義弟とかいふ人が來て居た。巡査の試驗を受けるとか云ふ話であつた。間もなく合格して駒込署詰となつたといふこともきいた。三度目に訪れた時、泉村君はひとりで自炊をして居た。奥さんの母に當る人が腸チブスにかゝつて熊本の病院へ入院したので、其の介抱に行つたと云つて居た。一人では不便でしかたがないと云つて、ひどくこぼして居た。併し、いつもと少しも變はらぬ呑氣な顔をして居た。

×

母の看病に歸省した泉村君の奥さんは、遂に歸つて來なかつた。母の病氣は平癒したが、看病して居た奥さんは、母の病氣に感染して、其の病院で死亡した。泉村君は、力を落して居た。私も、氣の毒に思つた。人間の生命のはかないことをしみじみと感じた。

獨りになつてからも、泉村君は、しばらく富士前町の家に居た。

×

泉村君は、其の後、人にすゝめられて後妻を娶つた。後妻となつた人は、ながく看護婦をして居た人のやうにきいた。泉村君は、大塚の方へ轉居した。それは、辻町の停留場から右の方へはいつたところであつた。土地の低い健康上よくないと思はれる家であつた。併し、家賃が安いと云つて、泉村君は喜んで居た。私は、其の家にたゞ一度ぎり泉村君を訪問した。後妻となつた人にも其の時に紹介されたぎりであつた。

×

泉村君が一ケ月ばかり病氣で學校を休んで居るといふ話を外からきいた。見舞に行かねばならぬと思つて居

ると、泉村君からハガキが來た。東京に居ては、到底急に全快する見込がないから、一たん鄉里に歸るとしてあつた。お別れに上るのであつたが、急ぐから失禮するとかいてあつた。其のハガキは、何處かの停車場から發信したもののやうに思はれた。

泉村君からは、しばらく便りがなかつた。私は、泉村君の鄉里を知らなかつたので、深川の小學校へきゝに行つた。ながい見舞の手紙を書いた。それをポストに投じた翌日、泉村君から手紙が來た。行き違ひになつたのであつた。追々身體もよくなつたから、二三ケ月たつたら、また東京でお目にかゝれるだらうとあつた。

泉村君の手紙を讀んで、私は、數年前のことを思ひ出した。病氣のために歸鄉した時、私は泉村君から再三見舞の手紙を貰つた。泉村君の手紙によつて私は遙かに東京の空を偲んだ。さうして、もう一度上京したいと思つた。併し、もはや到底上京する機會が來さうにもなかつた。私は、毎日、一里半もある隣村の小學校へ通勤しながら、在京の頃の生活を顧りみ、はかない將來の希望を胸に描いて居た。然るに、偶然にも、私は、また東京へ出ることが出來た。いく年かの月日が過ぎ去る中に、虛弱な私の身體は、追々强壯となり、健康を誇つて居た泉村君は、病氣に罹つて歸鄉しなければならなくなつた。かつて泉村君から慰められた私が、泉村君を慰めなければならぬことになつた。人の世はかうしたものかと思つて、私は、深い哀愁を感じた。田舍へ歸つた泉村君を思ひ出す度毎に、私の腦裡へ浮んで來たのは、かつて私が歸國して居た頃、わざわざ藥を送つてくれた其の友情であつた。

×

其の中に東京でお目にかゝると云つた泉村君は、再び東京へ戻つて來なかつた。泉村君が鄕里で死亡したといふ話をきいたのは、それから三箇月ばかり後のことであつたやうに思ふ。勿論、死亡の通知もなかつたので、私は、死亡してから一箇月もたつて、漸く泉村君の死亡を知つたのであつた。

×

泉村君は、教育科の文檢を受けると云つて勉强した。三四回ほど受驗したやうであつたが、いつも失敗してしまつた。今度はきつと合格して見せると云つて、試驗のある度毎に出願したが、豫備試驗の合格者の中にもはいらなかつた。不合格になつても、決して失望したやうなところは見えなかつた。何回失敗しても、根氣よくまた受驗した。何れ其の中には、合格するものと信じて居た。泉村君は、尋常科の正教員であつたから、校長は、青山師範學校の夜學へ通つて、本科正教員の資格を得るやうにとすゝめた。併し、泉村君は、どうしてそれもをきかなかつた。同じやうな外の友人がみな青山師範學校へ入學しても、ひとり列を離れて文檢準備の書物を讀んで居た。

泉村君は、文檢に合格せずして死んでしまつた。文檢に　格しても合格しなくとも、さほどの問題ではないであらうが、泉村君だけは、生前に合格させたかつた。

×

私は、泉村君と稻毛の海岸へ遊びに行つたことがあつた。夏の頃であつた。海氣館へ着いて、松の林の間にある離れの室で、涼しい海の風を浴びながら半日を過した。私は、泉村君と非常に親しくして居た。併し、趣味といふやうな方面は、全く違つて居た。從つて、泉村君と一しよになつても話すことは殆んどなかつた。たゞ學校の不平話をきくか、文檢の話をする位のものであつた。泉村君は、私よりもかなり年上であつたが、學問や書物の話になると、私を極度に尊敬するやうな態度をとつた。私にはそれが却つて慚愧の念を起さしめた。

話がなくなると、私たちは、海の方へ下りて行つた。海は引き潮であつた。干潟が遠く續いて居た。其の日は、日曜であつたから、潮干狩の男女が濱邊に澤山群れて居た。海氣館の室もみな滿員であつた。もう少しおそく着けば、涼しい室を占めることは出來なかつた。私たちは、しばらく干潟の上で淺蜊や蛤を拾つた。疲れた身體をもとの室に横へた時の心地は忘られなかつた。女中が風呂を知らせて來た。一しよに浴室の中にはいつた。海水浴場や溫泉場によくあるやうに、此の家の浴室は男女混浴であつた。十六七歲になる少女が、其の母らしい老婦人とはいつて居た。其の人たちは間もなく出てしまつた。泉村君は、あとを見送りながら、「青春の誇を徹底的に見せびらかして居る。あゝいふ少女を見ると、何だかかなしくなるね。」とおどけたやうな調子

で云つた。泉村君の話には、いつもおどけたやうな滑稽味を帶んで居た。非常に眞摯なことでも、泉村君からきくとひどく滑稽に思はれることが多かつた。

×

泉村君の生涯は、全く平凡の一語で書きて居る。無名の小學校教師の中でも、特に平凡な道を歩いた一人である。併し、かういふ平凡な道を歩いて一生を終る人は、泉村君のみでない。否、世の中の多くがみな同じ道を歩いて居ると云つてもよからう。泉村君も必ず多くの青年にあるやうな志を抱いて上京したのに相違ない。然るに、十數年の間、場末の小學校で日を暮したといふのみで、其の生涯を終つた。文檢の合格といふ小さい希望さへもなし遂げることが出來ない中に死んだ。泉村君の奉職して小學校でも、既に多くの人々から忘却せられて居る。

×

泉村君が死んでから、何年かの歳月を經た。私は、今でも時々此の平凡な道を歩いて病死した友人のことを思ひ出す。さうして、良友を失つた世の中の淋しさを感ずる。こゝに思ひ出の一端を書くのは、故人に對するせめてもの追善供養である。（昭和二年のはじめに）

新秋雜想

九月一日

九月一日、思ひ出の深い日である。生きて居る限り、此の日を忘れることは出來ない。

關東の大震火災も、既に三年の昔となつた。悲慘な事實を追想し、殉難者の瞑福を祈るにつけても、最近の世相に就いて反省せざるを得ない。

突如として震火の襲擊を受け、生死の境をさまよつた時、人間は一切の熾烈な欲望から脫して、善根に立ち返へつた感があつた。或る者は天譴と稱して、災害前に於ける民心の頽廢を誡めた。

大震火災の刺戟は、人間の醜惡な性情を根本から改め得なかつた。一度び私心を棄てゝ善根に立ち返へつた者も、久しからずしてまたもとの狀態に逆戻りした。大火の餘燼が沈靜するに從つて、淺間しい人間の我利我慾は、再び擡頭して來た。醜い紛爭は到る處に起つた。市民のために永久の幸福をはかるべき施設にさへも抗議が百出する。復興局の疑獄に至つては、唯々驚き呆れるのみである。

民心の頽廢も災害前に變はりはない。奢侈と淫靡と暴虐とに於ては、寧ろ災害前に優れるかの感がある。大震火災の教訓は全然畫餅に歸してしまつて居る。不幸な横死者の魂も浮ばれないことであらう。記念事業よりも供養よりも、震火災の教訓をながく各自の心に銘記することが必要である。都市の復興と共に精神の復興を等閑に附してはならない。

關東の大震火災が天譴であるならば、今日の世相は、更に一層殘酷な天譴を受けてよいやうな狀態にある。三週年の記念日に當つて、萬感の胸に湧き來るものがある。（大正十五年九月一日記）

勝地の保存

千本松原の保存といふことが沼津市民の問題となつて居た。縣當局の意見に反對し、沼津の市有地として保存したいといふ市民の主張には、十分の理由がある。千本松原は沼津市の公園である。市民の云へるが如く、千本松原あるがための沼津市である。沼津市民がこれを愛惜するのは當然だ。分讓地として少數の富豪に私有せしめるなどは斷じてよくない。單に沼津市のみならず、日本の勝地を失ふといふ點から見ても惜しむべきことだ。一市民の問題ではなくて國家の問題だ。

勝地の荒廢を歎ずる聲を聞くこと久しい。勝地の俗化は到る處に於てこれを見て居る。最も心外に堪えないのは、勝地を少數の者が獨占して、我もの顔に別莊などを建てゝ居ることだ。其の甚だしい一例として自分は

蒲郡海岸を思ひ出す。蒲郡は海岸の風景を以て聞えた東海の勝地であつた。大和田氏の「鐵道唱歌」にも「海の眺めは蒲郡」とうたはれて居る。二十年前の小江の松原は、此の詞を裏切らぬ白砂青松の仙境であつた。然るに今日は旅館と別莊とが立ち列んで、海の眺めは殆どなくなつた。海水浴の場所さへもない。僅かに數坪の空地が二三ケ所に殘つて居るだけである。勝地保存といふことに全然無頓着な町民は、かつて東海の勝地とうたはれた絶景を台なしにしてしまつた。

必ずしも蒲郡海岸のみではあるまい。同じ例は全國各地に多からう。勝地の保存に冷淡な住民の無思慮もさることながら、ひとり絶景の土地を私有し、廣大なる別莊を建てゝ晏如たる富豪と稱する者の不德をも思はざるを得ない。從來の社會では、富の横暴といふことが許されて居た。富者は蓄積した財力を以て横暴を極めることを特權の如く思ひ、貧者は富者の横暴を正當と見做し、却つて富者の境遇を羨むやうな有樣であつた。今後の社會に於て、かくの如き思想が次第に人類の腦裡から消えてゆくことは明かである。世の富豪と稱する人々は、自ら相誡めて富の特權を濫用してはならない。若し從來の態度を一變しなかつたならば、富豪といふものは必ず世の中の怨府となるであらう。民衆の公共的遊園地ともいふべき名勝の地に、堂々と別莊を設け、自ら其の絶景を壟斷するが如き、甚だ心なき業と云はなければならぬ。今日既に勝地を獨占し、一般の思想を自然に惡化しつゝある世の貴族富豪と稱する人々は、社會の反感を高めない中に三省しなければなるまい。

（九月三日）

太皷の遠音

西荻窪から歸る時、闇夜の遠空に太皷の音が聞えた。祭の太皷であつた。秋が近くなつたことを痛切に感じた。其の邊はまだ全く田舍である。中野邊のやうにせゝこましく家が建つて居ない。廣い畑や薄暗い森が續いて居る。分讓地も漸く飛び飛びに少しばかり住宅が出來た位のことである。空地になつて居るところには、草が一面に生ひ茂つて居る。昔の武藏野の面影がある。叢の中では虫が鳴いて居た。

武藏野の草原の中できいた太皷の遠音は、幼時を追憶せしめた。秋になるとよく太皷の遠音が聞えた。時とすると小さい山のあなたからも聞えて來た。風が冷たくなつて、稻の葉が少し黃ばみはじめると、近所の村に祭禮が續いた。祭禮にはいろいろな餘興があつた。太皷をうち笛を吹き唄をうたつて、靑竹で組み立てた櫓を境內へかつき込むのが例であつた。原始的なお神輿である。祭禮の日が近くなると、どこの村でも靑年が集まつて、太皷や笛の稽古をした。それが靑年にとつて大きな娛樂の一つになつて居た。鎭守の社の神殿でうつ太皷の音や笛の音が、野を越え山を越えて遠くひゞいて行く月の夜のしづけさを、今でもなつかしく思ひ浮べることが出來る。

祭禮の太皷の音も長く聞かない。武藏野の草原の中でこれを聞く。夢のやうな追想が腦裡を往來した。田舍の秋はいゝと思つた。（九月四日）

社會への暗示

千葉縣では殺人罪を犯した男が山の中へ逃げ込んだ。それを警官や靑年團員や消防隊の者などが大勢で取り圍んで居る。無慮五千人と號しつゝある。既に十數日を經過するのに、今もつて犯人はつかまらない。加之、變幻自在、巧みに警戒網を破つては、村近く現はれたことも再三ある。

かくの如き事實は、一般の社會に何を暗示して居るであらうか。警察の無力、これは先づ何人も感ずる所である。一人の犯罪人を逮捕するに、靑年團や消防隊の力を借りなければならぬやうな警察では、萬一の場合に何の頼りにもならぬことを國民はみな思ふであらう。また他の方面に於ては、如何なる大罪を犯すも巧妙に跡を晦ませば、容易に捕へられるものでないことを、社會の人々に暗示するであらう。

此の事實が社會に暗示する所は極めて大きい。從つて、こゝにかくの如き態度が果して重罪人を取扱ふ最善の方法であらうかどうかを考へて見なければならぬ。勿論、殺人の大罪を犯した者を庇護することは出來ない。涙の日を送る被害者の遺族に對しても、早く罪人を逮捕することは必要である。併し、彼も亦人の子だ。人の子なれば、必ず自己の犯した罪を意識して居るであらう。如何に逃げかくれても、所詮は免れぬ運命を思はずには居られないであらう。輕卒な無暴な行動が己れの身を破壞してしまつたことを悟る日もあらう。考へて見ると、かゝる大罪人にも同情の餘地がある。罪を憎んで人を憎まずだ。人間か野獸か見分けのつかぬ姿になつ

て、既に十幾日間山野に起臥して居る彼の行動を新聞で讀む毎に、人間薄命の歎聲を發せずには居られない。

多くの人間の中には、先天的に狂暴な性質をもつた者もある。尋常茶飯事の如くに惡事をなす常習犯人もある。併し、それは極めて稀な例だ。生れながらの惡人といふものは少ない。罪人の多數は何れも偶然の動機によつて惡魔に魅られた者だ。特に善良な性質の人間が、大罪人となつた例もある。罪は其の人がもつて生れたものでない。惡のために引きづられる性の弱さが罪を犯さしめたのだ。

千葉の殺人犯人が如何なる人間であるか知らない。が、新聞に出て居るところから推察すれば、もとからの惡人でもなささうだ。無學ではあるが、恩義を強く感ずる義俠心をもつた男のやうに書いてある。仲間の中でも相當に尊敬されて居たといふ。犯罪後、一部の青年團員が同情して彼をかくまつたといふ話も、全くの虛報ではないやうだ。さうして見れば、先天的の惡人とも思はれない。兇器を提げて大道を歩き、妄りに行人を傷づける狂人とは違ふ。河かの動機が彼に大罪を犯さしめたのであらう。青年團や消防隊が總出で一人の犯罪人を追ひまはすが如きは、如何なる點から見ても得策と思はれない。（九月五日）

新聞觀

新聞といふものが如何に重要な任務をもつて居るかといふことは、震災の時にこれを痛感した。震火にかゝつて新聞社が全燒したために、數日間新聞が出なかつた時、帝都の人心は如何に混亂の極に達したであらうか。新聞が完全に事實を報道したら、人心の混亂を今少しは緩和することが出來たであらう。

文明の世の中に新聞のないのは、暗夜にともし灯のないのと同じだ。多くの人間は行く先を見定めることが出來ない。新聞は社會を導く羅針盤である。新聞の指導によつて社會ははじめて正しい方向に進んで行く。併し、此の新聞が社會を毒し民心を害して居ることも少なくない。新聞の記事から、多くの人々は少なからぬ惡影響を受けて居る。其の惡影響の一つは、虛榮心の增長である。新聞に名が出る、それは善かれ惡しかれ虛榮心を滿足せしめるに足ることだ。新聞に名を揭げて貰ひたさの自己宣傳は、各社會を通じて甚だ多い。新聞はまた往々惡事を奬勵する。勿論、新聞の記者や發行者は、惡事を奬勵しない。併し、惡事をなせる者の記事が、堂々と紙上に現はれた爲めに、讀者は思はぬ暗示を受ける。人は一代、名は末代だ。孜々として着實に働らいても、到底生涯頭の上りやうはない。惡名を千載に殘すとも、思ふがまゝに放縱な生活をした方がよいといふやうな思想は、ともすれば人々の頭腦の中に生じやすい。樣々な惡事を働らきながら、莫大な富を蓄積して、一代の驕奢を恣にし、老後に於て常に新聞等より尊敬せられる人を見ては、過激な思想も誘發せられる。多くの新聞が其の態度を一變して、成金の一言一行などを物珍らしささうに揭載しなかつたならば、今日の民衆が富に對する考も大分違つて來ることと思ふ。新聞の長所と短所とを吾人はいつも明瞭に眺めて居る。（九月六日）

神經衰弱

神經衰弱に罹つて居る者は甚だ多い。予はもと神經の强健を誇つて居た者である。然るに、三四年此のかた、夏になる毎に、全く元氣を失つて、何事も手につかず、甚だしい時には一葉の葉書さへ書けない。これが神經衰弱の一種であることを漸く悟つた。予の神經衰弱は、腸の病氣に原因がある。夏になると必ず腸が弱くなる。消化が不良になる。全身の機能が遲鈍になる。神經系統に障害を來すといふ順序である。秋になれば、不思議に平癒してしまふ。此の分ではまださほどひどい方にはいらない。

神經衰弱には、かなりひどいのがあるさうだ。年中、全く何も出來ない人間もあるときいた。高等教育を受けるやうになつてから、神經衰弱に冒され、中途で退學して、廢人同樣の生活をして居る者もある。神經衰弱には種々樣々の徵候が現はれる。たゞ仕事が出來なくなる位のものは極めて平凡だ。妄りに物を汚ながる者もある。一日に數回手を洗つても、尙ほ不滿足に思ふ。殊に金錢を汚ながる者もある。金錢を受け取る毎に不潔な感じがしてならないさうである。實際金錢は不潔なものに相違ない。萬人の手から手へ渡つて行くものである。一々消毒しなければ受取れないわけだ。これを何とも思はずに居る方が神經鈍麻かも知れない。神經衰弱の中にはまた外出を厭ふ者がある。他人が自分を見ては笑ふと云つてひどく氣にかける。何も通行人の行動を一々注意して居るやうな閑人はない。氣にかけないでもよいことを氣にかける。神經が異常を呈して居る證據だ。或る青年は、自分の身體から惡臭を發するので、逢ふ人がこれをいやがるといふ妙な妄想に囚はれた。さうでないことを如何に力說しても駄目だ。話をして居る中に、他の者がハンカチで顏を拭ふとか、咳拂ひをすると

閑言敢語

が、一寸したことがあつても、直に氣にかける。なるべく他人に逢はないやうにと、一室にとぢこもつて居る。これ等は神經衰弱の中でも少し類の變はつたものである。

神經衰弱のために、却つて仕事の出來る者もある。文士の中にも、さういふことを明言して居た者があつた。だが、困つた病氣の一つだ。堂々たる五尺の軀軀をもちながら、何も出來ずに遊びくらして居るといふのも退屈な話だ。廢物は利用の道があつても、廢人の使ひやうはない。

文明が進んで世の中が忙しくなると、神經衰弱者が多くなるやうだ。今日の世相を見ると、社會全體が神經衰弱にかゝつて居るかのやうに見える。個人の神經衰弱も困るが、社會の神經衰弱は尙ほ一層困つたものである。(九月七日)

初秋の中野

秋が近づいた。

芝生の草はやゝ黃ばみかゝつた。

空は高く靑ずんで居る。朝夕の風も少し涼しくなつた。

祭禮が近づいた。今日も太鼓の音がして居る。

初めて移轉した年は、此の邊もまだ田舍であつた。田畑もあり、空地もあつた。然るに、一年毎に住宅は增

加して行つた。殊に震災後は急に家が多くなつた。三年後の今日では、全く前と樣子が變はつた。今の中野には、郊外の氣分が薄くなつて、都市の延長を思はせる雜沓のみが目につくやうになつた。一年毎に膨脹してゆく都市の姿を中野の郊外に移つてから殊更に深く感じた。

都會の雜沓によつて、日に日に靜かな田園の空氣を濁された中野も、秋の訪れを知る時だけは、郊外の氣分を味はふことが出來る。枯れて散る木の葉や、靑空に浮ぶ白雲や、芝生の中に啼く虫の音によつて、秋の色を眺め、秋の聲を聽く時は、まだ郊外の靜けさを感ずる。かうした郊外の氣分も、あまり長くは續くまい。私は今さう思ひながら庭を眺めて居る。(九月八日)

天災地變

天災地變は不可抗力である。豫知することも豫防することも出來ないとは云へ、豐橋市外の津田小學校兒童の慘死は悼ましいことであつた。朝、元氣よく出て行つた幼童が、夕方、無殘な死屍となつて歸つて來た時の兩親の嘆きは、想像しても涙の種だ。

津田の小學校は、舊友が校長をして居るので、新聞の記事も特に强く神經を刺戟した。校長の鈴木市太郎君とは、同じ學校に職を奉じて居たことがあつた。溫厚篤實、稀に見る好人物だ。多年勤續してから、かうした不遇に逢ふとは、運命の支配者の殘酷過ぎる惡戲だ。

天災地變といふものが、人間の住む世界には、あまり多過ぎる。大正十二年の大震火災は、類例の少ないものであつたらうが、其の他に多くの人間が傷ついた災害の數は、此の二三ケ年中に數へ切れない程あつた。今後に於ても尙ほ絕えないことであらう。

天災地變を豫め知り、且つこれを防ぐ方法はないのであらうか。天災地變は不可抗力である。併し、人間の注意によつてこれを避けること、必ずしも不可能ではあるまい。人間は、天災地變に對する對策を輕視し過ぎて居る。天災地變の襲來せる時、如何にしてこれを避けるか、かうした事柄は、常に考へて置き、突嗟の場合に周章狼狽せず、最善の道に就くやうにありたい。人事を盡して天命を待つといふことは、種々の意味に於て味はふべき言だ。(九月九日)

學問と情實

情實は人間の生活に附隨したものだ。人間の生活して居る世界に情實のないところは先づない。

學問や藝術の世界だけは、情實を離れた別天地にして置きたい。情實が學問や藝術を左右して居るやうでは、學問の進步も藝術の發達も甚だ覺束ない。眞理は眞理、名作は名作、誰が發見しても、誰が創造しても、世間から同じやうな評價を受けねばならぬ。世間は公平無私な褒貶の言葉を與へなければならぬ。

然るに、今日の世の中は如何。學問や藝術の世界を如何に情實が支配して居ることであらう。吾人は、これ

までに幾度か其の適切な實例を見た。或る獨學者は、學歴がなかつた爲めに、國内で研究の結果を發表することさへも出來なかつた。或る學者は、先輩に迎合しなかつた爲めに、永い間學界から繼子扱ひを受けて居た。藝術界に於ても同じことだ。展覽會の審査等に絡む醜聞が、よく其の間の事情を物語つて居る。比較的自由な天地と思はれる文壇でも、かなりひどい同黨異伐の風が見える。

人間の生活と情實とは離れ難いものだ。が、せめて學問や藝術の世界だけは別天地にして置きたい。學や藝術の世界までも情實が暴威を振つて居つて居ることは悲しむべきことだ。(九月十日)

孤立無援

孤立無援、これは處世上最も骨の折れるワリの惡いことだ。獨學者は、此の骨の折れるワリの惡い道を歩いて居る。

學校出身者は幸福だ。學校といふ背景が陰に陽に後援してくれる。研究するにも都合がよい。就職するにも便宜がある。普通の能力を備へたものなら、さほどの努力をもせずに、相當の業績を擧げ、相當の地位に就くことが出來る。秀才に至つては、其の能力を十分に伸ばして最大限度の活動をなし得る。

獨學者には背景がない。學習の行程に勞の多いことは、到底學校出身者の比でない。獨學者は、恰かも間道を歩いて居るやうなものだ。粒々辛苦、荆棘の道を拓いて進んだ結果は、正道を濶歩した者に及ばない。凡庸

の徒は、常に世間から嘲笑せられ、非凡な輩は、絶えず衆人の嫉視を受ける。何れにしても損な境界である。

今日の世の中には、學閥の背景なく、立身出世して、社會に偉大な勢力をもつて居る者がある。併し、それは極めて少數の例だ。さうして、其の少數の人々は、何萬人か何十萬人の中の一人か、さもなければ、まだ學校の組織が完備して居なかつた昔から生きて居る者だ。

學校を卒業して居ないために、學閥の背景がなく、孤立無援の道を歩み、伸びる才能を十分伸ばさずに萎縮させてしまふ者は甚だ多い。たゞ其の個人にとつて氣の毒なことであるばかりでなく、社會のためにも大きな損失だ。(九月十一日)

世渡り上手

世渡り上手といふものが世の中には慥かにある。上手に世渡りをしてゆくといふのは、世の中の弱點をよく心得、巧みにそれを惡用してゆくことだ。世渡り上手といふのは、感心の出來ないものだ。

世の中の弱點の一つは、健忘性といふことだ。世の中ほど健忘性なものは少ない。世の中は多くの人が集まつて成立して居る。その人々は絶えず交替して居る。一人が死ぬ。他の一人が生れる、一人々々と交替してゆく中に、五年・十年進んで百年・千年とたてば、いつの間にか世の中は一變して居る。かくの如く轉々と移りゆくのが世の中の常である。かうした性質の世の中に健妄性が附隨するのも當然のことであらう。此の健妄性を

利用するのが、世渡り上手の第一秘訣だ。世の中から烈しく非難攻撃されるやうなことがあつても、それは當座の間だけだ。少したてば忘れてしまふ。人の噂も七十五日とある通りだ。いつまでも記憶して居るのは、其の關係者だけに過ぎない。かなり惡辣なことをして暴富を得た者でも、二三十年たてば、更に咎めないのみならず、却つてこれを成功者として讃美する傾向がある。此の呼吸をよく呑み込んで、耻だの外聞だのといふことはかまはず、猪突猛進するのは、世の中を上手に渡る秘訣の一つだ。

世の中の弱點のもう一つは、力といふものの崇拜だ。力のある者には、楯をつく人がない。強い者には卷かれよといふやうな諺がある。力に反抗しやうとする者も世の中にはある。併し、それは極めて稀な例だ。一般の世間は、概して力の盲從者である。從つて、力のある者は、横暴な振舞をする。力を恃んで横車を押し通さうとする。力を惡用して、よくない事をして居る者が、世間には非常に多い。多くの人々は、其の行のよくないことを知りながら、其の力を恐れて敬遠する。中には迎合して自分の利得をはからうとするやうな不心得者もある。善でも惡でもかまはない。横車を押し通せるだけの力を蓄へることが、世の中を樂々と渡る一つの道だ。それだけの力のない者は、力のあるところに粘着してゆくことが、悧巧な世渡りの方法だ。虎の威を借る狐の知慧を學ぶわけである。

世の中の弱點を惡用し、上手に世渡りをして居る者が非常に多い。併し、さうして上手に世渡りをすることは、正しい道を歩かうとする者に出來ない藝當である（九月十二日）

秋郊ところどころ

丸子多摩川

多摩川の秋はよい。いつもさう思ふ。東京の近郊でも愛好して居る自然の一つだ。

丸子多摩川の秋もよかつた。目黒蒲田電車の沿線もよく開けたものだ。前に碑衾村といふ所の小學校へ友人と一しよに行つたことがあつた。其の頃はまだ淋しい農村だつた。暗いやうな竹藪が所々にあつた。日が暮れてから澁谷まで歩いて來た。數年の間にかうも開けやうとは思はなかつた。今ではどこに其の學校があるか探しても容易にわかるまい。

夏の頃だつた。目黒で電車を乘り替へた。目黒蒲田行の電車に乘つたつもりで居た。やがて見馴れない停留所をいくつか通つたので、車掌にきくと、それは目黒から神奈川へ行く東京横濱電車だつた。蒲田へ行くには、あとへ戻つて丸子多摩川で乘り替へるのだといつた。東京横濱電車の開通を知らなかつた。近郊に於ける交通機關の發達、それに伴ふ土地の發展、東京に住んで居る者でも、其の迅速なことに時々驚かされる。

丸子多摩川も便利になつたものだ。友人の勤めて居る會社の社長が、丸子の附近で、十數町歩の土地を買ひ、農民から小作を拒絶されて困りはてゝ居るときいたのは、六七年前のことだ。電車の窓から見れば、どこまで

行つても田園都市の白い木標が立つて居る。

丸子多摩川には電鐵會社經營の遊園が出來た。人家もなかつた多摩川べりの寒村が、都會の男女の行樂地となり、立派な浴場が立つたり、カフエーが出來たりするのも、時世時節だ。

遊園地はどこも同じやうに俗惡だが、便利なことも多い。日曜の一日を子どもと遊ぶ人たちには、かういふ設備も必要だ。

丸子多摩川の遊園地には、夢のお城といふ昔々のお話式の大きな建物が立つて居る。運動室・休憩室・浴室・食堂等、いろいろなものが中にある。浴室は最も立派なものだ。

夕方、入浴した後、向ひの山に上つて、松の茶屋から河原へ下つた。夏の頃、非常に騷がしかつた川には人かげもなく、かつと明るく照りかゞやいた夕日を浴びて、堤の叢で虫がわびしく啼いて居た。

丸子多摩川の秋もよいと思つた。

城西學園

城西學園といふ中學校が長崎村にある。校長は野口さんだ。五六十人の生徒が、青い木立の中にかくれた舊い校舍の中で學んで居る。如何にも悠然としたものだ。教室の窓から漏れて來る速算のよび聲が、山寺のお經のやうに、ひつそりとした庭へひゞく。手入れの行き屆いた庶樹の蔭には、青い苔が滑らかに蒸し、日向には鷄

が轉寢をして居る。

「一時間授業があるから、一寸失禮する。」

野口さんは、立ち上つて書棚の中からリーダーを取り出した。矢はり野口さんは教育家だなといふ氣がした。かういふ背景に其の人物が一番よく調和して居るやうだ。野口さんがよく青年を相手に親切な話をして居られるのを見る毎に、かういふ人に子弟を預けて置けば、決して間違ひはあるまいといふやうな心安さを感ずる。それは私がいく度も人に話したことだ。

城西學園は維持が非常に苦しいさうだ。また組織が變はつてから日が淺い。認可のないために生徒が少ないといふことが、其の理由だとの事だ。さうすれば、此の苦境は近い中に脱し得られるだらう。認可になつて居ないからどうのかうのといふやうでは困つたことだ。が、それは社會の組織が悪いのだからしかたがない。理想論を唱へる者でも、いざとなれば、認可のない中學校へ子弟を入れることには躊躇するだらう。維持が樂になれば、此の學校はきつとよくなる。校長の野口さんが教育家として適當な人だからだ。私は野口さんの新教育がどういふものか十分に理解して居ないが、如何なる教育思想をもつて居ても、教育の事業は或る程度まで人によつて成績が上る。たゞ希望するのは、よい教員を多く集めて貰ひたいことだ。野口さんのやうに色々な方面に關係があつて、種々雜多の人物が身邊に蝟集する人は、よく其の人を見て教員を採用することが必要であらう。表面はよい人物のやうに見える喰はせ者も澤山ある。人はだんたんと年とるに從つて、若い者がみな子や

孫のやうに見え、缺點を知りながらも親心を出しやすい。が、學校は不良の徒に職を與へる慈善事業と違ふ。不適當な人間がはいつたら學校は災難だ。中心になる者が、いくら立派な人物でも、どのやうな理想をもつて居ても、結局は駄目なことだ。よい教師が集まつて、內實のよい學校になるやうにしたいものだ。

授業がはじまつたので、運動場を一とめぐりした。敷地は二千四百坪あるとかきいたが、校舍の坪數と生徒數からいふと非常に廣い。舊い校舍と新築校舍を併せて三棟の外に、寄宿舍や教員の住宅が敷地の中にあつた。校舍の裏が運動場だ。北下りの傾斜になつて居る。一面に草で埋れて居た。

しばらく青い生垣をめぐらした運動場を歩いた。秋の日が照りつけて居た。目にしみるやうな明るい日だ。裏門を出ると前は田圃だ。田圃を隔てゝ向ふに農家が見える。池袋から長崎村の方は、近ごろ家が立ち並んでしまつたが、此の高臺を境に北の方はまだ昔のまゝだ。

學校の敷地として申分のない土地だ。學校といふものは、かうした靜かなところがよいといつも思ふ。埃が多くて狹いところに、澤山の生徒が押込められて居るのを見ると、恐ろしいやうに感ずる。此の學校も今に認可されて多くの入學者があるやうになれば、段々と騷がしい學校になつてしまふだらう。どうも兩方よいことはないものだ——などと考へながら、もとの教員室へ歸つて來た。

鈴が鳴つて、一時間の授業がすんだ。轉寢をして居た鷄は驚いて、教員住宅の裏へ驅けて行つた。

長崎村

長崎村にも愈〻近く町制が敷かれるさうだ。

長崎村は同じ東京の近郊でも、中野や吉祥寺とは大分違ふ。自然色とでも云つてよいものだらうか、自然の中から感ずる氣分が違ふ。其の氣分によつて、東京の郊外を、私はいつも四つに分けて考へる。其の一つは、隅田川の流域だ。もう一つは多摩川の沿岸だ。他の二つは隅田川と多摩川との間に挾まる西部の中野・吉祥寺方面と、北部の長崎・練馬・石神井一帶だ。隅田川の流域と多摩川の沿岸とは、著るしい對照をなして居る。隅田川の流域で感ずるのは泥のにほひだ。しめつた水鄉の空氣だ。多摩川の沿岸は全くこれと違ふ。泥のにほひはしない。石と砂のにほひがする。しめつた水鄉の空氣はない。明るい高原の空氣が漂つて居る。中間の區域中、長崎・練馬・石神井は前者に近く、中野・吉祥寺は後者に近いやうだ。東郊の水鄉は、上野の森から王子の方へ走つた高台を境として、こゝに盡きて居る。道灌山を下つて日暮里から三河島の方へ出るか、王子電車に添つて飛鳥山から尾久のあたりを一めぐりすれば極めて明瞭だ。長崎村まで行けば、土地は全體に著るしく高原性を帶んで來て居る。併し、まだ其の田圃にはどこかに少し暗いところがある。落合から中野邊まで來ると、もうさうした暗いところはない。長崎村は高原と水鄉とが混和したやうなさびしみを持つた土地だつた。隅田川の流域のやうな水鄉のさびしみはなかつたが、それに近いものがどこかに潛んで居た。さういふ點で、長崎村には、

早くから興味をもつて居た。

かつて長崎村に住まうとしたことがあつた。本郷に居た時だつた。住宅難のために最も惱んだ私は、郊外に移轉しやうと思つた。私は、長崎村を度々歩いた。種々の事情で長崎村への轉宅は中途で見合せになつたが、さうしたことから、私は長崎村のことをよく知つて居る。

長崎村も其の頃と今とはまるで變はつてしまつた。其の頃はまだ立教大學の前を眞直に地藏堂の方へ出る道があつたばかりだつた。道路が非常に不完全で、冬の霜解時などには、到底歩かれなかつた。今ではよい道路が堅に横に幾筋も出來た。道路に添つて家が續々とたつた。僅かの間に賑やかな所になつてしまつた。

數日前のことだつた。前から知つて居る植木屋を訪ねて見た。もとはさびれた田舍の孤つ家だつたが、少し見ない中に、池袋の方から伸びて來た町が門前まで續いた。近所へカフェーなどが出來て居たのに驚いた。家の中には洋服を着た村の青年が二三人何かの相談をして居た。長崎村の人口の增加がはげしいといふ話が出た。昨年小學校の校舍の增築をしたのに、今年はもう二部教授だ。新に移住して來る者は、村税も何も出さずに居て、子どもだけは學校へ入れる。これではもとから住んで居る者がやりきれない——と土地の先住者にふさはしい不平を云つて居た。七十四歳になる老父が、六月病死したこともはじめて聞いた。此の間生れたやうに思つて居た赤ん坊が、いつの間にか歩いて居る。時勢が次から次へと移つてゆくやうに、老人は死んで若い者が變はり、人生も絶えず新陳代謝して居るのだ。長崎村の變はりやうが樣々の事を私に思はせた。

西新井大師

淺草驛と粕壁の間を電車が往復するやうになつた。

或る日の午後、飄然と淺草驛へ出て來た。粕壁行の電車に乘つて見たいと思つたからだ。西新井までの切符を買つた。電車に乘つて見ればそれでよいのだ。どこまで行かなければならぬといふ目的もなかつた。どこまで行きたいといふ希望もなかつた。

電車に乘つた。時間が來たから發車した。細かい家の亂雜に並んだ汚ない町裏を電車は走つて行つた。曳船だの、玉の井だの、鐘が淵だの、名前だけが風流な幾つかの停留所を過ぎ去つて千住へ着いた。乘つて居た客を、みなプラットフォームに吐き出し、電車はもと來た方へ歸つてしまつた。其の電車は、千住止まりだつた。

プラットフォームの待合室に、二十分ほど無聊な時間を費やした。此の邊もよく變はつたものだ。上京した當時、隅田の川堤を溯つて、鐘が淵から此のあたりへ出たことがあつた。十何年も前の話だ。其の頃と今とは全く變はつて居る。變はらぬものは、そこに架つて居る鐵橋ばかりだ。煙を吐いた荷物列車が鐵橋の上にさしかゝつた。轟々といふ冷たい響をもつた轍の音が、乾いた秋の空氣の中に快くひろがつた。列車が通り過ぎてからも、白い煙は青い空に殘つて居た。

間もなく越ケ谷行の電車が來たので、それに乘つた。大川を越えると小菅、蝗を捕りに行く五十ばかりの貧

相な女が、連れて居る男の子に監獄の話をはじめた。五反野あたりからは、車窓の眺めが全く田舍らしくなつた。稻は黃色に實つて居る。所々には刈り取られた所もある。此の邊には 新らしい住宅もまだ出來て居ない。稻田の間の木立に包まれて古い茅葺の農家が見えるばかりだ。

西新井に着いた。田圃の中の小驛だ。改札口を出ると、砂利の上に、自動車が一臺うしろを向いて居る。背中には、驛前大師間金十錢と書いてあつた。其の自動車に乘つた。乘合は僅かに三人ぎり、運轉手と車掌が一人づゝ、合せて五人。乘客の一人、勞働者風體の男が車掌と話をはじめた。

「毎日客があるかい。」

「駄目ですね。二十一日だけですよ。車が足りないと思ふのは……」

「平均一日何人位づゝあるのかね。」

「さあ、何しろ、無い時には、日に二圓にもなりませんからね。」

「川崎の方はどうだらう。」

「あちらはいゝですよ。京濱電鐵の方で補助して居ますし……」

平坦な田舍道を二三度右に曲つたと思つたら、自働車はもう止まつた。止まつた所は、總持寺の門前から三町ばかりの手前だつた。そこから、達磨や狸や羊羹を賣る店が續いた。御支度所とか、御料理とかいふ暖簾や看板のかゝつた家も交つて居た。黃色い聲で客を呼んで居る女もあつた。

寺の境內にも玩具や駄菓子や果物を賣る露店が並んで居た。本堂の入口の柱には、十日から二十三日まで結緣灌頂修行といふやうな紙の札が貼つてあつた。階段を上つて見ると、薄暗い堂の中には、眞黑く日に燒けた田舍の老人が一ぱいだ。其の數は夥しいものだつた。汚ない疊の上に座はつて、口々に何か唱へて居るところは、寧ろ凄慘な感じがした。これ等の善男善女は、順番に一團づゝ呼び出されて、左の方の入口から堂の裏へはいつて行つた。羽織袴をつけた狡猾さうな眼つきの男が小さい四角な淺い箱を差出し、家內安全何とやらの御祈禱の御志と妙な節をつけて機械的に叫びながら、座はつて居る善男善女の間を歩くと、あちらからもこちらからも賽錢がぱらぱらと其の箱の中へ落ちた。

境內は餘り廣くなかつた。眞中に小さい池があつた。側に鐘樓が高く聳えて居た。手足を橫に伸ばしたやうな恰好の松の古木が一本水面に影を投じて居た。私は、其の池のほとりで、寺の緣起を讀んだ。「抑〻當山の本尊弘法大師の由來をくはしくたづね奉るに、其のかみ人皇五十三代の帝、淳和天皇の御宇、天長三丙午年、大師衆生濟度のために、日本國中津々浦々を飛錫し給ふ折から、武藏の國足立郡を邊路のみぎり、年經る松樹の下を過ぎ給ふ時、梢に光明赫耀として紫雲たなびけり。不思議なるかな、十一面觀世音菩薩忽然とあらはれ給ひ、世にも微妙の御聲にて、善哉々々、空海汝今とし大厄あり、謹んで其の災難を免るべし。今また此の地の諸民に病災あり。自他の厄難消除を祈るべしと。觀音薩埵の示現に從ひ、大師齋戒沐浴して、一刀に三禮して、十一面觀世音菩薩の尊像を彫刻し給ひ、一千餘座の護摩を修し、此の殘木を以て自身の容を刻み、井の中

に沈めて定に准へ、其の災厄に更へ給ひ、自他の厄難消除のため、三七日の間、晝夜祈念し給へば、法力應驗空しからず、其の地の人民死亡の者一人もなく、疫癘頓に平愈なさしめ給ふ。されば、遠近の老若聞傳へて渴望せざるものなし。然るに、また不思議なるは、井の中に沈みし大師の木像、或る夜自ら飛び出でゝ、護摩壇に座し給ふ。人々奇異の思ひをなしたるに、清水湧出せしかば、大師手づから加持水となし給ひ、此の所に一宇を建立あつて、觀世音を本尊となし、五智山遍照院總持寺と命けたり。」としてある。厄除大師と云はれるやうになつた由來も書いてある。「數多の星霜を經て、人皇三代後花園院の文安元甲子年、兵火に罹つて、本堂・講堂並に御影堂、一時に灰燼となる。其の時、大師の尊像、自ら庭上の蓮池に浮みて、餘烟を避け給ふとぞ。則ち今の御手洗の池これなり。其の後、また後柏原院の文龜三癸亥八月十六日、又候御堂回祿す。其の節は、境内の丑寅に松の大樹あり、其の木の下に遷り給ふとぞ。其の松今猶ほ存して影向の松といふ。其の後、正親町院の永祿六癸亥年二月九日、又火災あり。此の時は、大師の眞像火中に在つて恙なく、たゞ椅子の端少しばかり焦しのみなり。」弘法大師の奇蹟話は珍らしくないが、かうした種類の昔話も、ものさびた古寺の庭で讀むと、過ぎ去つた日の人間の生活や信仰を思ひ出すには、よい材料だつた。

二十分ほど境内を歩いてから歸つた。同じ道を自動車に搖られて歸る時に、秋の夕日は、眩しく黃色い稻田に輝やいて居た。

所澤

所澤の實科女學校に居る友人を訪ねやうと思つて三時半頃家を出た。

國分寺で川越線に乘替へる時、四十五六分程待つたので、所澤へ着いた時にはもう少し暗かつた。

所澤は、武藏野の中に生長した小さい町だ。今では、飛行機で知られて居る。飛行機と云へば所澤、所澤と云へば飛行機を思ひ出す位だ。日が暮れても、まだ空では、プロペラの音がして居た。成る程、飛行場の所在地だけのことはあると思つた。日本の飛行機は、外國に比較すれば、統計の上の數字が非常に劣つて居る。し、十數年のことを考へて見ると、隔世の感がある。私がはじめて飛行機を見たのは、明治四十三四年頃だつた。熱田へ飛行機が來るといふので大變な人氣だつた。當日の夥しい人出を、私は今でもよく記憶して居る。一日仕事を休んで五里十里の遠方から集まつた者も多かつた。入場料の五十錢も驚いたものだ。其の頃の五十錢は、今の二三圓に當つて居る。飛行場は、周圍に高い板塀をめぐらしてあつた。併し、飛行機は、空へあがつてしまへばどこからも見えるので、五十錢の入場料は出さずに、外から見て居る者が多かつた。入場料を拂はない者は、飛行の時の滑走が見えないといふだけのことだつた。とに角、飛行場の内外は、つめかけた群衆で文字通りに立錐の餘地もなかつた。かういふ話も、今ではもう少し時代離れがして來た。

小學校の讀本に、汽車の發明された當時のことが出て居た。幼時から汽車を見馴れて居た私たちには、それ

が如何にも遠い昔の交通不便な時代を思はせた。今日の兒童は、同じやうな感興をもつて、五十錢の入場料を取つて飛行機を見せた當時の話を聞くであらう。所澤へ來て、大きな飛行場の敷地を遠くから眺めながら、名古屋の築港ではじめて飛行機を見た十數年前のことを思ひ出した。

所澤へ着いて尙ほ一つ思ひ出したのは、此の地に永く住んで居て、「武藏野話」を書いた齋藤鶴磯翁のことだつた。「武藏野話」には、正篇・續篇ともに所澤のことがはじめの方に出て居る。續篇には、齋藤要助といふ人の家の假山のことがある。「野老澤村の家並の後に流あり。其の川の北に、齋藤氏(俗稱要助)なるものあり。此の宅地北は高く自然の小山なるゆへ、稼穡のせはしき比、干物其の外皆此の小山の上にて乾すゆへ、手繰あしきに因りて、十八九年以前、此の小山の裾を十間も二十間も土をとりて平かにして物干場となし、其の地を小山の上にあげ取退庭むづかしきゆへ、其のまゝ捨て置き、かしこを高くし、こゝをひくゝして、終に一かどの假山となし、樹木など植えこみ、假山となりし山上より望めば、東北の隅に筑波山、北に二荒山・赤城山・吾妻山、西北の隅に淺間山、西南に多麻山・不二山見えて、絶景いふばかりなし。此の假山のうしろに一面に小松を植えし芝地あり。六月下旬より八月中旬まで、毎日初茸二三十或は五六十も取る事あり。もつとも年により過不足あり。宅地より出づるは、珍らしといふべし。」尙ほ此の齋藤氏の宅地から古い石碑の出たことが書いてある。假山の畫も挿入してある。今でもまださうした山が昔のまゝに殘つて居るかどうか、私は知らない。

學校を訪ねると、友人はもう歸宅したあとだつた。實科女學校は、小學校の敷地の中にあつた。門に標札が

並べてかけてあつた。此處の小學校は、非常に大きく、粗末な二階だての教室が幾棟も並んで居た。あとで友人からきくと、三十學級もあるといふことだつた。裏門からはいつて運動場を一めぐりした。廣い運動場には、二三人の青年が自轉車の稽古をして居た。隅の方には、新らしい立派な御眞影の奉安室があつた。私は、其の前にしばらく立つて居た。あたりを包む暮色は、だんだんと濃くなつて行つた。大きな武藏野が夜の帳にとざされやうとして居る刹那の情景を、私は、こゝに最もよく味はうことが出來た。所澤を訪ねた意義は、それだけでも十分にあつた。

停車場へ歸つた時は、全く夜だつた。プラットフォームで買ひ求めた冷たい辨當を持ち運んで、私は、池袋行の電車に乘つた。

武藏野の落日

國分寺から所澤へ向ふ列車の中で、私は、武藏の平原に沈む秋の落日を眺めた。武藏野の落日は、これまでにも度々見た。が、此の時ほど、武藏野の大きさと、秋の落日の美しさを感じたことはなかつた。國分寺から先は、武藏野もまだまだ閑靜だ。東村山の邊までは、川越線も昔の儘の畑中を走つて居る。其の列車の窓から眺めた廣大な平原の彼方に沈んで行く落日の影は、都會化した中野や吉祥寺で全く見られないものだつた。

落日の光景は、壯嚴な感じのするものだ。此の小品を起稿しつゝある時に、一人の鄕友から木曾川ラインを

訪ねたといふ手紙を受けとつた。私は、其の手紙を見て、濃尾平原の落日を思ひ出した。私は、まだ木曾川ラインの絶景を知らない。併し、名古屋在住の昔、屢〻濃尾の平原を歩いた。其の時に、私が最も美しく感じたものは、落日の大景だつた。矢田川原の白砂青松に反映する落日も美しかつた。水分橋の水門を彩る落日も美しかつた。最も明るく、最もさびしみを含んだ美觀、それは落日の光景だと私はいつも思つて居る。落日の姿を凝視して居ると、壯嚴・悲哀・安心・靜寂といふやうな色々な感じが一度に湧いて來る。落日の光景を大聖の死に譬へた者があつた。平凡に似て味はひのある譬喩だと私は思ふ。

武藏野の落日は、濃尾の平原のそれよりも尙ほ一層美しい。美しいといふ言葉は、當らないかも知れない。が、何處かに少し深みをもつて居ること、夢のにほひを含んで居ることは事實だ。それは、地質や植物や、種々のものから成り立つ自然色によるものであらう。

私は、忘我恍惚の狀態に入つて、車窓から落陽の光輝に陶醉した。列車の進行の速かなことを憾みとした。其の外には、語るべき詞も見出し得ないほど强い美感にうたれて、所澤驛のプラットフォームへ降りた。

八王子

淺川驛から八王子驛まで、乘合自動車に乘つた。其の間の四十錢はどう考へても少し高いと思つた。淺川驛から中野驛までの六十錢に比較すれば、假令、列車と自動車の相違はあつても、餘りに權衡を失して居る。自

動車のみではない。高尾の山麓は、一體に物價が高過ぎる。サイダーの三十錢も暴利の甚だしいものだ。交通の不便な土地になれば、かういふ物品がいくらか高くなるのは、餘儀ない事でもあらうが、柿や栗のやうな果物まで高く賣りつけるのはよくない考へだ。名所舊蹟の土地で、遊覽者に物を高く賣りつけることは、殆ど普通の例になつて居る。併し、これは考へなければならぬことだ。よい品物を廉く賣れば、土產に持つて歸るべきところを、餘りに暴利を貪れば、買はずに歸つてしまふことになる。第一、客に不快な感じを與へるだけでも損だ。通り一遍の客といふ言葉がある。目前の小利を爭つて、結局の大利を忘れた言葉だ。今日多くの人が旅行をして、最も不愉快に感ずるのは、知らぬ土地へ行つて、不あしらひな待遇を受けることと、見す見す暴利を貪られることであらう。旅行者に對する德義といふやうなことは兎も角、土地の發展から考へても、遊覽地等の有力者は一考すべきだ。

滿員の車內に立つて居た爲めに、自由に外を見ることも出來なかつた。が、八王子の町は、想像して居たよりもよかつた。自動車が町にはいつてから、停車場前に着くまでの距離がかなり長かつた。五時五十分の新宿行までには、四十五分ほど間がつた。早ければ、神奈川行の列車に乘つて、橫濱の方から一めぐりして見たいと思つたが、淺川で日を暮してしまつたから、其の希望は斷念した。地圖や旅行案內を見ると、何となく一度乘り廻はつて見たいやうな氣のする線路がある。菓京の近郊では、粕壁行の電車の如きも其の一つだつた。八王子から神奈川の方へ行く列車の如きも其の一つである。

秋の日は暮れ易い――とはよく云つたものだ。五時になるかならぬのにもう暗い。町には明るく電燈が輝やいて居る。山登りのために輕い疲勞を覺えたせいか、町を歩いて見る氣もしなかつた。待合室のベンチにもたれて、同じやうに列車を待つて居る人々の話をきゝながら、田舍の町の停車場の夜の空氣を味はつた。鄕里に居た若い頃愛讀した前田夕暮の歌集に、こんな心地をうたつたのがあつたやうに思つたが、其の詞は思ひ出せなかつた。詩歌に熱中した頃の幼ない自分の面影が浮んで來た、今では、中々歌も出來ない。併し、かうした境地に身を置く度毎に、いつも湧いて來るのは詩心(うたこゝろ)だ。千本濱に遊んだ時もさうだつた。修善寺に滯在して居た時もさうだつた。煩はしい生活のための仕事から離れたら、私の心は、やがてまた詩歌の天地に歸つて行くやうな氣もする。さういふ時が再び來ないにしても、時々詩心が湧いて、世の中に情味を感ずるだけで、私の心は、かなり大きな幸福に充たされる。

停車場で汽車を待ちて居るのは、無意味に時間を空費するやうに思はれる。私は、さう思ひたくない。さういふ機會こそ天から與へられた反省・思索・瞑想の時間だと考へる。忙しい生活もよいが、忙しいために、自分の存在までも忘れて居るのはたわけた話だ。如何に忙しい生活をして居ても、時々自分の存在を省みる時間の餘裕をもたなければ、人間の生活が無意義になる。自分から機會を作らないのに、天から機會の與へられるのは、甚だありがたいことだ。私は、さう思つて、いつも時間の空費を無意義の方向に轉ずることにして居る。

四十數分の時間は、間もなく過ぎ去つて、私は車中の人となり、瞑想に耽つた八王子驛をあとにした。

忙窓閑話

徒然草の註釋

「徒然草」を非常に深く研究した者があるといふ話をきいた。其の原稿が何千枚かの大部なものだといふ。かうなると、學問とか研究とかいふものの價値を疑はざるを得ない。「徒然草」などは隨筆だ。意の向くまゝに書き綴つたものだ。其の書名がよくこれを語つて居る。書いた人の心にもなつて、意の向くまゝにこれを味へばそれでよいのだ。細かな穿鑿をすべき性質のものではない。此のことを話した人は、「徒然草」の著者も定めし地下で感謝して居るであらうと云つた。私はそれを否定した。著者にとつてそんな註釋は難有迷惑だ。重箱の隅をつゝくやうな註釋をして貰つて、感謝するやうな者に、「徒然草」のやうな隨筆の書けるわけがない。隨筆を書く人は、誰でもさうだらうが、あとで研究などをして貰ひたいとは思ふまい。讀んで味はつてくれる者の方が知己だ。古人の著書や文章をあまり細かに分析して、役にも立たぬ判斷を下してどうのかうのといふのは、書いた人の心になつて見ると氣の毒で、我々には出來ない。

學者氣質

吉田東伍が非常に偉い學者だつたといふ話を、或る時に、或る人から聞いた。此の人は、自分の著書の序文に、先輩の名を擧げて、謝辭を述べるやうなことを決してしなかつたさうだ。地名辭書の編纂には、帝大の某博士等から參考書を借り出し、直接・間接に多大の援助を受けたので、或る人が、其の序文の中に一言謝辭を述べて置いたらどうかと注意したら、其の必要はない、一冊の著書を公にするには、古今幾百人の先輩の研究が基礎になる、世話になつた人の名を序文の中に書くなら、如何なる小著にも幾百人の姓名を列擧しなければならぬ——と言つてきかなかつたさうだ。これは、不遜な言葉のやうにも聞えるが、よく考へて見ると一つの見識だ。一時は著書の扉に、此の書を誰々に捧ぐ——といふやうな文字を書くことが流行した。此の頃は、大分少なくなつたやうだ。これも惡いことではなからう。が、更に意味のないやうな者に、著書を捧げるのは滑稽だ。序文へ先輩の名を書くのは、今でも常例のやうになつて居るが、感心しないのが多い。如何にも先輩の歡心を買ふために書いたものだと思はれるのがある。中には先輩の名を並べて自分の著書や論文に權威を認めさせやうとしたのもある。何れにしても陋劣な根性だと思ふ。一度や二度訪問して多少の教示を受けた位のことを、麗々しく序文の中に書く必要があるだらうか。書けば書かれた人は歡ぶであらう。それは人情の弱點だ。其の人情の弱點を利用して、どうかしやうとするやうとするのは厭な幇間氣質だ。吉田東伍氏のやうな頑固な學者氣質といふものにも、却つて奥床しいところがある。

桐葉章

藝術教育論の影響か、近來、教育者の中に小說や戲曲や童話の創作をする者が多くなつた。それ等の創作の多くは、教育雜誌へ出るために、世間の人も注意せず、批評にも上らず、讀書界から默殺されてしまふが、時々非常によいものがある。「教育問題研究」の十一月號へ出た「桐葉章」などは、私の感心して讀んだものの一つだ作者の谷口武といふ人を私は知らないが、とに角、此の作はよい內容をもつて居る。さうして、其のよい內容を小說とも隨筆とともつかぬ形式で書いて行つたところに素朴な力を感じた。教育上にも種々の暗示を與へるよい意味の教育的藝術だと思つた。若し教育小說といふ言葉が成り立つならば、かういふ作品こそ其の中に數へられなければならぬものだと思つた。今までの教育小說と云はれて居るものには、教育のことを書き、教員のことを書き、教育社會を題材として居るのみで、藝術になつて居ない作が多かつた。「桐葉章」のやうなよい作が教育者の側から出て來たのを私は喜ばしく感ずる。(大一五・一一・二〇)

新刊紹介のこと

雜誌を編輯して居て、いつも頭痛の種になるのは新刊紹介だ。私にとつて此の新刊紹介ほど嫌ひなものはな

い。私は、書物を讀むことの好きな方だ。一種の愛書癖をもつて居る。だが、讀みたくない書物は讀めない。讀まない書物の紹介を書くことは出來ない。前には私もよく功利的に書物を讀んだ、試驗を受けるためとか、或は其の書物の內容を知つて、これを何かの役に立てるために讀んだ。今では、さういふ讀書が全然出來ない。今日の讀書は趣味の讀書だ。趣味のない讀書は、如何に努めても駄目だ。また努力して無趣味な讀書をしやうとも思はない。如何なる書物に趣味があるかと云へば、それは、私の心に自由と悅樂とを與へ、私の思想を助長し、私の生活にうるほひを多からしめるものだ。さういふ性質の書物ならばよいが、教育雜誌に寄贈される書物には、私の讀みたくないものが多い。さういふ書物に就いて何か書くのは非常に苦痛だ。中には、時々、書店から、此の書物に就いて、何月號によろしく提灯持ちを願ひたい。それに廣告を一頁掲載するから——と云つて來るのがある。雜誌の編輯者は、みな經驗のあることであらうが、あまりよい心地のするものでない。それが平氣で出來るやうになれば、一種の良心痳痺だ。併し、折角、寄贈された書物に一言半句の紹介もしないといふわけにはいかない。或る雜誌には新刊の紹介が出ない。寄贈された書物は、みな古本屋へ拂つて、社員が其の金を消費してしまふといふことをきいた。それは如何にも人情のないやり方だ。さういふことが平氣で出來るのも亦一種の良心痳痺だ。私は、寄贈された書物を一言一句も紹介せず、直に葬るといふやうなことをなし得ない。寄贈された書物は、先づ其の內容を一瞥して、簡單な紹介をする。讀みたい書物だけは殘しておいてあとで精讀し、詳しい所感を書くことにして居る。紹介は、たゞ內容や著作の動機を知らせるだけに止

めて、賞讃非難をしないやうに力める。それも今では忙しくて出來ないので、多くは外の者に依願して居る。私の許へ寄贈された書物で、それだけのことをしないのは、私の許へ屆かなかつたものか、さもなければ忙しくて忘れて居るものばかりだ。讀みたくないものは、寄贈されても讀めないが、讀みたい書物は、自分に講求して讀む。讀んでは、賴まれもしないのに感想を書く。其の感想は、雜誌へ掲載することもあるが、稿本のまゝ備忘に殘して置くものも少なくない。

思ひ出の一つ

かれこれ二十年にもならう。私が或る田舍の小學校に准教員をして居た時のことだ。海水浴場として有名な隣接の小さい町の海岸に、一人の青年が病後の身體を養つて居た。其の青年は、或る神學校を出たばかりの熱烈なクリスチャンだつた。濱邊の家に自炊をしながら、外國の書物を讀んで、盛んに宗教や哲學や文學を論じ、詩などを書いて居た。弱々しい身體の此の男が、近海をボートで乘り廻はしたことや、漁夫の喧嘩の仲裁をしたことや、咯血しながら大道で演說をしたことを、私は友人からきいた。友人は其の町の小學校に奉職して居る者だつた。此の友人は、其の頃の田舍には全く類のない程進んだ頭腦と新らしい思想をもつて居た。どういふ經歷の者か、どこの生れの者か、私は知らなかつたが、偶然に親しくなつて、時々其の友人を訪れた。一家が離散して田舍落ちをして來た者だつた。東京にも京都にも長く居たと云つた。英語も達者に讀めた。此の友人

が濱邊に來て居るクリスチャンの青年をよく知つて居たので、私は、二三度一しよに其の青年の寓を訪れた。二人は、いつも外國の書物の話をはじめた。私は、默つてそれをきいて居た。さうして、よく似た人間があるものだと思つた。髪の分け方、聲、英語、新らしい思想、いろいろな點に似た所があつた。私は二人の話をきいて居てさう思つた。これは、小學校に居る友人の方が、思想に於ても人物に於ても、一段上だ。病青年には、少し輕々しい所があつた。友人には長者の風があつた。年齢も少し上であるやうに見えた。病青年は、大分長く其の海岸に居たが、其の中に何れへか立ち去つてしまつた。

二十年の歳月は過ぎた。人の世の中には種々の變遷があつた。今から其の當時を思ふと、自分の年とつたことが痛感される。それにしても人間の運命といふものはわからない。前の日の病青年といふのは賀川豐彦氏で、小學校の友人といふのは四橋義久氏だ。死線に近づいて居た賀川氏が健康な身體となり、今日のやうな活動をなし、嘖々たる名聲を謳はれて居るのに反し、四橋氏は、依然として同じ小學校の教師だ。名もない小學校に埋もれて居ても、此の友人に對する親昵の感や尊敬の念は少しも變はらない。かうした話も、私にとつては意味の深い思ひ出の一つだ。（大正一五・一一・二五）

感想の一つ

十大教育雜誌の編輯者と編輯ぶりと云ふ記事を新年號に掲げたいから、「教材集錄」のことを五百字以内に書

けといふハガキが或る雜誌から來た。私は、もうさうしたことを書かうといふ興味が全然なくなつて居るので正直に其の通り答へて置いた。私が雜誌の編輯に從事してから、もはやかれこれ十五年になる。あとをふりかへつて見ると、情けない程單調な道を歩いて來たといふ氣がするばかりだ。これと云ふ痕跡は一つも殘つて居ない。姓名を知つて居るのは、自分の編輯して居る雜誌の讀者のみだ。世間的には何の存在も認められて居ない。昨年舊い友人の一人に逢つた。それは、青年の時代の文章や詩の仲間で、今日の文壇にいくらか名を知られて居る者だつた。其の友人は、私に次のやうなことを言つた。お前は、長い間何をして居た。本屋へ行つて見ると、お前と同じ名の人の著書が澤山棚に並んで居るので、其の度毎にお前のことを思ひ出した。——と。昔たゞ文通のみして居た友人は、私が、今のやうな仕事をし、倫理關係の書物などを著はして居やうと思つて居なかつたのだ。私は、苦笑するより外なかつた。私としても最初から教育雜誌の記者にならうと思つて居たわけではない。偶然かういふ方面にはいり、ついつい長い歳月を此の仕事のために消費してしまつたのみだ。私にも時々はけしい煩悶はあつたが、此の仕事をよして外にどうしやうといふ思案も出なかつた。私といふものが才能の足りない世渡りの下手な人間だといふことと、世俗の名譽心の乏しい人間だといふことが、此の事實によつてよく證明されて居る。

長い間の此の仕事を通して、私の感じて居ることは甚だ多い。私は、今、述懷めいたことを書かうと思はないが、其の一つを言つて見れば、教育雜誌の編輯者の境遇だ。教育雜誌の編輯者といふものは、如何なる點か

ら見ても、惠まれたものではない。さう云へば、不滿に思ふ人もあらう。併し、私は、さう思ふ。十五年の間には、樣々の雜誌が起つたり倒れたりした。其の度毎に樣々の人が現はれたり消えたりした。果してほんとうに心から其の仕事に興味をもち、自分の編輯する雜誌を愛して居るのかどうかはわからないが、かなり熱心に原稿を集め、時々編輯便りや六號活字へ傲慢なことを書いて、外の同業者を無視したやうな言を吐いた者もあつた。それほど記者としての天分を有し、編輯に興味をもつ者ならば、長く其の事業に止まり、レコードを破つた成功を收めさうな筈であるのに、いつとはなく煙のやうに消えてしまつた。其の雜誌を去つたあとでは、翌月からもう人に忘れられた者が少なくない。中には、後の編輯者から不信任的な文字で弔はれた者もあつた。殊更にあはれを感じたのは、自分だけ得意になつてメートルを擧げて居るのに、其の社長とも云はれる人からあの男もかういふ仕事には不適任だから、外によい候補者はあるまいか——といふやうな相談を受けた時のことだ。己れを知れといふ古い金言を身に沁々と感じたこともあつた。本人は一生懸命に働いても、時勢の影響等で雜誌が不況になれば即日解雇だ。樣々の悲喜劇を目前に瞭めて來た私は、新しく教育雜誌の編輯に從事し、六號活字などで元氣のよいことを言つたり、讀者から追從的な手紙を貰つて喜んだりして居る者を見ると、またかといふ心が起るばかりだ。外の教育雜誌の編輯のことなどについて、何か言つて見たいといふ興味は、今日のところ更に起らない。（一五・一二・五）

消閑放言

文章奉仕

年毎に人間の思想もいくらかづゝ變はつて行くものだ。此のごろ自分は社會のための奉仕といふことをまじめに考へるやうになつた。社會奉仕といふことは、常に人の口にする言葉だ。私もまたこれまで時々此の言葉を使つた。併し、それはたゞ口眞似に過ぎなかつた。社會奉仕といふことを心から考へて居たわけではない。併し、今では心から此の問題を考へるやうになつた。何か多くの人のためになる仕事をしたい。さういふ要求が非常に強く私の心を動かさうとする。これも年のせいであらう。

多くの人のためになる仕事と云つて、私にはこれといふ適當なものもない。私の如く、教育社會から出た者は、教育事業をはじめるのが、最も手取り早くて無難だ。が、私には到底實際教育者として立てさうな自信もない。實際の教育をしやうと思へば、先づ私學でも經營しなければならぬが、それには金がいる。金はこれを篤志家に出して貰ふより外に出來る見込がない。今の世の富豪といはれるやうな人々に、頭を下げて金を出し

て貰ふやうなことは絶對に駄目だ。と云つて、私は、また教育學の如きものを論じて居る柄でもない。さういふ興味のない仕事にも全く不向きだ。かう考へてくると、世の中のためになることで、私に出來る仕事はない。ないと云つて、何もしないで居るのは、心が咎める。そこで思ひついたのが文章奉仕といふことだ。

小學校を卒業して二三年たつた頃から、ものを書くのが好きになつた。好きになつたといふよりも癖になつたといつた方がよからう。書物もなければ小説を語る友人もないやうな山の中に生れた私は、自分の心を慰めるために、たゞ無闇にものを書いた。書いて居る中に、それが一つの癖になつた。今でもものを書くことだけは少しも苦痛を感じない。時には自分の書いたものが全くいやになる。ものを書くことはやめたいと思ふときがある。併し、決してやめることは出來ない。文章によつて世の中のためになることをしたいと思ふのが私のいふ文章奉仕だ。

これまで私はいつも文章を自分のために書いた。これからは、世の中のためになるものを大に書きたいと思つて居る。自分のためになつて、世の中のためにもなれば最もよい。文章報國といふやうな事を云つて居る人がある。德富氏ばかりではない。外にもあるやうだ。私はいつもキザな言葉だと思つて居た。併し、ほんたうにさう考へて居る人もあるであらう。報國といふやうな言葉は、あまり大袈裟に聞えてよい感じがしない。併し、私は、さういふ人の氣分をもよく理解することが出來、さういふ態度にも尊敬がもてる。

順境の友と逆境の友

人間には順境の友と逆境の友とある。順境の友といふのは、順境にある時だけしか友誼の保てないもの、逆境の友といふのは、其の反對だ。順境の友は多い。求めずして自分の周圍に蝟集する。逆境の友は少ない。求めても求め得ないのが通例だ。

長い間官界の生活をして來た或る人はかう云つた。大臣をして居る時には、用もないのに色々な人が絶えず訪ねて來た。野に下つたら訪問者が急に激減した。年賀狀の如きも半分になつた。どうも世の中の人間の現金なことには呆れはてた——と。視學をして居る時には、夕食の時間さへもない程客が詰めかけたのに、中學校長に轉じたら、誰も來なくなつたといふやうな話も珍らしくない。

人の順境にある時だけ友誼の保てる者は世間的に幸福だ。當世向の人間とは、これを云ふのであらう。順境にある人の門に絶えず出入し、其の鼻息を巧にうかゞふ術を心得て居れば、世俗的の地位も容易に得られ、早く立身出世の蔓にありつくことも出來やう。逆境の友は、世渡りの上に損な道を歩く人だ。逆境にある者から、如何に信頼された所で、處世上の利益は更にない。併し、順境の友は、逆境の友よりも不純だ。不純な友情には、眞實性がない。逆境の友よりも順境の友は遙かに貴い。順境の友よりも逆境の友たれ。順境の友よりも逆境の友を求めよ。當世向の人間となつて、世間的に幸福な日を送ることのみが、意義のある生活ではない。私

は、さう確信して居る。

清濁併せ呑む

清濁併せ呑むことは、中々出來ない。清を愛慕すればするほど濁が憎惡されるからだ。清濁併せ呑むやうな人間にはなりたくない。ならうと努力する必要もない。

清濁併せ呑んで、濁を清に化する人は尊敬に價する。濁を清に化することが出來なければ、濁を斥けて清のみを呑み、濁のために清の汚れを防ぐことが必要だ。

有名無實と無名有實

古い友人の一人が、此の頃高等學校の教員檢定試驗の準備をして居るといふ話をきいた。其の男は、全然學歴のない獨學者だ。檢定試驗を受けて小學校教員や中等教員の資格を得たが、中途で教育界を去つて、銀行の支店長になつたり、市の助役になつたりした。其の方面でかなり有能な活動ぶりを示して居るやうに聞いて居たから、將來は、實業界か政界で成功する人と思つて居た。しばらくたよりがないからどうして居るかわからなかつた。然るに、此のごろきくと、疾に助役を辭して、また試驗の準備をして居るといふ話だ。

試驗勉强や學校教育のために、長い歳月を費やすことは感心しない。試驗や學校教育は、なるべく若い中に切り上げたいものだ。三十歳を過ぎてから、試驗の準備をしたり、學校へ入學したりすることはどうかと思ふ。併し、試驗の合格や、學校の卒業を就職の資格とするのでなく、或る一つの事業をなし遂げた者が、また若返つて新らしい道へ進まうとするのは面白いことでもある。セシル・ローズの例を學ぶわけだ。

あまり早く偉くなり過ぎるのはよくない。處世上には幸福かも知れないが、其の人の本質的には却つて不幸だ。早く世間に其の名をうたはれたために、伸びるものが十分に伸びないで終る例は甚だ多い。文學の方面にも學問の方面にもある。有名無實の大家といふものが、今日の世の中にはあまりに多過ぎる。有名にして無實なものよりも、無名にして有實なものの方がよい。試驗といふものは、實力を試みる一つの方法だ。勿論、唯一の方法ではない。自分の實力を以て何事でも突破してゆく試練として、試驗を受けて見る位の勇氣は、四十歳になつても五十歳になつても欲しい。相當な大家になつて居ても、大家ぶつて居らず、時には實力で爭ふ元氣をもつがよいと思ふ。文藝の如きものもその通りだ。名ばかりがよく知られて居ても、其の名に相當した作を出さなければ何の價値もない。また世間は往々其の名に欺かれて、其の作の價値を買ひかぶることもある。世評の甘言に迷はされて居ては駄目だ。匿名で發表して其の眞價を問ふことも大に必要だ。覆面で立ち合つて勝をとるやうでなければ、ほんたうの達人とは云へない。昔の武者修業はよく他流試合といふことをやつた。時には他流試合をして見る位の元氣が欲しい。

環境の變化

いくつになつても年をとつたやうな氣がしない。かういふことをよく老人から聞かされたものだ。此のごろは、自分にもさう思ふやうになつた。自分はもはや多くの者が若い人として取扱はない年齢に達して居る。併し、少しも年とつたやうな氣がしない。十年前も二十年前も殆ど等しい。たゞ時々自分の年齢を自覺せしめるものは、環境の變化といふことだ。前には、學校の卒業試驗だとか、教員の檢定試驗だとか、とに角、受驗の準備にのみ熱中して居た友人の多くが、今日では、反對に試驗の答案を見ることに忙殺されて居る。一週間に何百枚の答案を見なければならぬとか、いつから學年試驗がはじまるから忙しいとか云つたやうな話を、友人からきく度毎に、自分の環境の變化を痛切に感ずる。其の昔學生であつた友人は、多くみな大學や專門學校に講義をして居る。また或る者は、自分の長男を中等學校へ入學させなければならぬと云つて心配して居る。地方から視察に來る舊友の話をきいて見ると、來年の三月には、郡内で誰と誰とか勇退するといふ。其の勇退する人々の中には、自分と年齢のあまり違はないものがある。如何にもさびしい話だ。自分は、まだこれから大に仕事をしたいと思つて居る。否、これからが仕事をする時だと考へて居る。然るに、田舍の小學校等に勤續せる友人は、もはや勇退しなければならぬ時になつたのかと思ふと、他人のこととは思はれないほど淋しくなる。自分は、いつまでも同じやうな氣分をもつて居るが、環境の變化を顧みると、年齢を自覺せざるを得ない。

人間の晩年

君は、此頃、人間の晩年といふことを時々考へる。晩年のよい人は幸福で、さうでない人は不幸だと思ふ。勿論、よい惡いと云つても、それは、物質的に惠まれて居るとか居ないとかいふやうな意味を含まない。人の生涯を旅に譬へて見れば、或る一定の目標に向つて進めるだけ進み、一貫した生活を續け、理想の圈内に少しでも近づいて來た者、それが晩年のよい人だ。これに反して、長い間一直線に歩いて來た道を、今一と息といふところで見失つたり、または全く方向の違ふ方へ外れたりする者は、晩年のよくない人だ。

晩年のよくない氣の毒な人として、最近にいつも聯想するのは、箕浦勝人氏と井上哲次郎氏だ。箕浦氏といへば、何人も知る政界の長老で、而かも現代の政治家中、罕に見る高潔な人格者と認められて居た人だ。それが晩年になつてから、事もあらうに、遊廓の移轉問題であの始末だ。かうしたことは今日の政治家にとつて、さほど珍らしい例でもなからうが、あまり感心した話と思はれない。また井上博士は、國民道德の提唱者だ。國民道德と云へば、井上博士が誰の頭腦の中にも浮ぶほど、井上博士と國民道德とは關係が深い。其の井上博士がふとしたことから亂臣賊子の汚名を受けた。かういふ汚名を受けるのは、誰にしてもよくないことであらうが、多年國民道德を唱へて來た井上博士の身になつて考へて見ると、あまりに運命の惡戯がひど過ぎる。九仞の功を一簣に缺くといふ言葉があるが、井上博士の晩年がそれだ。勿論、かうした過失のために、井上博士

の學界に貢獻せられた功績が臺なしになるわけではないが、少なくも國民道德の提唱者として、其の首尾が一貫しないことは明かだ。

晩年の幸福な人として、最も羨望に堪えないのは、坪内逍遙氏と德富蘇峯氏だ。幸福の意味のとりやうによつては、外にもつと幸福な人があるだらう。併し、私は、多くの富を蓄積して安樂な日を送るとか、子孫に立派な人が出來て、家庭的の團欒に惠まれるとか、さうしたことを無上の幸福と思はない。自分の目標として進んだ仕事が、老後になつてから大成してゆく人を、最も幸福な人と思ふ。坪内博士が靜かな熱海の双柿舍に退いて、餘生をシェークスピーアの全譯に捧げて居られることは、羨ましさの極みだ。明治の文壇に大きな足跡を殘した人は、今日からふり返へつて見るとかなり多い。森鷗外氏も其の一人た。幸田露伴氏も其の一人だ。併し、坪内博士ほど最後までまとまつた仕事にうち込んだ人はあるまい。多年、早稲田大學の講堂に立つて、シェークスピーアの講義をせられたことも、日本の文化には勿論大きな貢獻をして居る。併し、それのみでは、さう長く坪内逍遙の名を後に傳へなかつたかも知れない。早稲田大學を退いて、此の大事業を企てられた着眼がよかつた。晩年を有意義に送る手段としてこれより最上の策はない。これこそは國民的•國際的の大事業と云つてよい。シェークスピーアの名が世界の文學史から消えない以上、坪内逍遙の名も亦各國に喧傳せられるであらう。

德富蘇峯氏の事業も亦大きなものだ。還曆も既に過ぎて老境に入れる今日、德富氏が絶大な精力を以て、破

天荒な大事業を着々として進めて行かれる其の努力は、後進者にとつて、何よりも大きな刺戟だ。それだけでも德富氏に尊敬を拂はざるを得ない。明治年間の操觚者として聞えた者には、池邊三山氏がある。陸羯南氏がある。朝比奈知泉氏がある。山路愛山氏がある。三宅雪嶺氏がある。されど、或る者は既に沒し、或る者は夙に文筆生活を遠ざかつた。依然として同じ事業に活動して居るのは、雪嶺•蘇峯の兩氏のみだ。而して、昨今は、雪嶺老ひたりの感が深い。然るに、蘇峯は、少しも衰へたところを見せない。却つて年毎に元氣が加はつてゆくやうにも思はれる。蘇峯氏は、常に自ら記者を以て任じ、文章報國を標榜して居る人だ。さうして、蘇峯氏の一生は、徹頭徹尾文章のための努力だ。これ程首尾の一貫した生活はない。私の羨望するのは、かういう生活だ。過去の德富蘇峯氏は、權勢に阿附する御用記者として多くの人々から非難を受けた。桂内閣の時代に於ては、確かに政府の擁護者として、一部の反感を挑發するやうな筆を弄した。御用學者と云へば、井上哲次郎、御用記者と云へば、德富蘇峯の名が、今でも吾人の腦裡に浮んで來る。桂公の沒後、德富氏は、御用記者的の態度を離れ、文章報國の旗幟を鮮明にして、幾多の良書を續々と發表した。其の中の最も大きな收穫は、いふまでもなく「近世日本國民史」の編著だ。此の書は、量の上に於ても、內容の上に於ても、文字の上に於ても、先人の未だ企てなかつた大著述だ。今後に於てもまたかくの如き大作が容易に出やうとは思はれない。該博な知識、豐富な經驗、椽大な史筆、あらゆる點に於て、史論家たる資格を完備した蘇峯氏によつてはじめて出來る事業だ。今後に於ても、史學を專攻する學者は多からう。併し、蘇峯氏の如き史筆の才ある者は少な

からう。蘇峯以上の能文家は、現在に於ても多々あらう。併し、蘇峯氏の如く惠まれた境遇にある者はなからう。假に、蘇峯氏の如き學と才と境遇とを兼ね備ふる者があるとしても、かくの如き絶大の精力が續く人ばかりはあるまい。蘇峯氏の事業は、蘇峯氏でなければ出來ない。蘇峯氏以上の人物の出ない限り、「近世日本國民史」以上のものは絶對に現はれない。かういふ大事業に力を盡す蘇峯氏の晩年を羨ましく思ふ。蘇峯の文名を初めて知つた頃の私は、學問も何もない僻地の青年であつたから、眞實のことのわかるわけもないが、御用記者といふやうな言葉により、不快な印象を與へられて居た。私は、三宅雪嶺氏を尊敬しなかつた。文章の上から云へば、德富蘇峯氏よりも朝比奈知泉氏のものを愛讀した。然るに、其の朝比奈知泉氏は、文章家として早く凋落した。蘇峯氏は、年と共に圓熟し、遂には史論家としての特色を極度に發揮し、何人も企て得ない修史の大事業に着手した。修史の事業に文章報國の精神を徹底せしめるやうになつてからの蘇峯氏に、私は、絶大の敬意を表して居ることを明言して憚らない。私は、今日でも三宅雪嶺博士を昔の如くに尊敬して居る。三宅博士の一生の事業にも興味を有する者だ。併し、今日ではそれと雁行して德富蘇峯氏を尊敬し、其の大事業の完成を待つて居る。朝比奈知泉氏が凋落して久しい今日、蘇峯氏の大活躍を見るのも思ひ出の深いことだ。御用學者と云はれた井上博士が、今日になつて、あゝした問題により、公職の一切を辭し、謹愼して居られる時、一度は御用記者と呼ばれた蘇峯氏が、修史の大事業に一世の尊敬をあつめて居るのも皮肉な對照だ。晩年の幸福な人と不幸な人といふことを此頃私は時々考へる。（一五・一二・二）

街頭所見其の折々

惡劇の流行

私は、劇といふものをあまり多く觀て居ない。脚本は時々讀んで見る。脚本ではよく知つて居ても、實演を見ないものが多い。私は、劇があまりに好きでない。健康上によくないからだ。あゝいふ刺戟の强いものを、五時間も六時間も觀ることは、たしかに身體の機能を害する。今日の劇といふものは、開演時間の點からも改良の必要があらうと私は思ふ。

劇をあまり多く觀て居ない私が、劇のことをいふのであるから、其の言は勿論當を得ないであらう。併し、私の觀る所によれば、今日の社會には、甚だしく惡劇が流行して居るやうに思はれる。惡劇といふものは、必ずしも今の世の中にのみあるものでない。人間は、みな一種の好奇心をもつて居る。此の好奇心に迎合して、殊更に殘忍な事柄や、淫猥な場面を見せるのは、劇場へ多くの觀客を吸收せるに最もよい方法だ。惡劇といふものが絶えない理由の一つはこゝにある。

藝術と道德とは區別すべきものだ。全く同じものではない。從つて、劇の內容には、道德的の敎訓が含まれて居なくてもよい。もとは芝居を勸善懲惡の方便の如く考へた者があつた。今では、さうした偏狹な考へ方をする人もあるまい。「忠臣藏」や、楠公を脚色したやうな劇のみに感心するのは、舊い思想に囚はれた道學者ばかりだ。劇の存在を道德の方便と見ることは出來ない。道德的の敎訓を含める劇を可とし、これに反する劇を否とするやうな觀方は間違つて居るやうに思ふ。併し、人間の好奇心に迎合し、惡趣味を助長せしめ、且つ殊更に不道德を勸めるやうな劇は、これを排斥しなければならない。それは、人間の生命の發展を害するからだ。芝居は必ずしも忠臣孝子を題材としたものでなくてもよい。たゞ人事や世相を其のまゝに寫したものでもかまはない。併し、それは常に人間の生命の發展を助けるものでなければならぬ。如何なるものでも、多くの人々がこれを歡迎すればよいといふわけにはいかない。

最近に實演せられて居る劇には、惡趣味を助長し、殊更に不道德を勸めるものが多いやうだ。民衆的な劇場で行はれるものには、特に其の感を深うする。今日では、かなり殘忍なことや淫猥なことが、公然と帝都の劇場で實演せられて居る。明治の半ば頃までは、極端に殘忍な芝居や淫猥な芝居が殘つて居た。さういふ芝居の勢力が衰へて來て、新派悲劇といふやうな甘い戀愛を中心としたものが擡頭した。然るに、それも亦漸く觀客から飽かれるやうになつた。さうして、刺戟の非常に强いものが歡迎せられる傾向を生じた。劍劇の流行なども其の一つの例であらう。一般の民衆が刺戟の强い娛樂を喜ぶやうになつたのは、時代の趨勢の然らしむると

ころだ。併し、また震災の影響も見逃すことは出來ない。劍劇の如きものには、まだ面白いところもある。徒らに血腥い殘虐な場面を見せて、惡どい刺戟を與へるもの、露骨な變態性慾者などを出して、劣情を挑發するものなどは、たゞ不快な印象を觀客に與へるのみならず、民心を墮落せしめることが少なくない。幕每に殘虐な殺人を誇張して見せる高橋お傳を題材とした劇の流行の如きは、甚だ寒心すべきものだ。高橋お傳を芝居の題材にするのを非難するのではない。此の題材を惡用して民衆に媚び、惡趣味を助長せしめることを怖れるのみだ。

世の中に殺伐な事柄が現はれると、直にこれを劇の影響のやうに言ふ者がある。血腥い殺人强盜が行はれた時に、或る新聞は、其の原因を劍劇の流行に歸した。さういふ觀方は、勿論、間違つて居る。社會的現象の因果關係は、さう單純に成り立つて居ない。劍劇が流行すれば、直に殺人强盜が橫行するといふわけのものではない。殺人强盜の橫行には、必ず外の理由があるであらう。外の理由によつて、當然、さうした忌むべき現象が世の中に生ずるやうになつたことと思ふ。併し、惡劇や惡文學が一般の民衆を刺戟して、種々の暗示を與へることは明かな事實だ。今日の劇といふものが悉くさうであるとは云へないが、低級な民衆を相手にして、それに媚びやうとしし居る惡劇の流行は、社會のために呪ふべき傾向だ。殊に、其の種の劇が少年兒童の眼に觸れるのを、私は、ひどく怖れて居る。惡劇の流行を如何にして喰ひ止めるかといふことは、今日の社會敎育上の重要問題だ。

幕末及び明治初年印刷物

上野で中外商　新報社主催の産業文化博覧會が開かれた。よい企だ。私は早速行つて見た。新聞館といふのが特に面白かつた。

新聞が讀者の手にはいるまでの順序。先づ第一によい知識を得たのはそれだ。原稿が活字によつて印刷されるまでの順序などは、常に原稿を書いて居る者でもよく知らない。紙型とか鉛板とかいふ名は聞いて居ても、それが如何なる方法で作られるものか知らずに居る者が多い。見て置くことは、いろいろな點で參考になる。

明治初年からの新聞の變遷。これが新聞館の生命だ。小野秀雄・吉野作造・石井研堂等、明治文化資料の蒐集家として聞えた人々の出品だけに、珍らしいものが多かつた。到底外では見られないものもかなりあつた。たゞ資料を羅列しただけでなく、年代を趁つて系統的に並べてあるのがよかつた。印刷の技術といふ點からも、記事の內容といふ點からも、明治年間の文化が如何に著るしい發展をしたかといふことを思はせた。錦繪新聞の出品が割合に多かつた。これなどは慥かに過去の時代を語る遺品だ。かういふ毒々しい厭味のあるものが第一流の新聞社から出たことがあつたのだと思ふと、新聞の進歩の迅速に驚かされる。此の錦繪新聞には、ずい分あくどい俗惡なものがあつたやうだ。嘗て發賣禁示物だといふ數葉を見たが、其の中の一二葉は、直視することも出來ないやうなものだつた。何かの參考にはなると思つたが、手許へ殘して置く氣になれなかつた。

公開の展覽會だから、あまりひどいのは出て居ないやうだが、それでも感じのよいものでない。

新聞に類似せる江戸時代の印刷物。これも亦面白いものだつた。地震や大火を知らせた瓦版の印刷物が多かつた。中には敵討を報じたやうな珍らしいものもあつた。當時は何でもない印刷物だつたに違ひないが、貴重な資料として秘藏されて居るのを見ると、物の價値といふことを考へさせられる。どんなにつまらないものでも、三十年たてば珍品として扱はれる。否、つまらないものほど珍品になるのかとも思ふ。つまらないものは人が輕く取扱ふ。從つて、早く湮滅してしまふ。偶〻殘つたものが珍品扱ひをされる道理だ。大正十二年の震災に出た謄寫版刷の號外も、今では珍品になつて居ると聞いた。當時の新聞が一枚何程かの價を生ずる時もあらう。江戸時代の瓦版も今日では數が少なくなつて來たので、だんだん珍重がられ、かういふものを澤山所持して居れば世間から相當にもてはやされるやうになつて居る。

物故した新聞記者や文士の筆蹟。これを最後に見た。書畫や骨董に全然趣味のない者には、他人の書いた原稿や書簡などを蒐集して置かうと思つたこともない。併し、かうした多くの原稿や書簡が並べてあるのを見ると、人の筆蹟も面白いものだといふ感じがした。夏目漱石や正岡子規の書いたものには、特に興味があつた。河東碧梧桐氏所藏の子規の病床日記の如き、よく其の人物が現はれて居ると思つた。明治初年の戲作者の手紙が麗々しく出してあるのを見ては、かういふ人物も時を經れば、これだけ世間の人たちから何かと思ひ出されるものかと感じた。

種彦の自筆稿本

日比谷圖書館では、十月三十日から十一月一日までの三日間、柳亭種彦・喜多村筠庭・齋藤月岑の著書や遺墨の展覽會を催した。昨年以來、日比谷圖書館は、屢〻日本文化資料の展覽會を主催した。非常によい計畫だと思ふ。さうして、それは、如何にも圖書館の事業に應はしい積極的な活動だと思ふ。日本文化の研究資料も、年毎に湮滅して、今日では、江戸時代の書物のやうなものも非常に減少した。殊に、大正十二年の震災は、貴重な多くの古書を烏有に歸せしめた。古書を扱ふ有名な書店が全燒して、在庫品と共に板木までも失つたのみならず、私人の藏書も少なからぬ被害を受けた。就中、松廼家文庫の滅亡などは、惜しんでも餘りのあることだつた。「中央史壇」は、大正十三年九月に、大震火災第一週年記念號を、大正十四年九月に、同第二週年記念號を發刊し、震火災のために燒失した文獻の記錄を掲げた。勿論、それは、あらゆる方面の文獻を網羅したものではなかつた。が、其の記錄に徵しても、震火災の文獻に及ぼした損害の程度を推察することが出來た。震火災後、特に減少した古書は、骨董品的の價値を生じ、漸次、私人の書庫の奥に影を潛めるやうになつた。今日では、古書の實物を見ることが非常にむづかしくなつた。古本屋の手を經て買ひ集めやうとすれば、一冊の黄表紙にも十數圓を投じなければならない。さういふものを自由に買ひ集めることは、先づ出來ない境遇の人が多い。圖書館のやうに貴重な書畫を蒐集する便宜のあるものが、其の所藏に係はる珍書を公開し、或は個人

の藏書家から借用して、一般民衆の展覽に供するといふのは、如何なる點から考へてもよい計畫だ。

種彦も筠庭も月岑も、現在の私にはさう興味のある人々でない。併し、江戸の文化といふことに聯關して、いつも憶ひ出される人々だ。種彦は、合卷物の作者として知られ、筠庭は、「嬉遊笑覽」の編者として知られ、月岑は、「江戸名所圖繪」の上梓者として知られて居る。種彦の「諺紫田舍源氏」や「邯鄲諸國物語」は、二十年前から讀み、今日でも時々讀んで見るものだ。此の展覽會で私が最も興味を感じたのは、種彦自筆の稿本だつた。それには、一々下繪がはいつて居た。昔の作者が細かい點までも注意したことを痛切に感じた。畫は何れもみな非常にうまく、素人離れがして居た。それは、さうありさうなことだ。種彦は、多才多藝な人だつた。本名は、高屋彦四郎知久、幕府に仕へて二百俵の祿を食む武士でありながら、好める道とて、畫を學び、狂歌・狂句を詠じ、遂には、戲作者として大成した。「水揚帳」といふ如何はしい書物を著はして、幕府の咎を受けた時、町奉行遠山左衛門尉から呼び出され、其の方の宅には、柳亭種彦といふ者が居て、怪しからぬ書物を著はしたさうだ。速かに追ひ出してしまへと言ひ渡されたといふ面白い話もある。幕府の專制時代にも、かうした名判官が居たかと思ふと、政治も制度の問題ではなくて、結局は人の問題だ。種彦が木卯といふ號で柳樽等に多くの川柳を遺して居ることは、此の展覽會ではじめて知つた。

種彦のことは、あまりよく知らない。調べて見やうと思つたこともない。たゞ自筆の稿本を見て、江戸時代の作家の生活に興味を感じたのみである。

月岑の法會

展覽會の當日、同じく日比谷圖書館が主催して、種彦の法會を赤坂一ツ木の淨土寺に、筠庭の法會を淺草新谷町田甫の幸龍寺に、月岑の法會を同じく淺草北清島町の法善寺に於て行つた。

當日、私は、淺草の方へ行つた序に、法善寺をたづねて見た。清島町の停留所から少しはいつたところに報恩寺といふ寺があつて、法善寺は、其の寺の中にあるときいた。報恩寺は、直にわかつたが、法善寺は、容易にわからない。報恩寺の中には、前にも後にも何々寺と表札を出した寺が非常に澤山あつた。其の寺の中から出て來た和尙らしい白髯の老人にたづねて漸く探し當てた。小學校の裏手ある小さい寺だつた。

門には、齋藤月岑追弔會といふやうな文字を書いた紙が貼りつけてあつた。此の寺に間違ひないと思つて門の中へはいつて見た。ひつそりと靜まり返へつて居る。時間は、一時といふのであるが、電車を降りた時にも う二時だつた。法會は、濟んでしまつた事と思つて、歸らうとすると、奥の方から蚊の啼くやうな讀經の聲が聞えて來た。併し、私は、中へはいるのを一寸躊躇した。餘りに靜か過ぎた。一族の者だけの參會者ではないかと思つた。其の中へ交るのも面白くないやうな氣がしたからだ。

しばらく庭に立つて居た。午後の日は明るく照り輝やいた。バラックの寺の屋根や、墓場の間に並んだ卒塔婆などを眺めて居ると、震災當時のことが思ひ出された。さうしてまた安政の震災に、齋藤月岑が毎日市中を歩

いて記錄を殘さうと努力したことなどが聯想された。私は、月岑のことをよく知らない。此の法善寺に葬られて居ることさへも、はじめて知つた位のものだ。併し、七十餘年の生涯に、かなり有益な著書を殘して居る人だといふことが私を此の寺の門前まで引きつけた。有名な「江戸名所圖繪」は、月岑の著作でない。月岑は、たゞ先代の著作を增補して上梓しただけだ。此の著書二十卷を刊行するに、約十五箇年を費やしたといふことを何かで讀んだ。活字のない昔は、書物の刊行が今日ほど樂に出來なかつたが、此の書のやうに多くの挿繪のはいつたものは、特に困難なことであつたかと思はれる。月岑が種々の苦心をして、これを刊行して置いた爲めに、東京が再三の災厄を受けても、「江戸名所圖繪」は、所々に其の刊本が殘つて居る。今では、一般の人々には讀まれない書物になつたが、昔の東京を研究しやうとするには、どうしても見なければならぬ文獻だ。月岑のやうな事業は、書物に對する深い愛着心をもつた人でなければ出來ない。書物に愛着心のない者は、祖先の秘藏した典籍を散佚せしめ、貴重な稿本を反古にしてしまふ。さうして、今までにどれだけ多くの文獻が湮滅して居るかわからない。月岑のやうな後繼者をもてる「江戸名所圖繪」の著者は幸福である。月岑には、外に「東都歲事記」「武江年表」「聲曲類纂」といふやうな編著がある。私は、これ等の書物を一つも讀んで居ない。「武江年表」などは、今度の展覽會で、はじめて實物を見た位のことである。

齋藤月岑と云つても、今日では其の名を記憶する者が少なからう。「江戸名所圖繪」と云つても、知らない人が多からう。法善寺の庭に立つて、讀經の聲をきゝながら、私は、いろいろなことを回想した。

一茶の遺墨展覽會

十一月二十四日から二十八日まで、松屋呉服店の七階に於て、東京日々新聞主催の一茶遺墨屋覺會が開かれた。出品數から云つても、近來罕なよい展覽會だつた。一茶一代の全集を肉筆　見る心地がした。

一茶の文字や俳畫は、寫眞版に複製されたものを書物や雜誌の挿繪によつて度々見て居るが、自筆を見たことはなかつた。文字も繪も非常に面白く感じた。一茶の人物がよく現はれて居るやうに思つた。「ひゐき目に見てさへ寒きそぶりかな」といふ句のある自畫像の如きは、これまでに時々雜誌等に出て居たものだが、自筆の畫を見ると、また一入の趣あることを感じた。手紙の中にも一茶の面目をよく發揮したのがあつた。

一茶の遺墨もかなり骨董好の貴族や富豪の手に渡つて居るやうだ。「五十にして冬籠りさへならぬなり」といふほど生涯貧乏な生活をして、自ら信濃の國乞食首領と戯書したことさへある一茶の遺墨が、一枚何十圓か何百圓に賣買されて貴族とか富豪とかいはれる者に珍重せられると云ふのは、考へて見れば不思議な世の中だ。一茶も地下で定めし苦笑して居ることだらう。「故郷や寄るもさはるもばらの花」「雪の日や故郷人のぶあしらひ」と住み心地のよい所のないのをかこちた一茶のなぐり書きした手紙のはしくれが、かうした東京の眞中の宏壯な文明式の建物の中に陳列されて、多くの紳士淑女に賞讃されやうとは、生前の一茶が夢にも思はなかつたことだらう。一茶の靈もこれでは戸惑ひをせずには居られまい。併し、一茶の靈は、バーナード・ショウのや

うに、皮肉な警句を吐いて、後世の衆愚を罵倒するやうなこともなからう。と云つて、大して喜びもすまい。土の中から生れ出たやうな素朴な心で、移りゆく世相を眺めて居るだらう。

一茶は、繼子として生長した。若い時から腹ちがひの母子の間の醜い爭ひを體驗した。有名な「父の終焉日記」の享和元年四月二十八日のところなどを讀むと、一茶の生長した家庭といふものが思ひやられる。かういふ不和な家庭に人となり、一生を不遇と貧乏の中に終つた一茶は、ひがみの多い性癖の人間になつた。自ら自然や人事を皮肉に觀察して、ともすれば、世の中を冷眼視しやうとした。併し、彼は、世の中といふものに全く背いてしまはなかつた。人間の世の中から離れて、ひとりぼつちとなり、枯淡な生活をしやうとはしなかつた。如何にぶあしらひな待遇を受けても、不運な目に逢つても、彼は常に人間といふものに親しみをもち、人の社會に興味をもつて居た。彼は、罕に見る人間味の豐かな民衆詩人だ。一茶の句には、厭世的なところがない。皮肉や洒落の中に輝やいて居るのは、涙のにじんだ樂天的な人生觀だ。

一茶は、最も孝行な子で、最も子を愛する親だつた。「父の終焉日記」は、何人にも涙なくして讀めない文字だ。「寢姿の蠅追ふも今日が限りかな」これは其の中にある句の一つだ。かくまで悲痛なひゞきのこもつた文字は少ない。また一茶の句集を見ると、子どもを題材とした句が非常に多い。さうして、其の句には、何れもみな子どもを愛する親の眞情が溢れて居る。句ばかりではない。文章にもよく子どものことを書いた。子としては孝、親としては慈、それによつて人間としての一茶が推しはかられる。

舞臺に上つた鬼熊劇

十一月十七日に、觀音劇場で、伊井一座の「密林鬼」といふものを見た。これは、いふまでもなく、最近、千葉縣に起つて、世の中を騷がした捕物の事實を脚色したものだ。事件がまだ新らしいだけに一寸興味を惹いた。日々の新聞を賑はした彼の事實が、如何に取扱はれて居るか。觀客がそれに對して如何なる興味をそゝられつゝあるか。と云ふことを知つて置くのは、種々の意味に於て必要なことだと私は思つた。劇としての價値、演技の功拙、さういふ問題を離れて、外に考へなければならぬ問題が含まれて居るからだ。

「鬼熊」の名は、近頃最もよく民衆に徹底したものだ。民衆に徹底した點では、「出齒龜」の名と好一對をなすものだ。鬼熊の事件ほど、早く映畫化され劇化されたものは少なからう。伊井一座の「密林鬼」は、東京で舞臺に上つた鬼熊劇のはじめだ。民衆藝術の歴史をあとで考へる材料としても一瞥して置きたいと思つた。

「密林鬼」は、殆ど新聞の記事其のまゝだつた。出て來る巡査をみなよい人物に見せるやうに、多少の修飾が加はつて居たのみだ。人物の名までが一見してわかるやうな變名にしてあつた。筋書のはじめにかうある。「序幕、料亭月の家座數。土地の顏役半藏が、酌婦お種とお米を對手に酒を飲んで居る。お清の姿が見えぬがどうしたと言ふ。お清さんは、大變な賣つ兒で、牡丹に櫻と兩手に花だと言ふお種の言葉に、大した景氣だなと半藏は感心した。だが片つ方の對手は知らねえが、丑公なら牡丹や櫻の代物ではない。外の相手は一體誰だと不

審がる。お米は笑ひながら、其の片つ方の對手は、中澤の龜松です、でも丑さんは親切なんだと同情する。お種はそれを打ち消すやうに、だから餘計女から馬鹿にされる。此の前のおかなさんだつて、自分が身請をして勇七さんに取られてしまつた。考へて見れば氣の毒な人だと云ひつゝ、お米は德利を持つて去る。」此の劇が如何に生々しい事實を其のまゝ舞臺に上せた際物だといふことは、右の筋書の一節によつてもわかる。觀客はみなこれを劇として見ず、事實談として見て居る。山倉丑造といふ主人公に對しても、「熊さん」といふ聲が絶えず大向ふからかゝる。

熊さんの丑造に對する觀客の同情は、非常に盛んなものだつた。丑造は、同情の集まるやうな人間に作られて居た。彼は粗末な衣服を着た汚ない醜男で、純眞な正直者だつた。女のことで暴れて巡査に誠められた時に「おれは醜男だ。學問もない。金もない。たゞ此の力があるだけだ。」といふあたりは、強く同情を惹くものがあつた。

此の劇を見て、私の切に感じたのは、俗受本位の芝居として、成切する多くの要素を含んで居るといふことだつた。痴情、殘忍、捕物、自殺等、強い刺戟を與へる事柄がいくつか集まつて居る。默阿彌などがいつも取扱つた材料と同じだ。默阿彌の芝居が今でも面白がられて居るやうに、鬼熊の事件はこれからいつまでも映畫劇や舞臺劇の題材となるであらう。心からの惡人でなかつたことが、現在でも多くの同情をあつめて居る。年代を經るに從つて、漸次美化されるであらう。かくして鬼熊は遂に永遠の勝利者となつた形だ。

春宵小言

×

出版界に不景氣がたゝつて、いろいろな方面にいろいろな傾向が現はれて來た。一圓叢書の流行なども其の一つだ。

×

改造社が三百頁一圓を標榜して、「現代日本文學全集」を出したら、其のあとから、新潮社は、五百頁一圓の「世界文學全集」で、大にメートルを上げた。然るに、平凡社は、一千頁一圓の「現代大衆文學全集」の廣告をして、讀書界を驚ろかした。

×

「世界文學全集」の廣告を見て、「現代日本文學全集」の購讀を中止した者がかなり多かつたといふ話を聞いた。書物は、必ずしも讀むために買ふものでないといふことが、よく證明されたわけだ。

×

一千頁の一圓といふのは、何としても廉いものだ。廉いから買つて置くといふ氣になる。必要不必要の問題ではない。大衆文學のやうなものは、何十冊も揃へて置く必要のないものだ。面白さうなものを一冊づゝ買つて讀めばよい。新聞の續きものでもよい。活動寫眞になつたのを見れば、手取り早くて尙ほ一層よい。さうした性質のものではあるが、一千頁一圓ときくと、買つて置く氣になる。これが叢書でなくて、一冊づゝ買へるなら、讀者はどんなに幸福であらう。

×

廉い一圓叢書の續出する傍では、非常に高價な書物が相次いで出版される。明治文化研究會の「日本耶蘇會刊行書志」の如きは、其の一つであらう。かうした特殊な出版物も讀書界から相當な歡迎を受けて居る。赤堀又次郎氏の「日本文學者年表」や大槻如電氏の「新撰洋學年表」のやうな久しく絶版になつて居た名著も、みな新裝して現はれた。面白い現象だと思ふ。

×

出版界が不景氣になればなるほど、非常に廉い一般的な書物と、非常に高價な特殊の書物とが多くなり、中間の雜書がだんだんと影を潜めて行くのではないかと思はれる。それは讀書界のために惡いことだとも考へられない。

不景氣になつて、出版の數は、慥かに減少して來た。「讀賣新聞」の今日の新刊を見て居ても、さういふことが痛感される。此頃出版されるものには、中學校の受驗準備書や、パンフレットに類する書物が多い。相當の分量をもつ著書が非常に少なくなつた。殊に少なくなつたのは哲學書だ。今では、哲學が全く下火になり、哲學書の新刊をもつて行くと、取次の書店がいやな顏をするといふ話を、或る出版業者から聞いた。學問にまではやり廢りがあつては困つた次第だ。併し、時勢といふものは如何ともし難い。

×

特別に廉い書物と、特別に贅澤な書物のみが歡迎せられるやうになれば、最も困るのは、中流の出版業者と、原稿生活をして居る者だ。早く云へば、出版業といふものが、大資本の力によつて支配されることになるのだ。さうして、著者が資本のために驅使せられることになるのだ。從來でも、著者は、出版業者のために種々の壓迫を受けて居た。これからは、その傾向が更に一層甚だしくなるであらう。注目すべき問題だと思ふ。

（二・三・一四）

四方山の話

四方山のはなし

秋の夜長の四方山ばなし、聽いてきゝすてにして置くべき閑話の五つ六つを、掲げることにした。

1　武藏野の逃げ水

武藏野の逃げ水といふことは、かなり古くから、歌や詩にうたはれて居るが、私はまだ一度も見ない。私はかれこれ三年半も中野に住んで居るが、朝や夕方に人家を遠く離れた武藏野の中を歩くやうな機會がないからである。私はまた時々田舍から來る農夫や、近所の老人に向つて、此の逃げ水のことを聞いて見るが、みな知らないと云つて居る。武藏野の逃げ水は、今でも昔のやうに現はれるものであらうか。長く武藏野に居ても、多くの人は氣づかないのであらうか。

逃げ水といふのは、野中を歩く人の前へ急に川が現はれることである。朝早く野中の道を歩いて居ると、今まで嘗て一度も見なかつた川が眼の前に現はれる。川には白く水が滿ちて居る。前へ進むのを躊躇する。その中に向ふから來る人を見ると、其の川の中を歩いて居るやうに、腰から下が水に浸つて見えない。だんだん其の人が近寄つて來るので、水の有無を問ふと、ないと答へる。そこで思ひきつて進んでゆくと、川が次第に向

ふの方へ逃げてゆく。此の逃げ水は、多く朝の間に現はれるもので、太陽の光線が強く輝やくやうになれば、自ら跡方もなく消えてしまふ。時としては夕方になつてから現はれることもあるが、これは極めて罕に見る例であつた。

齋藤鶴磯翁の「武藏野話」には、二編のはじめに此の逃げ水のことが出て居る。其の中に「僕はその地に住居せしゆへ、春の末夏のはじめにたびたび見たる事あり。」とある。其の地とは所澤を指すのである。齋藤鶴磯翁は、寛政八年の頃から文化十二三年の頃まで、二十年の間所澤に住居し、武藏の諸郡を旅行して、歷史上・地理上に有益な考證を試みた學者であつた。「武藏野話」は、其の間の產物である。武藏野の研究者や旅行者によつて最も貴重な文獻と認められて居る。此の書が今日までも武藏野の愛好者に喜ばれて居るのは、一々實地の踏査によつて書かれて居ることと、武藏野に關するあらゆる古書を涉獵引用してあること、非常に趣味のある繪畫が澤山に挿入してあること等である。武藏野は、齋藤鶴磯翁によつて一層世人に注意を與へると共に、「武藏野話」は齋藤翁の名を後世に高からしめた。

「武藏野話」には、逃げ水の現はれる場所について、「昔より云ひつたふるは、多摩郡小金井村の邊より田無村のほとりまでの原にて、度々見たりし人ありしと。今は此のほとり新田村々いできてより見ることなしといふ。近ごろは野呂澤村の原より來り、留村・永井村の交の野又は留村より北大野原の邊にてをりをり見る事あり。」とある。逃げ水は人家が多くなると現はれないものであると此の書にも記してある。今日でも果して留村又は

永井村の邊に此の現象を見ることが出來るかどうか疑はしい。

逃げ水の正體に就いて「武藏野話」の著者は云ふ。「一體は原中の氣にして、夜中土中よりむし昇りし烟靄の一面に引きわたしたるを、風にて地上に吹きしくゆへ、自然と白く水のごとく見ゆるなり。」鳥居龍藏博士が「武藏野話」を賞揚せる文の中に、「武藏野の自然地理・氣象たる逃げ水をミラージを以て說明せられたるが如きは、先生の卓說に敬服せねばならぬ。」とある。

武藏野の逃げ水は、科學の上から見れば、珍らしいことではあるまいが、平原に起る神祕的な現象の一つであらう。今日のやうに科學思想の進んで居なかつた昔、これが不思議な事として多くの人々の興味をそゝつたのも、さう不自然な話ではない。

2 鉢の木

「尋常小學國語讀本」の卷十を見ると、「鉢の木」といふ一文が出て居る。これは謠曲から採つた題材であること云ふまでもない。文章の上にも謠曲のにほひを殘さうとした點がはつきりとわかる。たゞの讀みものとしては少しくどい謠曲の文章をなるべく簡單に略し、さうして原文のにほひを殘さうとつとめた點が所々に見えて居る。「かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一ぴきつないでもつてをります。唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも此の具足に身を固め、さび